

しい
椎
しい
椎
うえ
上

や
屋
や
屋

の

かた
形
かた
形

第
第
はる
原

1 遺 跡
2 遺 跡
遺 跡

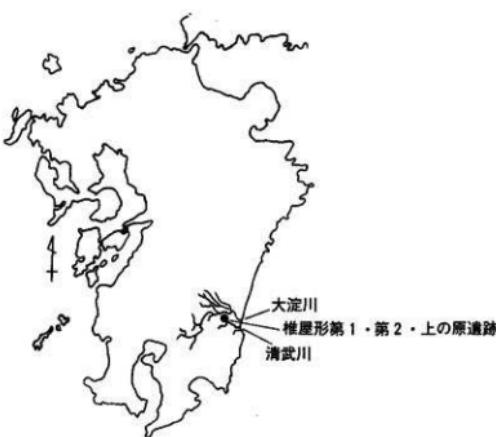
県営農地保全整備事業時屋地区に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1 9 9 6

宮崎市教育委員会

しい椎
しい椎
上
や屋
や屋
の
かた形
かた形
原
はる原
1 遺
2 遺
遺
跡 跡 跡

県営農地保全整備事業時屋地区に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



1 9 9 6

宮崎市教育委員会

序

宮崎市は、第2次宮崎市総合計画（昭和61年度から平成12年度）の中で、「活力とうるおいのみちた文化の香り豊かなまち・・・みやざき・・・」を目標とする都市像としております。その都市像を構成する基本目標の1つとして「活力と魅力にみちたまち」を掲げ、ほ場整備、用排水路整備、農道整備、農地防災等の農業生産基盤の整備を実施しているところであります。

これらの整備の一環として、平成元年度から、宮崎市と清武町にまたがる時屋地区において、県営農地保全整備事業が行われておりますが、この地区内には埋蔵文化財の包蔵地が数多く存在しています。これらの埋蔵文化財の取扱いについては、十分協議を重ね、文化財保護に対するご理解とご協力をお願いしているところでありますが、工事により止むを得ず消滅するこれらの埋蔵文化財については、事前に記録保存が必要となり、平成3年度から5年度にかけて「椎屋形第1遺跡」「椎屋形第2遺跡」「上の原遺跡」の発掘調査を実施いたしました。

本書は、これらの発掘調査記録であります。調査の結果、旧石器時代、縄文時代草創期・早期、弥生時代中期～後期の遺構と遺物が多数確認され、当地の歴史を解明する上で重要な資料を得ることができました。

本書が、地域歴史の正しい認識と理解、文化財保護思想の普及の一助となり、さらに学術研究の資料としてご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査に際しましては、地元の方々をはじめ、関係者の皆様には一方ならぬご尽力を賜りました。皆様に対し、心より厚く御礼申し上げます。

平成8年3月

宮崎市教育委員会

教育長 稲 倉 宗 知

例　　言

- 1 本書は、宮崎県中部農林振興局が宮崎市大字細江～宮崎郡清武町大字船引に計画した県営農地保全整備事業時屋地区の場所整備に伴う事前調査として、宮崎市教育委員会が実施した椎屋形第1遺跡・椎屋形第2遺跡・上の原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書に使用した位置図は、国土地理院発行の2万5千分の1図をもとに作成し、周辺地形図等は中部農林振興局作成の千分の1図をもとに作成した。また、掲載した遺構図等は各調査員が発掘作業員及び県文化課職員の協力を得て主に実測し、一部測量業者等に委託したものについても各調査員が訂正加筆し補正している。
- 3 遺物・図面等の整理は、宮崎市歴史文化館及び宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターで行い、掲載した図面等の作成は、各調査員が整理補助員等の協力を得てこれを行った。
- 4 各遺跡におけるテフラ分析等自然科学分析は、有限会社 古環境研究所に委託した。
- 5 本書に使用した方位は主に磁北（M.N.）であり、位置図など一部は座標北（G.N.）である。また、本書では、掘立柱建物跡をS B、竪穴住居跡等をS A、土坑をS C、周溝状遺構をS L、集石遺構をS Iと表示している。土器の色調や土層については、農林省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」に準拠した。石材同定は、主に宍戸 章氏の御教示による。
- 6 本書に使用した写真は、航空写真を株式会社 スカイサーベイに委託したほかは、各調査員が撮影した。
- 7 本書の執筆は各調査員が分担して行い、編集は共同で行った。文責は、本文目次に明記している。
- 8 遺物・図面等は、宮崎市歴史文化館で保管する予定である。

本文目次

第Ⅰ章 はじめに	(著付)	1
第1節 調査に至る経緯	1	
第2節 調査の組織	1	
第3節 遺跡の位置と環境	2	
第Ⅱ章 椎屋形第1遺跡の調査	(著付)	4
第1節 調査区の設定と調査の概要	4	
第2節 調査の記録	4	
1 層序	4	
2 A地区の調査	7	
1 縄文時代の遺構と遺物	7	
(1) 草創期	7	
(2) 早期	8	
2 弥生時代の遺構と遺物	23	
(1) 掘立柱建物跡 (S B)	23	
(2) 竪穴住居跡等 (S A)	29	
(3) 周溝状遺構 (S L)	42	
(4) 土坑 (S C)	42	
(5) 出土土器	48	
3 B地区の調査	54	
1 縄文時代の遺構と遺物	54	
(1) 早期	56	
4 自然科学分析調査の結果	59	
第3節 まとめ	63	
第Ⅲ章 椎屋形第2遺跡の調査	(重山)	79
第1節 調査区の設定と調査の概要	79	
第2節 調査の記録	79	
1 層序	79	
2 縄文時代早期の遺構と遺物	82	
1 土坑	82	
2 炉穴	90	
3 集石遺構	98	
3 自然科学分析調査の結果	136	

第3節	まとめ	145
第IV章	上の原遺跡の調査 (重山)	155
第1節	調査区の設定と調査の概要	155
第2節	調査の記録	155
1	層序	155
2	旧石器時代	161
3	縄文時代	161
1	草創期	161
2	早期	161
4	自然科学分析調査の結果	173
第3節	まとめ	181

挿 図 目 次

第1図	時屋地区遺跡位置図	3
第2図	椎屋形第1遺跡調査区及びグリッド設定図	5
第3図	椎屋形第1遺跡基本土層柱状図及びA地区土層断面図	6
第4図	椎屋形第1遺跡A地区 草創期調査区	9・10
第5図	椎屋形第1遺跡A地区 草創期遺物平面分布・垂直分布図	9・10
第6図	椎屋形第1遺跡A地区 主要草創期土器平面・垂直分布図	11・12
第7図	椎屋形第1遺跡A地区 草創期土器実測図(1)	13
第8図	椎屋形第1遺跡A地区 草創期土器実測図(2)	14
第9図	椎屋形第1遺跡A地区 草創期土器実測図(3)	15
第10図	椎屋形第1遺跡A地区 主要草創期石器平面・垂直分布図	19・20
第11図	椎屋形第1遺跡A地区 草創期石器実測図(1)	21
第12図	椎屋形第1遺跡A地区 草創期石器実測図(2)	22
第13図	椎屋形第1遺跡A地区及び西側工事区出土早期土器実測図	22
第14図	椎屋形第1遺跡A地区 弥生時代遺構分布図	24
第15図	椎屋形第1遺跡A地区 S B 1～2 実測図	26
第16図	椎屋形第1遺跡A地区 S B 3～4 実測図	27
第17図	椎屋形第1遺跡A地区 S B 5～6 及び S B 6周辺出土土器実測図	28
第18図	椎屋形第1遺跡A地区 S A 1～2 実測図	30
第19図	椎屋形第1遺跡A地区 S A 1出土土器実測図	31
第20図	椎屋形第1遺跡A地区 S A 3 実測図	32
第21図	椎屋形第1遺跡A地区 S A 1～4 出出土器実測図	33

第22図	椎屋形第1遺跡A地区	S A 4 ~ 6・14実測図	34
第23図	椎屋形第1遺跡A地区	S A 5、6・14、7出土土器実測図	36
第24図	椎屋形第1遺跡A地区	S A 7 ~ 9実測図	37
第25図	椎屋形第1遺跡A地区	S A 10~12実測図	38
第26図	椎屋形第1遺跡A地区	S A 8 ~ 11出土土器実測図	40
第27図	椎屋形第1遺跡A地区	S A 13、17実測図	41
第28図	椎屋形第1遺跡A地区	S A 15・16・18・19実測図	43
第29図	椎屋形第1遺跡A地区	S A 11~13、15~17出土土器実測図	44
第30図	椎屋形第1遺跡A地区	S A 19、S L 1、S C 2出土土器実測図	45
第31図	椎屋形第1遺跡A地区	S L 1、S C 1実測図	45
第32図	椎屋形第1遺跡A地区	S C 2実測図	46
第33図	椎屋形第1遺跡A地区	S C 2土器片利用部位状況図	47
第34図	椎屋形第1遺跡A地区	住居跡出土石器実測図	51
第35図	椎屋形第1遺跡A地区	住居跡出土石器・鉄器実測図	52
第36図	椎屋形第1遺跡B地区	縄文時代早期遺構分布図	55
第37図	椎屋形第1遺跡B地区	早期土器実測図	57
第38図	椎屋形第2遺跡	周辺地形図	80
第39図	椎屋形第2遺跡	基本土層図	81
第40図	椎屋形第2遺跡	土坑・炉穴分布図	83-84
第41図	椎屋形第2遺跡	土坑実測図(1)	85
第42図	椎屋形第2遺跡	土坑実測図(2)	87
第43図	椎屋形第2遺跡	土坑実測図(3)	88
第44図	椎屋形第2遺跡	土坑実測図(4)	89
第45図	椎屋形第2遺跡	炉穴実測図(1)	91
第46図	椎屋形第2遺跡	炉穴実測図(2)	94
第47図	椎屋形第2遺跡	土坑内出土遺物実測図(1)	96
第48図	椎屋形第2遺跡	土坑内出土遺物実測図(2)	97
第49図	椎屋形第2遺跡	炉穴内出土遺物実測図(1)	99
第50図	椎屋形第2遺跡	炉穴内出土遺物実測図(2)	100
第51図	椎屋形第2遺跡	炉穴内出土遺物実測図(3)	101
第52図	椎屋形第2遺跡	炉穴内出土遺物実測図(4)	102
第53図	椎屋形第2遺跡	炉穴内出土遺物実測図(5)	103
第54図	椎屋形第2遺跡	集石遺構分布図	107-108
第55図	椎屋形第2遺跡	集石遺構実測図(1)	109
第56図	椎屋形第2遺跡	集石遺構実測図(2)	110
第57図	椎屋形第2遺跡	集石遺構実測図(3)	111

第58図	椎屋形第2遺跡	集石遺構実測図(4)	112
第59図	椎屋形第2遺跡	集石遺構実測図(5)	113
第60図	椎屋形第2遺跡	集石遺構実測図(6)	114
第61図	椎屋形第2遺跡	集石遺構実測図(7)	115
第62図	椎屋形第2遺跡	集石遺構実測図(8)	116
第63図	椎屋形第2遺跡	集石遺構内出土遺物実測図(1)	117
第64図	椎屋形第2遺跡	集石遺構内出土遺物実測図(2)	118
第65図	椎屋形第2遺跡	包含層出土遺物実測図(1)	121
第66図	椎屋形第2遺跡	包含層出土遺物実測図(2)	122
第67図	椎屋形第2遺跡	包含層出土遺物実測図(3)	123
第68図	椎屋形第2遺跡	包含層出土遺物実測図(4)	124
第69図	椎屋形第2遺跡	包含層出土遺物実測図(5)	125
第70図	椎屋形第2遺跡	包含層出土遺物実測図(6)	126
第71図	椎屋形第2遺跡	包含層出土遺物実測図(7)	127
第72図	椎屋形第2遺跡	石器実測図(1)	130
第73図	椎屋形第2遺跡	石器実測図(2)	131
第74図	椎屋形第2遺跡	石器実測図(3)	132
第75図	椎屋形第2遺跡	石器実測図(4)	133
第76図	椎屋形第2遺跡	石器実測図(5)	134
第77図	上の原遺跡	周辺地形図	156
第78図	上の原遺跡	基本土層図	157
第79図	上の原遺跡	C区・D区土層断面図	157
第80図	上の原遺跡	A区北側・D区グリッド配置及び遺構配置図	158
第81図	上の原遺跡	A区南側グリッド配置図	159
第82図	上の原遺跡	B区グリッド配置及び遺構配置図	160
第83図	上の原遺跡	集石遺構実測図	161
第84図	上の原遺跡	B区遺物分布図	162
第85図	上の原遺跡	C区遺物分布図	163
第86図	上の原遺跡	D区遺物分布図	163
第87図	上の原遺跡	旧石器時代遺物実測図(1)	164
第88図	上の原遺跡	旧石器時代遺物実測図(2)	165
第89図	上の原遺跡	縄文時代草創期遺物実測図	166
第90図	上の原遺跡	縄文時代早期遺物実測図(1)	167
第91図	上の原遺跡	縄文時代早期遺物実測図(2)	168
第92図	上の原遺跡	縄文時代石器実測図(1)	169
第93図	上の原遺跡	縄文時代石器実測図(2)	170

表 目 次

表1	椎屋形第1遺跡A地区	縄文時代草創期土器観察表(1)	16
表2	椎屋形第1遺跡A地区	縄文時代草創期土器観察表(2)	17
表3	椎屋形第1遺跡A地区	縄文時代草創期石器計測表	18
表4	椎屋形第1遺跡A地区	縄文時代早期石器計測表	23
表5	椎屋形第1遺跡A地区	弥生時代遺構一覧表	25
表6	椎屋形第1遺跡A地区	弥生土器観察表(1)	49
表7	椎屋形第1遺跡A地区	弥生土器観察表(2)	50
表8	椎屋形第1遺跡A地区	弥生時代石器計測表	53
表9	椎屋形第1遺跡B地区	集石遺構一覧表	56
表10	椎屋形第1遺跡B地区	縄文時代早期土器観察表	58
表11	椎屋形第2遺跡	土坑内出土遺物観察表	103
表12	椎屋形第2遺跡	炉穴内出土遺物観察表(1)	104
表13	椎屋形第2遺跡	炉穴内出土遺物観察表(2)	105
表14	椎屋形第2遺跡	集石遺構一覧表(1)	119
表15	椎屋形第2遺跡	集石遺構一覧表(2)	120
表16	椎屋形第2遺跡	集石遺構内出土遺物観察表	120
表17	椎屋形第2遺跡	包含層出土遺物観察表(1)	127
表18	椎屋形第2遺跡	包含層出土遺物観察表(2)	128
表19	椎屋形第2遺跡	包含層出土遺物観察表(3)	129
表20	椎屋形第2遺跡	石器計測表(1)	135
表21	椎屋形第2遺跡	石器計測表(2)	136
表22	上の原遺跡	土器観察表(1)	171
表23	上の原遺跡	土器観察表(2)	172
表24	上の原遺跡	石器計測表(1)	172
表25	上の原遺跡	石器計測表(2)	173
表26	報告書抄録		185

図 版 目 次

図版 1	椎屋形第1遺跡A地区 S A17出土種実	65
図版 2	椎屋形第1遺跡A地区	66
図版 3	椎屋形第1遺跡A地区	67
図版 4	椎屋形第1遺跡A地区	68
図版 5	椎屋形第1遺跡A地区及びB地区	69
図版 6	椎屋形第1遺跡B地区	70
図版 7	椎屋形第1遺跡A地区 繩文時代草創期土器(1)	71
図版 8	椎屋形第1遺跡A地区 繩文時代草創期土器(2)	72
図版 9	椎屋形第1遺跡A地区 繩文時代草創期石器	73
図版10	椎屋形第1遺跡A地区 繩文時代早期土器・石器及び弥生土器(1)	74
図版11	椎屋形第1遺跡A地区 弥生土器(2)	75
図版12	椎屋形第1遺跡A地区 弥生土器(3)	76
図版13	椎屋形第1遺跡A地区 弥生土器(4)及び石器(1)	77
図版14	椎屋形第1遺跡A地区 弥生時代石器(2) 及びB地区繩文時代早期出土遺物	78
図版15	椎屋形第2遺跡	147
図版16	椎屋形第2遺跡	148
図版17	椎屋形第2遺跡	149
図版18	椎屋形第2遺跡	150
図版19	椎屋形第2遺跡 炉穴出土遺物	151
図版20	椎屋形第2遺跡 炉穴出土遺物・集石出土遺物・包含層出土遺物	152
図版21	椎屋形第2遺跡 包含層出土遺物 石器	153
図版22	椎屋形第2遺跡 石器	154
図版23	上の原遺跡遺構等	183
図版24	上の原遺跡 出土遺物	184

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

県営農地保全整備（特殊農地保全整備）事業時屋地区は、宮崎市から清武町にまたがる約60haの広大な地区を対象に、県中部農林振興局が平成元年に採択、実施中の事業である。事業内容は、南九州特有のシラス台地でのほ場整備及び畑地灌漑、道・排水路の設置が中心となっている。

文化財の取扱いに関しては、事業採択の平成元年10月に中部農林振興局長名で県教育委員会文化課に文化財の所在の有無について照会があり、同課では同年12月に地区内に12カ所の遺物散布地が存在することを回答している。その後、平成3年1月には県文化課により椎屋形地区の東半部分の確認調査が実施され、協議の結果、切土部分については事前に発掘調査を行い記録保存の措置をとることとなった。文化財保護法第57条の3の工事の通知は同年8月29日付で提出され、同9月13日付で発掘調査の指示がなされている。宮崎県の場合、県営ほ場整備事業に伴う発掘調査は原則として市町村教育委員会が調査主体となって実施している。そこで、県文化課と宮崎市教育委員会文化振興課とで協議を行ったが、市文化振興課が当時多大な量の発掘調査を多く抱えていたことから、宮崎市教育委員会が調査主体となり、県文化課から調査員を派遣して調査を実施することとなった。

ほ場整備事業は、椎屋形地区の東半部分が平成3年度に、西半部分が平成4年度に、谷を越えて東側の上の原地区が平成5年度に実施され、これら宮崎市内部分のほ場整備に伴う発掘調査は、同様の理由で宮崎市が調査主体となり県の派遣職員が調査を実施するという体制で行われた。

なお、平成6年度以降は、遺跡が宮崎市と清武町とにまたがることから、両市町と県とで協議を重ねた結果、県教育委員会が調査主体となり発掘調査を実施している。

宮崎市内部分の発掘調査は、中部農林振興局と設計を担当した宮崎県土地改良事業団体連合会等を含め、いくたびか遺跡の保護と調査面積の減のための調整をはかった結果、椎屋形地区の東半部分の椎屋形第1遺跡が平成3年10月31日より平成4年2月10日まで延64日約4,500m²を調査、西半部分の椎屋形第2遺跡が平成4年10月15日より平成5年2月12日まで約4,500m²を調査、上の原地区の上の原遺跡が平成5年6月14日より平成5年9月14日まで延46日約4,200m²を調査して終了した。この間、地元土地改良区には、作付けの調整や休耕措置等多大な御協力をいただいた。

第2節 調査の組織

調査の組織は、次のとおりである。

調査依頼 宮崎県中部農林振興局

局長 中山康行（平成3～4年度）、長友士郎（平成5年度）

調査主体 宮崎市教育委員会

教育長 柚木崎 敏（平成3～5年度）

教育局長 河野 喬（平成3～4年度）、伊豆凱夫（平成5年度）

文化振興課長 瀬戸口 道（平成3～5年度）

同課長補佐 森本雍子（平成3～4年度）、白坂晃士（平成5年度）
調査総括 文化財係主幹 野間重孝（平成3～4年度）
文化財係長 井手上仁悟（平成5年度）
庶務担当 同 主事 井上治美（平成3～5年度）
調査担当 宮崎県教育委員会
文化課主任主事 菅付和樹（平成3年度）
同 主事 長友（現 重山）郁子（平成4～5年度）
調整担当 同 主査 面高哲郎（平成3年度）
同 主査 石川悦雄（平成4年度）
同 主査 菅付和樹（平成5年度）
調査協力 時屋土地改良区理事長 [] ほか同土地改良区の皆さん、宮崎県農業開発公社

第3節 遺跡の位置と環境（第1図）

宮崎平野の南西部には、鶴塚山系から延びる丘陵地帯と浸食の進んだシラス（入戸火碎流）台地が展開している。これらシラス台地の近くには、大淀川をはじめ清武川、加江田川など日向灘へ注ぐ大小河川があり、また、台地縁辺の崖や浸食小谷には所々に湧水点があるなど、台地の上は遺跡の立地上都合がよい。

時屋地区遺跡は、これらシラス台地のうち、清武川に臨む左岸台地上の椎屋形地区と上の原地区に位置する遺跡の総称である。このうち、椎屋形地区の台地は北側が丘陵地帯へと続き、その南東斜面側に椎屋形第1遺跡A地区が、谷を隔てた南側の小舌状台地にB地区がそれぞれ立地している。同遺跡の西側には、圃場整備工事中に確認できた縄文時代早期の遺跡が続き、その西端に椎屋形第2遺跡が立地している。また、同第1遺跡の東側、小河川を隔てた上の原地区の台地は、北側に丘陵地帯を負い南東方向へと広がる広大な台地となっており、西端部の上の原遺跡をはじめ上の原第1遺跡（縄文時代・弥生時代・古墳時代の遺物散布地）、同第2遺跡（縄文時代・弥生時代の遺物散布地）、白ヶ野遺跡（縄文時代・弥生時代・古墳時代・中世の遺物散布地）など十数カ所の遺跡が点々と存在している。この台地は、台地上にも湧水点が見られ、規模の大きい遺跡も見られる。平成6年度に県教育委員会が発掘調査を実施した上の原第2・第3遺跡は、縄文時代後期の堅穴住居跡群や土坑群、古墳時代前期の堅穴住居跡群、中世～近世の掘立柱建物跡群など多量の遺物とともに多くの遺構が検出されている。



第1図 時屋地区遺跡位置図

1 椎屋形第1遺跡 2 椎屋形第2遺跡 3 上の原遺跡

第Ⅱ章 椎屋形第1遺跡の調査

第1節 調査区の設定と調査の概要（第2図）

椎屋形第1遺跡は、当初の分布調査の際、北側の畑地で弥生土器が数点表面採集されたほか、南側の谷を隔てた畑地では、焼石が散乱しているのが確認された。その後の試掘調査では、遺構が検出されず、また、ゴボウ栽培のためのトレッシャーという機械による深耕が進んでいたこともあって、遺跡としては残存状況の悪い小規模のものと判断されていた。また、この遺跡の発掘調査は、時屋地区圃場整備事業の初年度でもあり、次期作付けと工事との兼ね合いから調査期間を3ヵ月間に限定されて発掘調査に着手した。遺跡の所在地は、宮崎市大字細江字椎屋形4938ほかである。

調査は、便宜上、北側の畑地をA地区、南側の畑地をB地区として、地形に合わせてそれぞれ南北方向を北からA～F、東西方向を西から1～13とグリッド設定した。そして、A地区から開始したが、表土を除去してみると、思いがけず畑地の南側を中心に弥生時代の竪穴住居跡など多数の遺構が検出されたため、これに期間の多くをとられることになってしまった。

B地区は、調査期間の関係から途中で並行して行うこととした。また、その間、A地区の調査中に北側の農道下で縄文時代草創期の隆蒂文土器が出土しているのを発見、弥生時代の竪穴住居跡等から縄文時代早期の遺物も確認されていたが、とりあえずB地区の調査を切り上げて残されたわずかな期間を草創期層の調査に費やした。

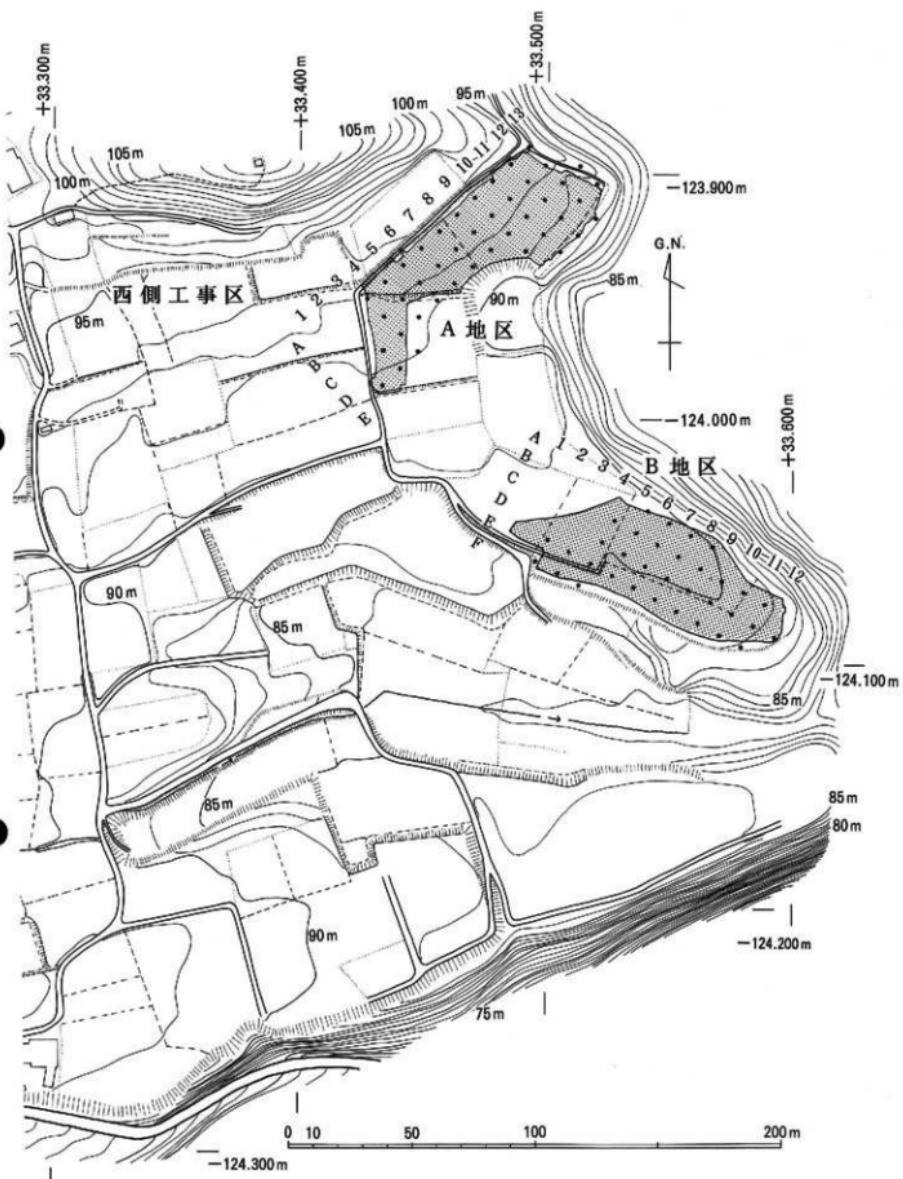
調査の結果、A地区では、縄文時代草創期の隆蒂文・爪形文土器、打製石器などの遺物と集石遺構2基（未調査）、早期の前平式土器・打製石器ほかの遺物と集石遺構1基（未調査）、弥生時代中期末～後期初頭頃の竪穴住居跡19軒・同時期と思われる掘立柱建物跡6棟・周溝状遺構1基・土坑2基が発見された。土坑のうち1基は、大甕片を再利用した箱式石棺状の施設を2段掘りの土坑に納めたもので、墓と考えられるものである。また、B地区では、かなりトレッシャーによって破壊されていたが、縄文時代早期の集石遺構が17基と該期の遺物が確認された。

第2節 調査の記録

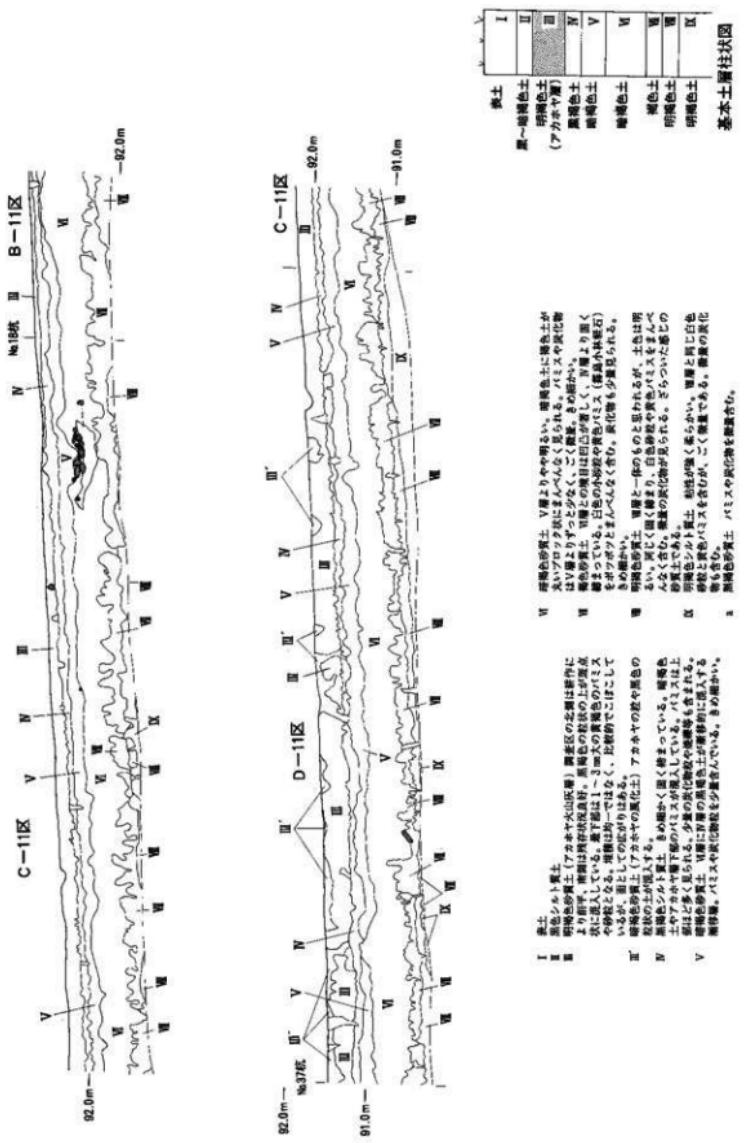
1 層序（第3図）

椎屋形第1遺跡での基本的な層序は、第3図のとおりである。このうち、IV層が縄文時代早期包含層、VI層が縄文時代草創期包含層である。また、V層のパミス（黄色・橙色輕石）は、後述のテフラ検出分析結果より、霧島火山新燃岳起源の霧島一瀬田尾輕石（約9,000年前）の可能性があるとされ、VI層・V層の黄色パミス（橙色・黄色輕石）は、霧島火山韓国岳起源の霧島一小林輕石（約1.6～1.55万年前より新しく約1.0～1.1万年前の薩摩テフラよりも古い）の可能性が考えられている。

なお、今回、基本層序の再検討を行ったため、後述の分析結果報告と層順に齟齬が生じた。分析結果のV層が今回報告のVI層に相当し、IV層目の草創期層がVI層に、II層目の瀬田尾輕石を含む層がV層に相当する。



第2図 椎屋形第1遺跡調査区及びグリッド設定図



第3図 椎型形第1迴路 基本土層柱状図及びA地区土層断面図 (No.18~29~37坑)

2 A地区の調査

1 縄文時代の遺構と遺物

A地区では縄文時代草創期と早期の遺物が確認されているが、前述のとおり弥生時代の遺構の調査に時間を取りられた結果、草創期包含層については約200m²のみの調査、早期包含層については殆ど未調査のままとなってしまった。遺憾ではあるが、分かり得た範囲で報告する。

(1) 草創期（第4図）

A地区北端の耕作により削平された箇所より隆帯文土器が発見された。そこで、わずか9日間ではあつたが、草創期層の調査を実施した。調査は、発見箇所から傾斜に沿って南側を中心、比較的出土量が少なくなる範囲までの包含層を約200m²掘り広げるにとどまった。遺物の収集が中心になり、途中検出された集石遺構2基はその位置を記録したのみである（第6図平面図中のアミがけ部分）。ただ、土層断面確認トレンチ内で検出した1基は、第3図中に断面が記してある。下のa層は集石遺構の土坑部分と見られ、径が1.1m、深さ17cm、集石部分の径は約0.9m、厚さ15cmを測る。土坑埋土中には炭化物が含まれる。

包含層は草創期単純層である。調査範囲の南端で早期の前平式土器の胴部片と思われる条痕文土器が出土したが、これは早期層の残存部分での出土である。遺物は、調査区の中央にやや纏まりがあるものの、ほぼ全面から出土している（第5図）。調査区外にも広がることは間違いない。地形的に傾斜地であるため、遺物も北から南へと傾斜して堆積している。遺物の垂直分布を第5～6・10図に掲載したので参照されたい。

遺物のうち土器は、その多くが無文の胴部片である。有文部分は殆ど口縁部周辺に限られており、わずかに1点底部片に二枚貝の押圧文が見られた（第9図63）。また、口縁部でも無文の土器片も見られた。有文口縁部は、少量の明らかな隆帯をもつ土器と多くの爪形文土器とが見られる。同一個体や無文部分を除く主なものを第7～9図に図示した。特徴等は表1～2を参照されたい。また、そのうちの主な土器の水平・垂直分布を第6図に掲載した。図中の記号の違いは、土器の文様の特徴などで簡単な形態分類を行って表したものである。

▲は、第7図1～4の粘土紐指押さえによる爪先圧痕が見られるいわゆる県南部串間市の西ノ園遺跡で出土したタイプの土器（I類）。

△は、5の無文の三角隆帯をつける土器（II類）。

□は、8～10の粘土紐を指先で挟みながら押さえつけて三角隆帯をつくる土器（爪先圧痕はわずかに見られるのみ。IV a類）。

■は11～18（17も同様か）の近接した隆帯上に爪形文（爪先圧痕文）が見られる土器（□と同じく摘んでいるが、より爪先圧痕が意識的に見られる。IV b類）。

●は、19～35の爪先圧痕を文様（爪形文）として施文する土器で、19～24は粘土帶を薄く貼り付けた上に施文したと思われるもの、25～35は粘土のたるみや貼り付けた痕跡と思われる浅い窪み、若干の肥厚などが見られる土器である（V a類）。

○は、36～45の器面にそのまま爪形文が施されたと考えられる土器である（V b類）。41は口唇部にわずかに筋状の窪みが見られたが、粘土帶貼り付けかどうか不明であったためここに入れた。

このほか、6～7は隆帯に棒状工具痕が見られるⅢ類、46～47はVb類、48～50は口唇部に太めの刻みをもつVc類、51～52は無文口縁部のVI類とし、底部は、比較的角張った平底の56～57・63をⅦa類、丸っこい平底の58～62をⅦb類と分類する。これらの土器のうちIV・V類は宮崎市南部の堂地西遺跡B区で類似のものが出土している。

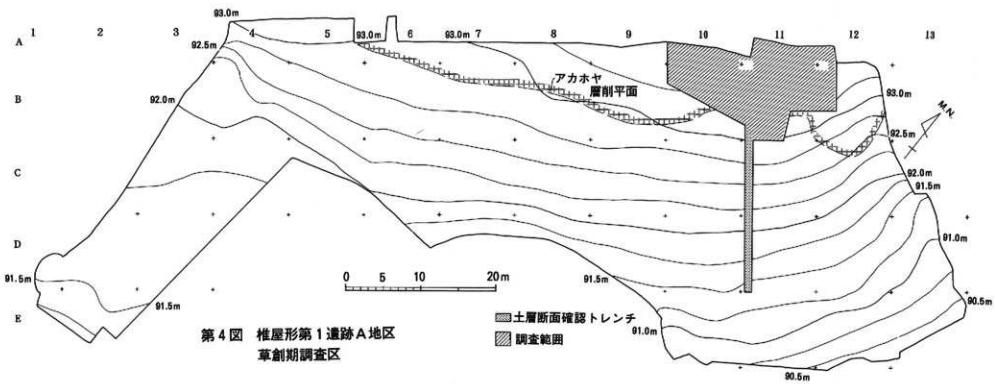
以上、大きく隆帯文と爪形文の土器があるが、垂直分布図からは層位的に分かれるような状況はつかめない。これらの器形はバケツ状の深鉢形と考えられ、底部は早期初頭の前平式系土器の角張ったはつきりした平底と違いやや丸みのある平底となる。また、34・54～55のように焼成後の穿孔が見られる土器片もあるが、前平式系土器などに見られるという椭円形の穿孔とは異なる円い穿孔である。

石器では、用途不明のシラス起源の溶結凝灰岩や焼石、黒曜石のチップが多く見られた中、表3に示すような石器が出土した。磨石状の表面が磨れた石器は見られるが、明らかに石皿と呼べるものは出土していない。また、打製石鎌の数の多さが注目される。流通品としての黒曜石では、比較的気泡の多いものが多く見られ、早期以降よく出土する大分姫島産の白っぽい黒曜石は1点も出土していない。このほか、早期以降、通常は、丸いツルツルの磨石として流通する県北産の尾鈴山酸性岩類は、ここでは打ち欠いたスクレイバー状の製品として出土した。このほかの石材は、周辺でも手に入りやすい砂岩等が多い。このうち、主なものを図化した（第11～12図）。また、その水平分布と垂直分布を図示する（第10図）。土器同様に北から南へと傾斜した堆積状況を表している。図中、打製石鎌は■で示した。

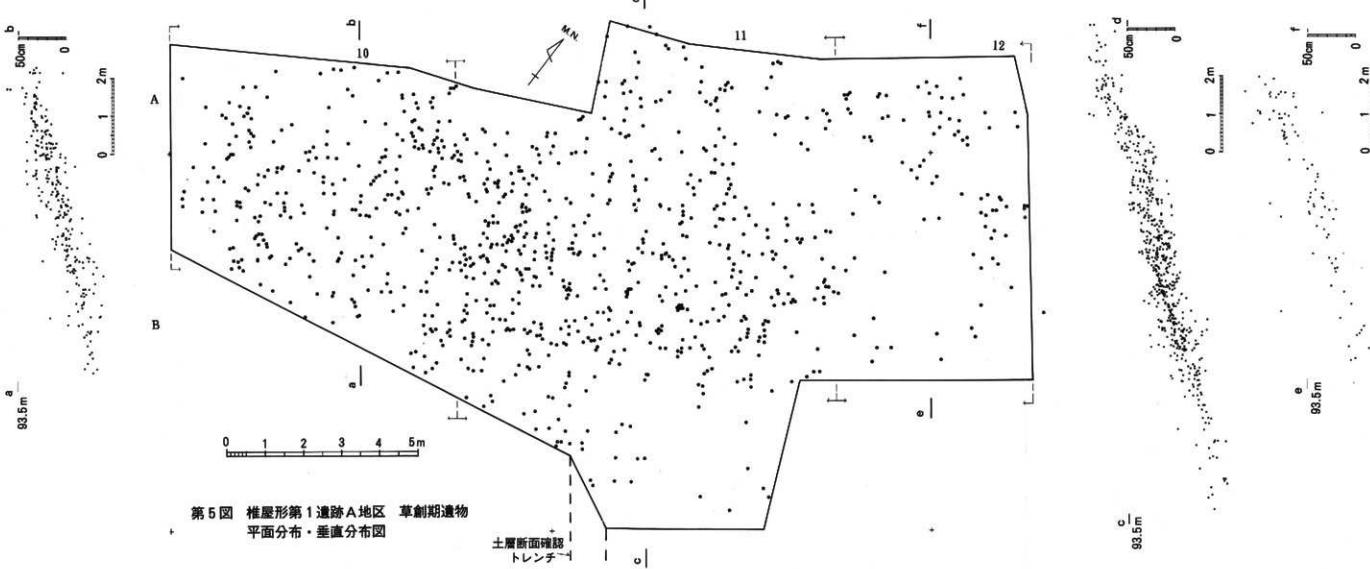
（2）早期

A地区では、草創期の調査区の南端上層と弥生時代の遺構埋土から早期の遺物が出土している。早期の遺構は、前述のとおり集石遺構が1基、草創期調査区の北西端部上層から検出されている。しかし、調査期間の関係で範囲を記録するにとどめたのみである。このように早期包含層については未調査であるが、このA地区的西側で圃場整備の工事が進行する中、掘削された法面及びその下で早期の土器片を探集した（第2図参照）。A地区に隣接する地区でもあり、A地区出土の土器と併せて図化し説明する。

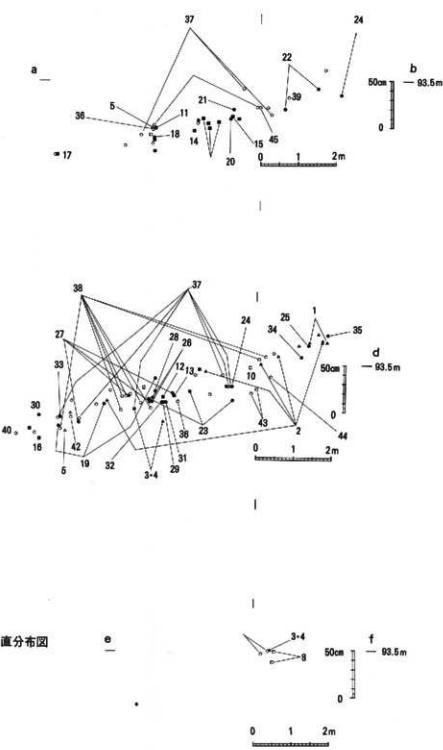
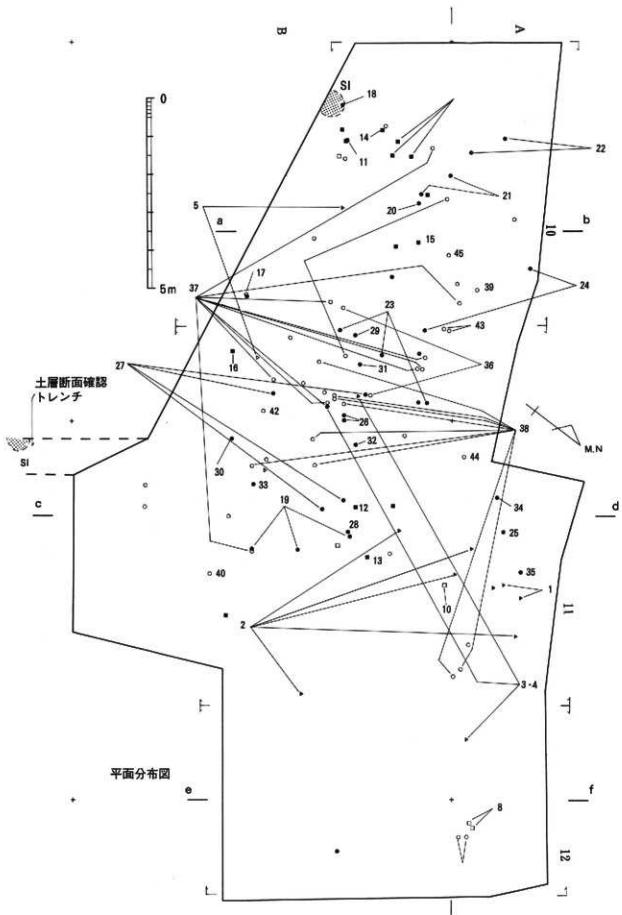
第13図1～4は、斜方向の粗い貝殻条痕文が施された前平式土器の胴部片で、草創期の調査区から出土した土器である。内面調整は、2がナデ、ほかは綫方向のヘラミガキである。2は、上部に焼成後穿孔が見られ、外面浅黄橙色、内面にぶい黄橙色を呈する。1は内外面淡黄色、3～4は外面淡黄色、内面は灰色または灰白色を呈する。5～6は、弥生時代の遺構埋土中より出土したもので、5は塞ノ神式土器の口縁部、6は平格式土器の胴部片と考えられる。5は、口唇部に浅い押圧刻み、外面に3条の沈線文を施す。内外面ともナデ調整で、にぶい黄橙色を呈する。SA7出土。6の外面は上に刺突列点文、その下は結節繩文が見られる。内面綫ナデ、内外面とも橙色を呈する。7～16は、西側の工事区で採集したもので、16を除きいずれも外面に粗い貝殻条痕文を施した前平式土器と考えられる土器片である。口縁端部の文様は、いずれも貝殻腹縁によると思われる押引文（8）、短い条痕文（7・11・12）、連続刺突文（9・10）である。ただ、7はクシ状の施文具と言った方がふさわしいかもしれない。口唇部の調整は、11がヘラミガキ、そのほかはナデもしくは丁寧なナデである。内面調整は、7・9・11～13・15がヘラミガキ、8・10・14が丁寧なナデである。丁寧なナデの中には、ヘラミガキの単位が分からず、摩耗して光沢も失われたものを含んでいる可能性がある。色調は、それぞれ7が内外面ともにぶい黄橙、8は外面にぶい橙、内面にぶい黄橙、9は内外面とも橙、10は外面灰黄褐色、内面にぶい黄橙、11は外



第4図 椎屋形第1遺跡A地区
草創期調査区



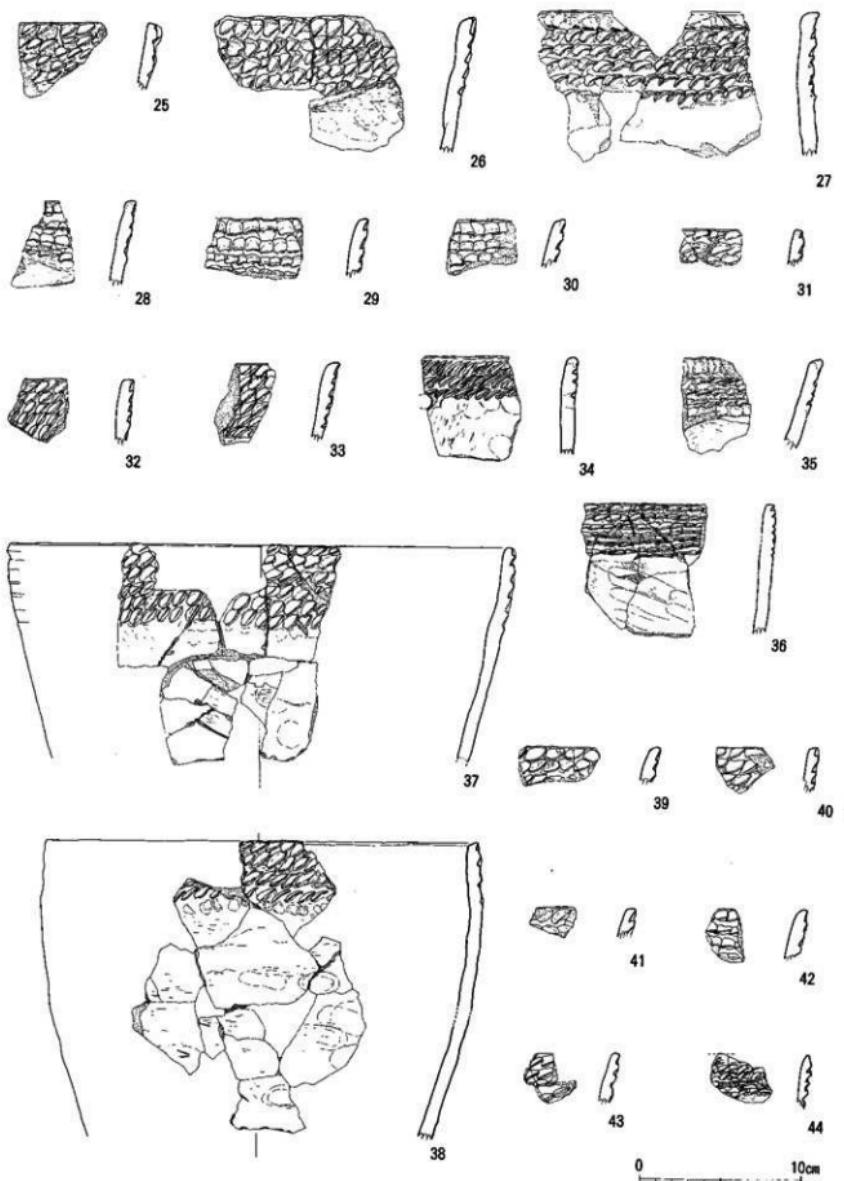
第5図 椎屋形第1遺跡A地区
草創期遺物
平面分布・垂直分布図



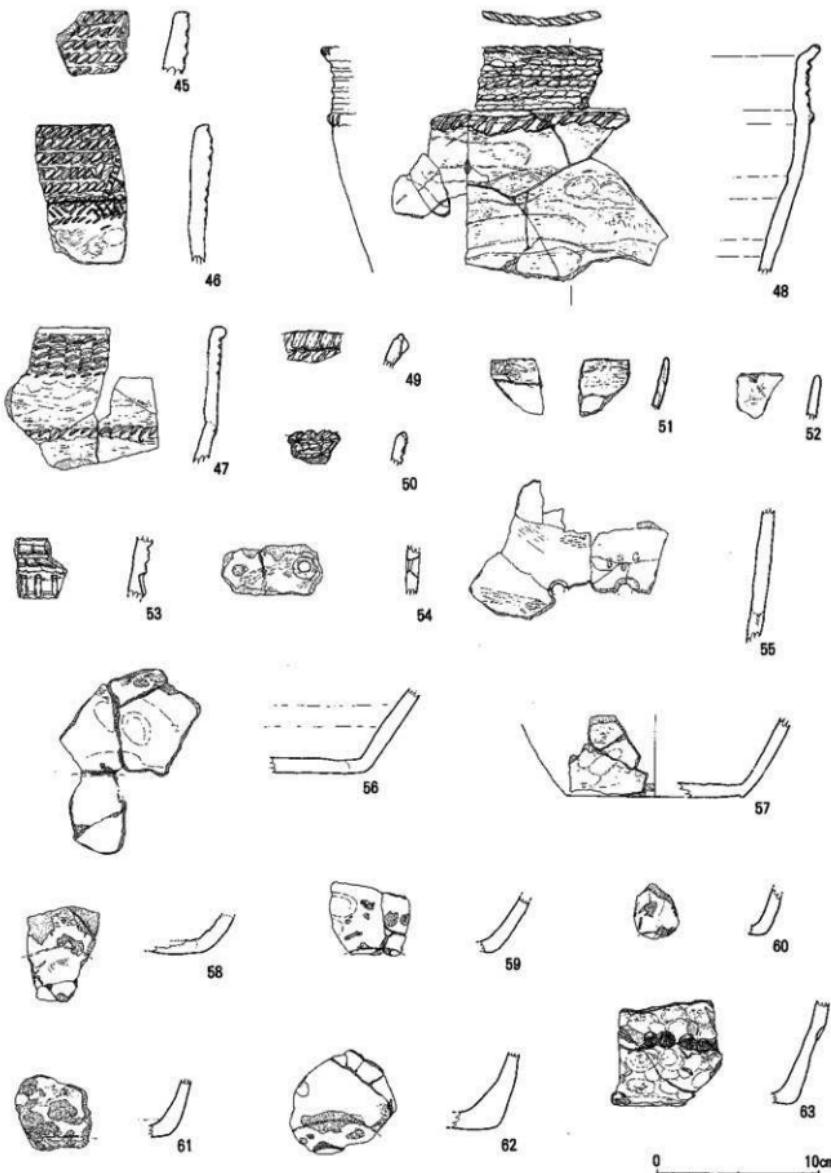
第6図 椎屋形第1遺跡A地区 主要草創期土器平面・垂直分布図 (番号は、第7~9図中の遺物番号)



第7図 椎屋形第1遺跡A地区 草創期土器実測図(1)



第8図 椎屋形第1遺跡A地区 草創期土器実測図(2)



第9図 椎屋形第1遺跡A地区 草創期土器実測図（3）

表1 椎屋形第1遺跡A地区 縄文時代草創期土器観察表(1)

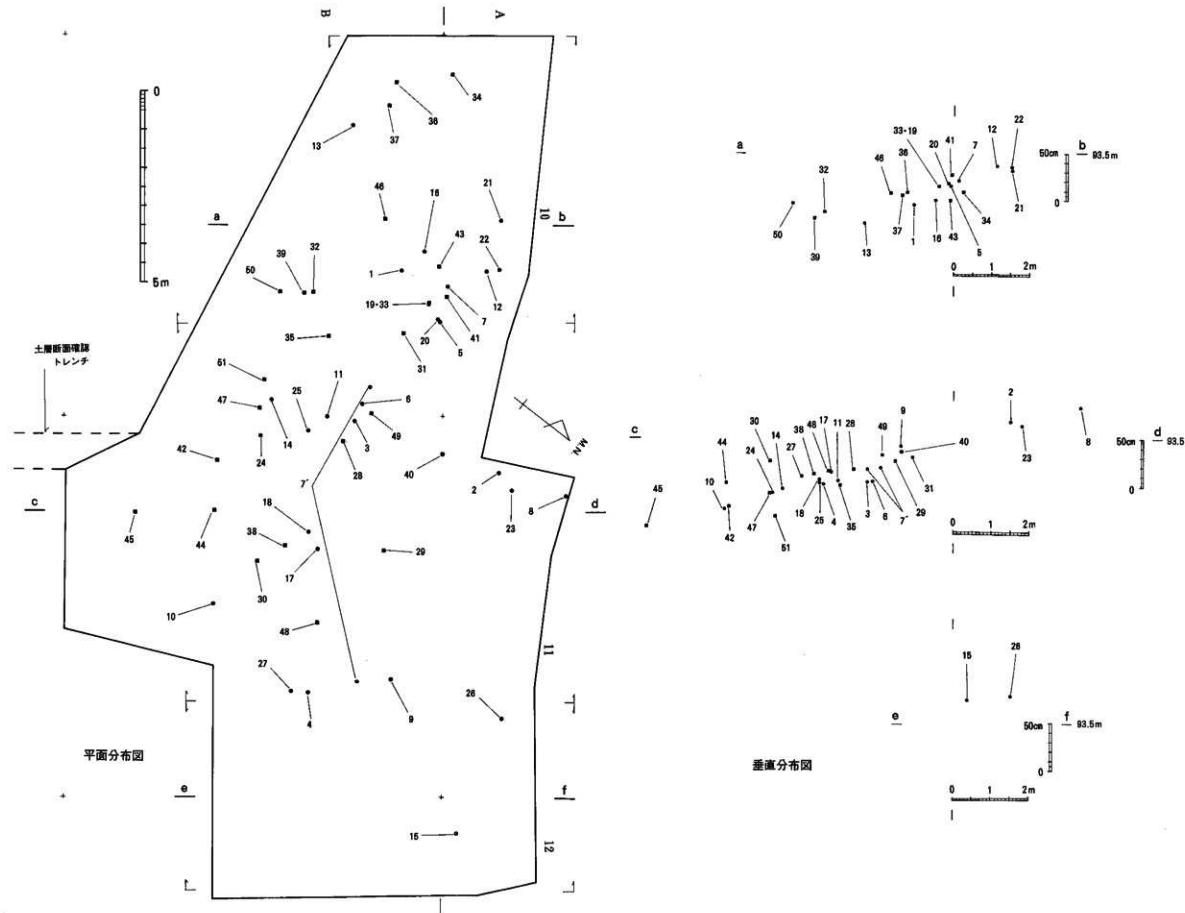
器番号	文 様	質 量	色 調		地 土 の 特 徴	備 考
			外 部 質	内 部 質		
1	口縁部に施された工具による押正印。その下に薄く土器壁を貼付けてある。神えられた痕の一部が、先史時代の文化を見らる。	外縁部は薄い青いナダ。内部面は淡い青いナダ。	青	に赤い青黄 鐵鉄粉を含む。	1m以下の褐色・白色・黒色の 外部面に薄くススが付着。 内部下面に炭化物付着。	
2	口縁部に厚く土器壁を貼付けてある上部によるとと思われる追加印。内部面に施された工具による押正印。下部は土器壁によっては先史時代の痕跡が見られる。	外縁部は淡い青いナダ。内部面は淡いナダ。	青	に赤い青黄 鐵鉄粉を含む。	1m以下の赤黄色及び白色不透 明な鉄鉄粉を含む。	底下部は粘土層の結合部で 剥離している。
3	口縁部に施された工具による押正印。その下に薄く土器壁を貼付けてある上部によるとと思われる追加印。下部は土器壁によるとと思われる押正印で先史時代の痕跡が見られる。	外縁部はナダ。内部面は淡いナダ。	青	に赤い青黄 透明な鉄鉄粉を含む。	1m以下の淡黄色や白色及び半 透明の鉄鉄粉を含む。	
4	口縁部に厚く土器壁を貼付けてある上部によるとと思われる追加印。下部は後部によるとと思われる押正印。	外縁部は淡いナダ。内部面は淡いナダ。	青	に赤い青黄 明るい不透明な鉄鉄粉を含む。	1m以下の淡黄色及び白色半透 明と同一個体か。	
5	口縁部に3条の内縁部文	内外縁とも淡いナダ。	青	に赤い青黄 鐵鉄粉を含む。	1m以下の白色や赤褐色、黑色 及び透明や半透明の鉄鉄粉を含 む。	
6	口縁部以下に施付けた文。その上部面に前面三角形の練付工具による押正印。	内部面は淡いナダ。	に赤い青 青	に赤い青黄 半透明の鉄鉄粉を含む。	1m以下の淡黄色を含む。	
7	口縁部に施付けた工具によるもの押正印。口縁部に施付けた工具によるとと思われる押正印。	内部面は淡いナダ。	青	に赤い青黄 鐵鉄粉と漂白粉を含む。	1m以下の白色、黒色、灰色半 透明と漂白粉を含む。	外縁部に薄くスス付着。
8	口縁部に3条の内縁部文。その下部には先史時代の痕跡が見られる。	内外縁とも淡いナダ。内部面には指圧痕が付いた痕の塊が多く見られる。	に赤い青 青	に赤い青黄 鐵鉄粉を含む。	1m以下の白色、黑色の岩片や 透明白い鉄鉄粉及び漂白粉等を含 む。	外縁部に縦縫にスス付着。
9	口縁部に3条の内縁部文。その下部には先史時代の痕跡が見られる。	内外縁とも淡いナダ。	浅青黄	浅青黄 鐵鉄粉を含む。	1m以下の白色、黒色、透明な 鉄鉄粉を含む。	外縁部に少しスス付着。鉄 鉄粉を含む。
10	口縁部以下に3条の内縁部文。その下部には先史時代の痕跡が見られる。	内外縁とも淡いナダ。	に赤い青 青	に赤い青黄 鐵鉄粉を含む。	1m以下の白色、黒色、透明な 鉄鉄粉を含む。	鉄鉄粉にテラス工具によ る跡がみる。
11	口縁部に3条の内縁部文。その下部には先史時代の痕跡が見られる。	内外縁とも淡いナダ。	に赤い青 青	に赤い青黄 鐵鉄粉を含む。	1m以下の白色、黒色、透明な 鉄鉄粉を含む。	
12	3条の内縁部文。その下部には先史時代の痕跡が見られる。	内外縁とも淡いナダ。内部面には指圧痕が付いた痕の塊が見られる。	青	に赤い青 鐵鉄粉を含む。	1m以下の白色、黒色、透明な 鉄鉄粉を含む。	外縁部に少量のスス付着。
13	貼付けた内縁部に先史による研磨の痕跡。先史で磨さんだものと考えられる。	内外縁とも淡いナダ。	に赤い青 青	に赤い青黄 鐵鉄粉を含む。	1m以下の白色、黒色、透明な 鉄鉄粉を含む。	
14	口縁部以下に施された工具による追加印。その下に3条の内縁部文。	内外縁とも淡いナダ。ともに指圧痕が付いた痕の塊が見られる。	黒褐	暗灰青 鐵鉄粉を含む。	1m以下の白色、半透明の鉄 鉄粉を含む。	
15	口縁部に3条の内縁部文。その下に2条の内縁部文。追加印は薄く土器壁を貼付けてある。	内外縁とも淡いナダ。内部面には指圧痕が付いた痕の塊が見られる。	青	に赤い青 鐵鉄粉を含む。	1m以下の(乳)白・黒色、透 明な鉄鉄粉を含む。	
16	口縁部は施付けた工具による追加印。下には施された3条の内縁部文。	内外縁とも淡いナダ。	に赤い青 青	に赤い青黄 鐵鉄粉及び漂白粉等を含む。	1m以下の白色、黒色、透明な 鉄鉄粉を含む。	底下部は底塗が付いて いる。
17	口縁部に施された工具による追加印。その下には3条の内縁部文。	内外縁とも淡いナダ。	青	青	1m以下の白色、黒色、透明な 鉄鉄粉を含む。	口縁部附近に薄くスス付 着。
18	追加印は薄く土器壁を貼付けてある。	内外縁とも淡いナダ。	青	青	1m以下の白・黒色、透明な鉄 鉄粉等を含む。	
19	薄く土器壁を貼付けるによるとと思われる肥厚部に左上から施された3条の内縁部文。	内外縁とも淡いナダ。内部面には指圧痕が付いた痕の塊が見られる。	に赤い青 青	に赤い青黄 鐵鉄粉を含む。	1m以下の白色、黒色、透明な 鉄鉄粉を含む。	外縁部にスス付着。
20	口縁部に薄く土器壁を貼付けてある上に左上から施された2条の内縁部文。	内外縁とも淡いナダ。	に赤い青 青	明青 鐵鉄粉を含む。	1m以下の白色、黒色、透明な 鉄鉄粉を含む。	外縁部にスス付着。
21	貼付けと考えられる低い土器壁に左上方から施された系文が2列。土器壁の下部は3條の淡いナダで鉄鉄粉となる。	内外縁とも淡いナダ。内部面には指圧痕が付いた痕の塊が見られる。	に赤い青 青	に赤い青 鐵鉄粉を含む。	1m以下の白・黒色、透明な鉄 鉄粉、3~5mmの半透明色岩片 を含む。	外縁部にスス付着。
22	口縁部に3条の内縁部文。其の上に薄く土器壁を貼付けてある。	内外縁とも淡いナダ。内部面には指圧痕が付いた痕の塊が見られる。	に赤い青 青	に赤い青 鐵鉄粉を含む。	1m以下の透明、白色、黒色の 鉄鉄粉を含む。	下端部は粘土層の結合部が 剥離している。
23	口縁部に3条の内縁部文。其の上に薄く土器壁を貼付けてある。	内外縁とも淡いナダ。内部面には指圧痕が付いた痕の塊が見られる。	青	青 鐵鉄粉を含む。	1m以下の白色、黒色、透明な 鉄鉄粉、黑色の岩片等を含む。	
24	貼付けた内縁部(口縁部に貼付けた内縁部)の文様が左上から4条の内縁部文。	内外縁とも淡いナダ。内部面には指圧痕が付いた痕の塊が見られる。	明褐	青 鐵鉄粉を含む。	1m以下の白色、黑色、透明な 鉄鉄粉を含む。	外縁部にスス付着。
25	薄く土器壁を貼付けるとされる文様部に左上方から施された4条の内縁部文。	内外縁とも淡いナダ。内部面には指圧痕が付いた痕の塊が見られる。	灰青褐	浅青黄 鐵鉄粉を含む。	1m以下の透明、白色、黒色の 鉄鉄粉を含む。	
26	薄く土器壁を貼付けるとされる文様部に左上方から施された4条の内縁部文。	内外縁とも淡いナダ。内部面には指圧痕が付いた痕の塊が見られる。	に赤い青 青	明青褐 鐵鉄粉を含む。	1m以下の透明、白色、黒色の 鉄鉄粉や白色の岩片等を含む。	
27	贴付けた内縁部の文様は不明。文様部上面に3条の内縁部文が見られる。底下部は3条の内縁部文。	内外縁とも淡いナダ。内部面には指圧痕が付いた痕の塊が見られる。	青	明青褐 鐵鉄粉を含む。	鐵鉄粉と漂白粉、少量の灰・赤褐色岩片 を含む。	
28	上方から施されたとされる4条の内縁部文。文様部の下に薄く土器壁を貼付けて施された可能性がある。	内外縁とも淡いナダ。内部面には指圧痕が付いた痕の塊が見られる。	に赤い青 青	浅青黄 鐵鉄粉を含む。	1m以下の透明、白色、黒色の 鉄鉄粉を含む。	
29	上方から施されたとされる4条の内縁部文。	内外縁とも淡いナダ。内部面には指圧痕が付いた痕の塊が見られる。	に赤い青 青	明青褐 鐵鉄粉を含む。	1m以下の透明、白色、黒色の 鉄鉄粉や白色の岩片等を含む。	
30	上方から施されたとされる4条の内縁部文。	内外縁とも淡いナダ。	に赤い青 青	明青褐 鐵鉄粉を含む。	1m以下の透明、白色、黒色の 鉄鉄粉及び微量の茶褐色岩片等 を含む。	外縁部の一部にスス付着。 30と同一個体の可能性。
31	左上から施された3条の内縁部文。	内外縁とも淡いナダ。	に赤い青 青	浅青黄 鐵鉄粉を含む。	1m以下の透明、白色、黒色の 鉄鉄粉を含む。	口縁部附近にスス付着。
32	左上方から施された3条の内縁部文。	内外縁とも淡いナダ。	に赤い青 青	明青褐 鐵鉄粉を含む。	1m以下の透明、白色、黒色の 鉄鉄粉を含む。	外縁部にスス付着。

表2 椎屋形第1遺跡A地区 繩文時代草創期土器觀察表(2)

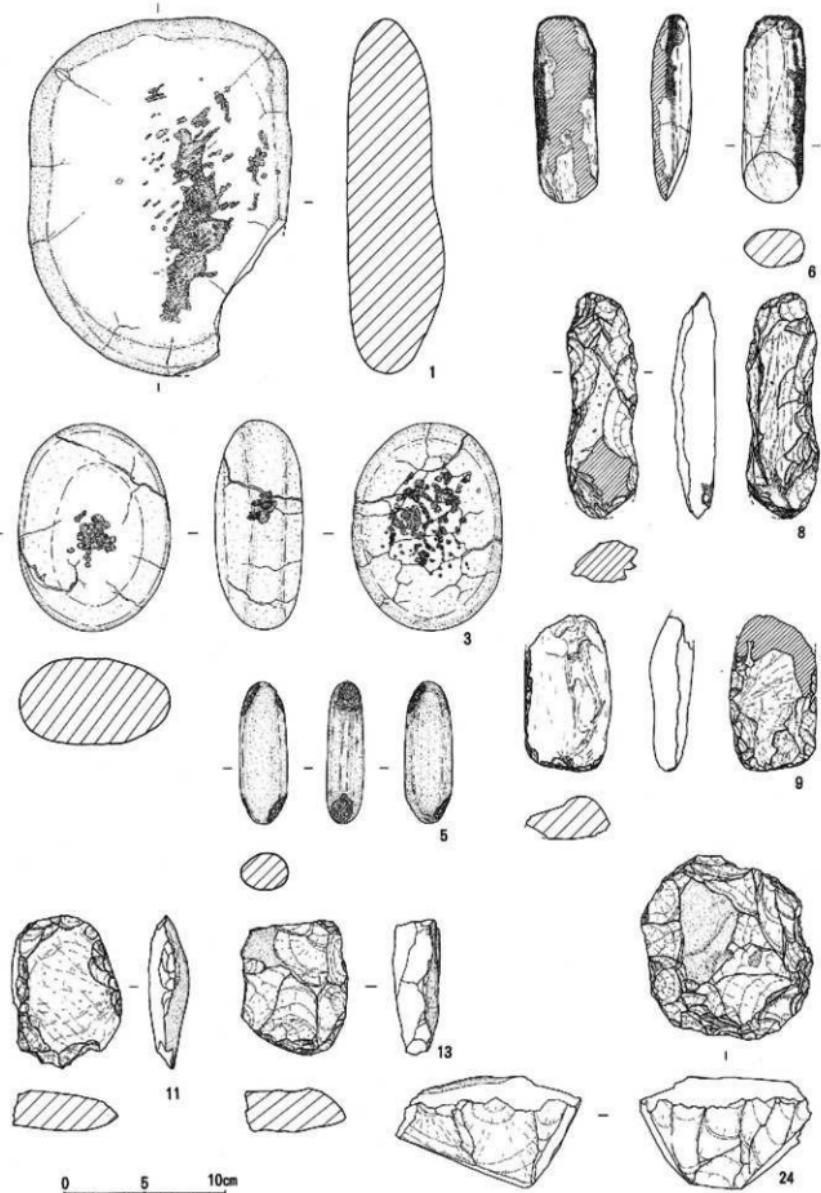
番号	文 様	調 査	色 調		地 下 の 特 徴	備 考
			外 部 面	内 部 面		
33	左上方から施された4列の爪形文。	外縁部文様部の下は模ナデ。内唇部は模ナデ。	に赤-青	に赤-青	1m以下の透明、白・黒・灰色 の範囲を含む。	
34	口縁部部に2列、その下の押出し帯部にも1列、計3列の左上方から爪形文。	内唇部とも模又は斜向のナデ。とともに 内唇部底の凹-痛みが現れる。	に赤-青	透光	2mm以上の透明、黒褐色の白・黒色、 透明な範囲を含む。	外部面にスス付ける。着色孔 と思われる穿孔がある。
35	高く粘土を剥離した上に口縁部部は洗い流し形文。その下に上方左 から2列の爪形文。	内唇部とも模ナデ。	に赤-青	に赤-青	1m以下の透明、白色、黒色の 範囲を含む。	外部面下端に微量のスス 付ける。
36	右から左方向へ洗いられた4列の爪形文。唇下部は途中で止まる。 唇上部では上方から、唇下部ではほぼ直立で1列、計2列が現れる。	外縁部文様部は斜向の、内唇部は偏方 の模ナデ。下部は横ナデ。指ナデ・ 斜ナデ。	に赤-青	透光	黒褐色の白・黒、黒色の底 物や石等の沿岸物の混合を含む。	外部面上部にスス付ける。
37	右から左へと上方から4列の爪形文。	内唇部とも模ナデ。内唇には指痕と思 われる浅い痛みが見られる。	に赤-青	透光	黒褐色の白・黒、黒色の底 物や石等の沿岸物の混合を含む。	外部面にスス付ける。點々に 高周波が多く見られる。
38	左から右へと上方から4列の爪形文。	内唇部とも模ナデ。やや細い。内唇には 指痕と思われる浅い痛みが見られる。	透光	透光	1m以下の透明、白・黒、黒色の 範囲を含む。	
39	左上方から施された3列の爪形文。	外縁部不明。内唇は模ナデ。	透光	透光	1m以下の透明な透明、白色の底 物や石等の混合を含む。	爪形文の中にスス付ける。
40	左上方から施された4列の爪形文。	外縁部不明。内唇は模ナデ。	に赤-青	に赤-青	1m以下の透明な白色、透明な 範囲を含む。	爪形文の中にスス付ける。
41	左から右へと、左上方から施されたと考えられる4列の爪形文。口縁部 に粘土を剥離したような筋状の痛みがわずかに見られる。	外縁部不明。内唇は模ナデ。	透光	透光	1m以下の透明、白色、黒色の 範囲を含む。	爪形文の中にスス付ける。
42	上方や左から4列の爪形文。	内唇部とも模ナデ。	透光	透光	1m以下の透明、白色、黒色の 範囲を含む。	
43	左から右へと、左上方から施されたと考えられる4列の爪形文。	内唇部とも模ナデ。	透光	透光	黒褐色の白・黒・黒・灰色、 透明な範囲を含む。	爪形文の中にわざかにスス 付ける。
44	左から右、上から下へと施されたと考えられる左上方からの4列の点压 文。	内唇部とも模ナデ。	透光	透光	黒褐色の白・黒、透明な範囲 を含む。	爪形文の下にごくわずかに スス付ける。
45	左から右へと4列の爪形文。	内唇部とも模ナデ。内唇には指痕底と 思われる浅い痛みが見られる。	透光	透光	1m以下の透明、白・黒、黒色の 範囲を含む。	
46	左から右へと4列の爪形文。その上にやや斜めの凹-痛みがある。右 の斜い工具による羽状刃。爪形文の下には灰白色の羽状刃。棒子灰 工具。	内唇部とも模ナデ。内唇には指痕底と 思われる浅い痛みが現れる。	透光	透光	1m以下の透明、白・黒、黒色の 範囲を含む。	45と同一層と記される。
47	口縁部部下に左から右の4列の爪形文。左から右へ、上から下へと施 された工具の合併と思われる斜面底に(左から右へ)4列の爪形文。	内唇部とも模ナデ。とともに指痕底又は 斜ナデの浅い痛みが現れる。	透光	透光	1m以下の透明、白・黒、黒色の 範囲を含む。	外縁に微量のスス付ける。
48	口縁部部下に左から右の4列の爪形文。左から右へ、上から下へと施 された工具の合併と思われる斜面底に(左から右へ)4列の爪形文。	内唇部とも模ナデ。内唇には指痕底と 思われる浅い痛みが現れる。	透光	透光	1m以下の透明、白・黒、黒色の 範囲を含む。	外縁に微量のスス付ける。
49	口縁部部下に左から右の4列の爪形文。左から右へ、上から下へと施 された工具の合併と思われる斜面底に(左から右へ)4列の爪形文。	内唇部とも模ナデ。内唇には指痕底と 思われる浅い痛みが現れる。	透光	透光	1m以下の透明、白・黒、黒色の 範囲を含む。	外縁に微量のスス付ける。
50	口縁部部下に左から右の4列の爪形文。左から右へ、上から下へと施 された工具の合併と思われる斜面底に(左から右へ)4列の爪形文。	内唇部とも模ナデ。内唇には指痕底と 思われる浅い痛みが現れる。	透光	透光	1m以下の透明、白・黒、黒色の 範囲を含む。	外縁に微量のスス付ける。
51	粘土の接着部が見られる無文土器。	内唇部とも模又は斜のナデ。	透光	透光	1m以下の透明、白色、黒色の 範囲を含む。	外縁面にスス付ける。
52	無文土器と看えられるが、口縁部部にごくわずかな高さの小さな突起 の凹(凹でない突起)が見られる。底部の内側に削けたものかどうか不 明。	内唇部とも(擦)ナデ。	透光	透光	1m以下の透明、白・黒、黒色の 範囲を含む。	
53	(上)左端、他の無文土器を参考にすると)右から左へ、左上方から 施された2列の爪形文。その下の三角底座上をへり状工具で下方から運 搬物。	内唇部とも模ナデ。内唇には指痕底の 浅い痛みが現れる。	透光	透光	1m以下の透明、白色、黒色の 範囲を含む。	
54	(削跡、無文)	内唇部とも模ナデ。	透光	透光	1m以下の透明、白・黒、黒色の 範囲を含む。	
55	(削跡、無文)	外縁ナデ、内唇部ナデ。	透光	透光	1m以下の透明、白・黒、黒色の 範囲を含む。	削跡孔と看えられる円形の 穿孔及び底裏邊の凹の跡の 外縁。外縫式の穿孔。
56	(平底部、無文)	内唇部とも模ナデ又はナダ。とともに指 痕底のわずか浅い痛みが現れる。	透光	透光	黒褐色の白・黒、透明な範 囲を含む。	外縁に微量のスス付ける。 内部面に微量の化粧。
57	(平底部、無文)	内唇部とも模ナデもしくは模ナデ。	透光	透光	1m以下の透明、白・黒、黒色の 範囲を含む。	内部面にごく微量のスス 付ける。
58	(丸っこい平底部、無文)	内唇部ともナデもしくは模ナデ。内唇は 斜向のナデ。	透光	透光	黒褐色の白・黒、透明な範 囲を含む。	底面にごく微量の混合物 を含む。
59	(丸っこい平底部、無文)	内唇部ともナデもしくは模ナデ。内唇に 斜ナデの浅い痛みが現れる。	透光	透光	黒褐色の白・黒、透明な範 囲を含む。	底面に微量の化粧。
60	(丸っこい小さな平底部、無文)	内唇部とも模ナデ。	透光	透光	1m以下の白・黒色、透 明な範囲を含む。	ほかの工具と異なり殆ど藍物 が含まれない。
61	(丸っこい平底部、無文)	内唇部ともナデもしくは模ナデ。外縁は 削痕。	透光	透光	1m以下の白・黒色、透 明な範囲を含む。	底面にごく微量のスス 付ける。
62	(平底部) 外縁部の粘土の接合部附近に二段具の底裏邊の運搬孔が 見られる。また、その下に1列爪形の狂痕が見られる。	内唇部とも模ナデと看えられる。	透光	透光	黒褐色の白・黒、透明な範 囲を含む。	外縁面に微量のススや化粧 物付する。底に削跡がある。

表3 椎屋形第1遺跡A地区 繩文時代草創期石器計測表

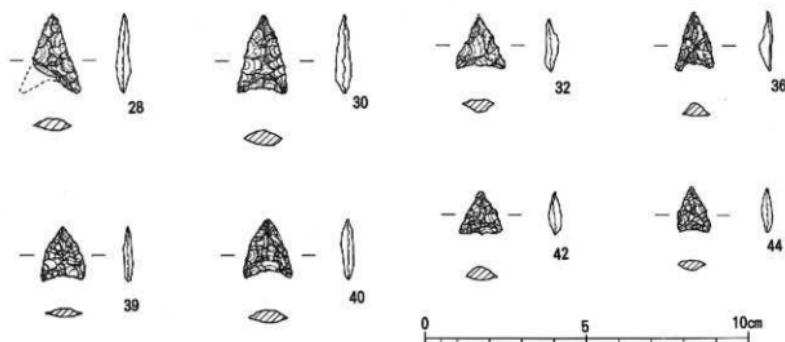
番号	種別	出土地點 (区)	器長 (cm)	幅幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石 材	備 考	取上番号
1	台石	B-10	22.1	16.0	6.0	2000.0	砂岩	片側に刃状成、側面欠損	J-69
2	台石	A-11	14.6	12.0	8.0	2000.0	砂岩	片側に刃状成、先端欠損?、一側欠損、側面か?	J-44
3	砥石・磨石	B-11	12.9	9.3	5.6	602.6	砂岩	片側底の刃削り、片側欠損、片側面とも研削、ヒビ割れ有	J-82
4	砥石・磨石	B-11	10.4	7.8	6.4	742.1	砂岩(中粒)	片側刃・底面欠損、先端の刃に溝線?	J-36
5	砥石	B-10	8.8	3.0	2.3	62.5	砂岩	片側底に刃削り、側面欠損	J-67
6	磨削片刃矛形	B-10	11.5	3.8	2.4	157.5	頁岩	基部と片側面に擦痕が残る、片手跡は難観察	J-87
7	磨削刃矛(基部)	A-10	10.1	6.4	2.9	253.7	頁岩(柱状)	?と同一個体か、刃次欠損、全縁研磨	J-62
7'	磨削刃矛(刀頭)	B-10-11	3.8	5.5	1.7	23.7	頁岩(柱状)	2倍の合分量	J-65 207
8	刃状研磨片矛形	A-11	13.9	4.5	2.7	216.6	頁岩(柱状)	刃削り二面研磨、刃先欠損	J-43
9	打削石斧(基部)	B-11	9.6	5.4	2.7	151.2	シート岩	刃削り、片手跡と刃削りのまま	J-28
10	スクレイパー	B-11	12.1	7.2	2.9	275.6	頁岩(柱状)	側面削除に溝線有り	J-96
11	スクレイパー	B-10	9.5	6.8	2.5	181.5	滑面灰岩	片側刃・自然削除、刃削り有、周辺に自然削除	J-72
12	スクレイパー	A-10	9.0	7.9	2.4	213.6	滑面灰岩	片側刃・自然削除	J-24
13	スクレイパー	B-10	6.6	8.4	2.9	197.2	頁岩(柱状)	片側刃・自然削除	J-76
14	スクレイパー	B-10	10.9	5.9	3.4	165.3	頁岩(柱状)	側面削除	J-73
15	スクレイパー	A-12	4.8	4.4	1.6	29.8	頁岩		J-35
16	スクレイパー	B-10	3.7	1.9	0.7	5.1	頁岩		J-64
17	使用痕跡片	B-11	6.8	6.1	2.3	113.3	頁岩(柱状)	片側刃・自然削除	J-23
18	使用痕跡片	B-11	12.5	10.3	2.4	327.3	頁岩(柱状)	側面・刃削り、上端面に擦痕が見られる	J-60
19	使用痕跡片	B-10	7.6	5.2	1.9	52.8	頁岩(柱状)	側面削除に使用痕と思われる刻線	J-68
20	使用痕跡片	B-10	10.1	4.7	2.8	136.3	頁岩(柱状)	側面・刃削り、自然削除が残る	J-66
21	使用痕跡片	A-10	3.0	2.4	0.9	5.8	頁岩	側面二面の刃削り	J-61
22	使用痕跡片	A-10	8.4	7.1	1.9	92.5	頁岩	2面削り・刃の尖点、自然削除が残る	J-25
23	鋸片	A-11	7.1	2.5	0.6	33.0	頁岩(柱状)		J-49
24	石核	B-11	11.4	10.6	6.4	854.4	頁岩		J-87
25	スクレイパーか	B-11	7.3	6.9	3.2	216.0	頁岩		J-13
26	石核か	A-11	5.7	4.2	2.6	60.4	頁岩		J-38
27	台石か	B-11	15.9	11.3	3.6	575.8	頁岩(入刃式柱状)	側面で底面が平ら、一端に熱を受けていた跡有り、底面欠損?	J-35
28	打削石器	B-11	2.4	1.5	0.4	0.9	頁岩(柱状)	片刃・自然削除、刃削り	J-24
29	打削石器	B-11	1.9	1.2	0.4	0.6	頁岩(柱状)	先端削り(内側)に刃削り、刃先、凹溝	J-26
30	打削石器	B-11	2.4	1.5	0.5	1.3	頁岩	刃先、凹溝	J-27
31	打削石器	B-10	1.9	1.4	0.3	0.6	頁岩	先端削り、凹溝	J-54
32	打削石器	B-10	1.6	1.6	0.4	0.6	頁岩(柱状)	先端削り(内側)に刃削り、凹溝	J-62
33	打削石器	B-10	1.7	1.5	0.5	0.7	頁岩	先端削り(内側)に刃削り	J-68
34	打削石器	A-10	1.6	1.3	0.5	0.7	頁岩	先端削りと刃の底面欠損、凹溝	J-58
35	打削石器	B-10	1.8	1.1	0.3	0.4	頁岩	片刃の底面欠損、底面・側面に刃削り跡、凹溝	J-64
36	打削石器	B-10	1.8	1.2	0.4	0.5	頁岩	刃先、底面つぼは削除されず刃削りのまま、凹溝	J-47
37	打削石器	B-10	1.7	1.4	0.4	0.6	頁岩	側面の底面欠損、凹溝	J-53
38	打削石器	B-11	1.6	1.1	0.4	0.5	頁岩	刃先、底面・自然削除、底面つぼの刃削り跡、凹溝	J-45
39	打削石器	B-10	1.7	1.4	0.3	0.5	頁岩	刃先、凹溝	J-63
40	打削石器	A-11	1.8	1.5	0.4	0.5	頁岩	側面の底面欠損、凹溝	J-26
41	打削石器	A-10	1.5	1.3	0.3	0.5	頁岩	先端の刃削り、底面つぼの刃削り跡、凹溝	J-42
42	打削石器	B-11	1.3	1.4	0.4	0.5	頁岩	刃先、凹溝	J-211
43	打削石器	B-10	1.3	1.1	0.3	0.3	頁岩	刃先、凹溝	J-405
44	打削石器	B-11	1.4	1.0	0.3	0.3	頁岩	刃先、凹溝	J-227
45	打削石器	B-11	1.3	1.0	0.4	0.4	頁岩	先端削り欠損、凹溝	J-281
46	打削石器	B-10	1.6	1.1	0.4	0.6	頁岩	刃先、凹溝	J-287
47	打削石器	B-10	1.7	1.6	0.4	0.5	頁岩	片刃・自然削除、両側刃尖に自然削除、凹溝	J-477
48	打削石器	B-11	1.2	1.4	0.6	1.1	頁岩	先端削り分岐刃、凹溝	J-232
49	打削石器	B-10	0.8	1.0	0.4	0.3	頁岩	先端削り分岐刃、凹溝	J-42
50	打削石器	B-10	1.7	1.4	0.4	0.7	頁岩	底面欠損	J-69
51	打削石器	B-10	1.5	1.3	0.5	0.8	頁岩	底面欠損は大きめ欠損	J-96



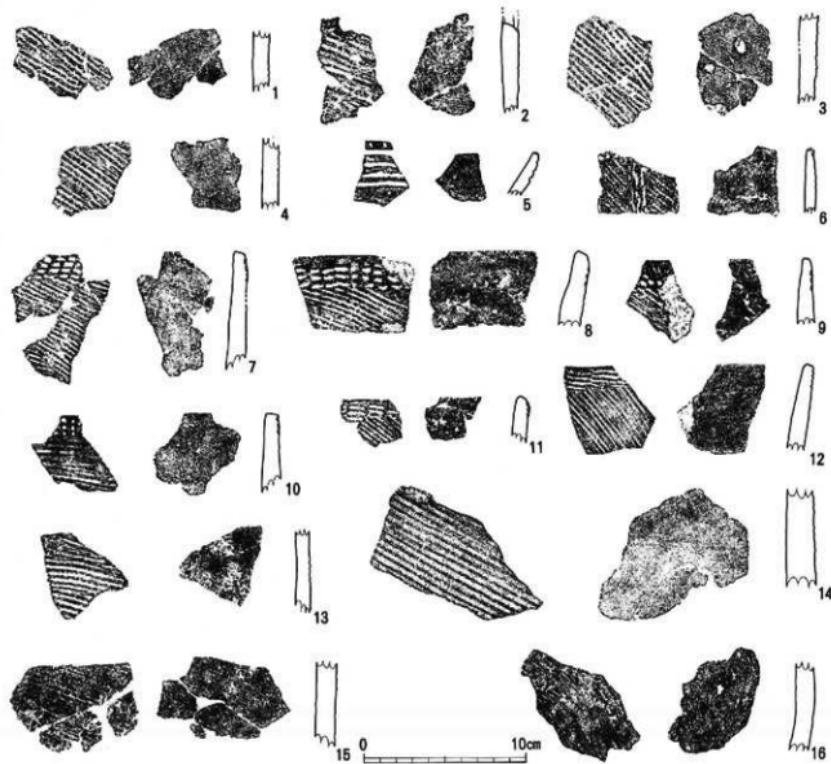
第10図 椎屋形第1遺跡A地区 主要草創期石器 平面・垂直分布図 (番号は、計測表の番号)



第11図 椎屋形第1遺跡A地区 草創期石器実測図(1) 図番号=計測表番号



第12図 椎屋形第1遺跡A地区 草創期石器実測図(2) 図番号=計測番号



第13図 椎屋形第1遺跡A地区及び西側工事区出土早期土器実測図

面にぶい黄褐色、内面にぶい黄橙、12は外面にぶい黄橙、内面黄橙、13は外面にぶい橙、内面にぶい褐色、14は内外面とも浅黄橙、15は外面にぶい橙、内面黄橙である。16は、やや丸みのある器壁を持ち、外面調整は斜方向の条痕の上からヘラミガキを施している。内面調整は縱方向のヘラミガキもしくはヘラナデと思われる。色調は外面黄橙、内面橙である。これらの土器の胎土は、9・14に金色の鉱物粒が、15に高師小僧片が見られるほかは、通常の胎土である。西側工事区では、このほかに知覧式土器系の胴部片が1点採集されている。

早期の石器は、包含層が未調査のため詳細は不明である。土器同様に弥生時代の遺構埋土中からと耕作により削平された早期包含層面から遺物を探集しているので、表4及び図版に掲載した。

表4 椎屋形第1遺跡A地区 縄文時代早期石器計測表

番号	種別	出土地点(区) 取上番号	器長 (cm)	器幅 (cm)	器厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
1	打製石鎌	A - 7 区	2.1	1.4	0.2	0.5	チャート	完形、凹基
2	打製石鎌	弥生SA 5-50	2.2	1.5	0.3	1.0	チャート	片脚端部欠損
3	石匙	弥生SA 5-6	2.2	4.0	0.5	3.1	頁岩	横型、右端部欠損
4	石鎌	弥生SA 3-167	2.4	1.1	0.8	1.7	石英	完形、先端部磨耗

2 弥生時代の遺構と遺物（第14図）

当初の予想と異なり数多く検出された弥生時代の遺構は、内容もいろいろと変化に富み、しかも出土土器からはさほどの時間幅は見られないものである。次に順次報告する。

（1）掘立柱建物跡（S B、第15～17図）

掘立柱建物跡は6棟検出された。トレンチャーによる深耕を免れ、ほかにピットも見られなかった事から検出は比較的容易であった。ピットからは殆ど遺物が出土しなかったが、埋土中にわずかに出土した土器片は弥生土器であり、また、周囲には縄文時代以外の時期の遺物が見られなかったため、弥生時代の遺構として報告する。S B 6に伴うと思われるコの字形の溝からは第17図のような竪穴住居跡と同様の弥生土器が出土している。これらの掘立柱建物跡は、柱の掘方が長方形もしくは方形を意識して掘り込まれていると考えられる。長方形の掘方の長軸方向は、おおよそ建物に対し直角方向である。主軸方向はほぼ同じ略東西方向であるが、細かく見るとS B 1・2、S B 4・5がそれぞれ桁や梁方向が平行である。検出面がアカホヤ火山灰層上面であったためか、側柱で囲まれた空間には焼土等は確認できなかった。これらの掘立柱建物跡のうち4棟が棟持柱を持つ（表5参照）。

S B 1は、棟持柱を有さない最も大きな掘立柱建物跡である。北側の側柱間が東端のみ特に間隔が広い。中央東半には主軸線上に並ぶピットが、北西側の側柱の外側にも平行に並ぶピットが見られる。耕作によりかなり削平。掘方から壺の胴部片とS A 19の一括土器と接合した壺の口縁部小片が出土。

S B 2は、西側の棟持柱の掘方付近が攪乱されていたが、微妙に違う土色を頼りに掘り進めたところ長方形の掘方を確認できた。また、検出時に西側中央の2本の妻柱は、柱痕跡と思われる黒色の柔らか

第14図 椎屋形第1遺跡A地区 張生時代遺構分布図

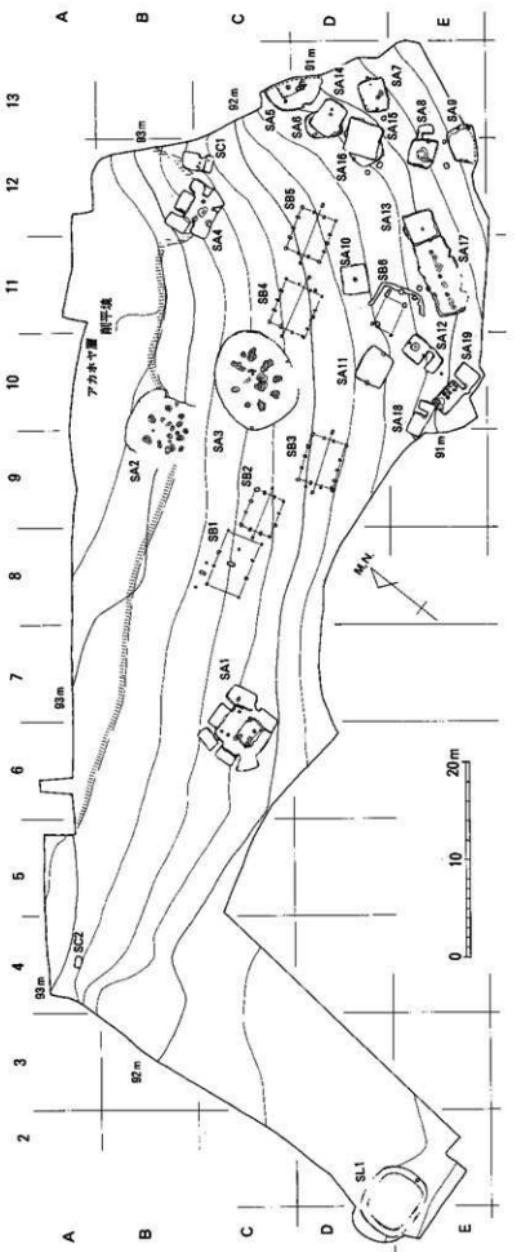
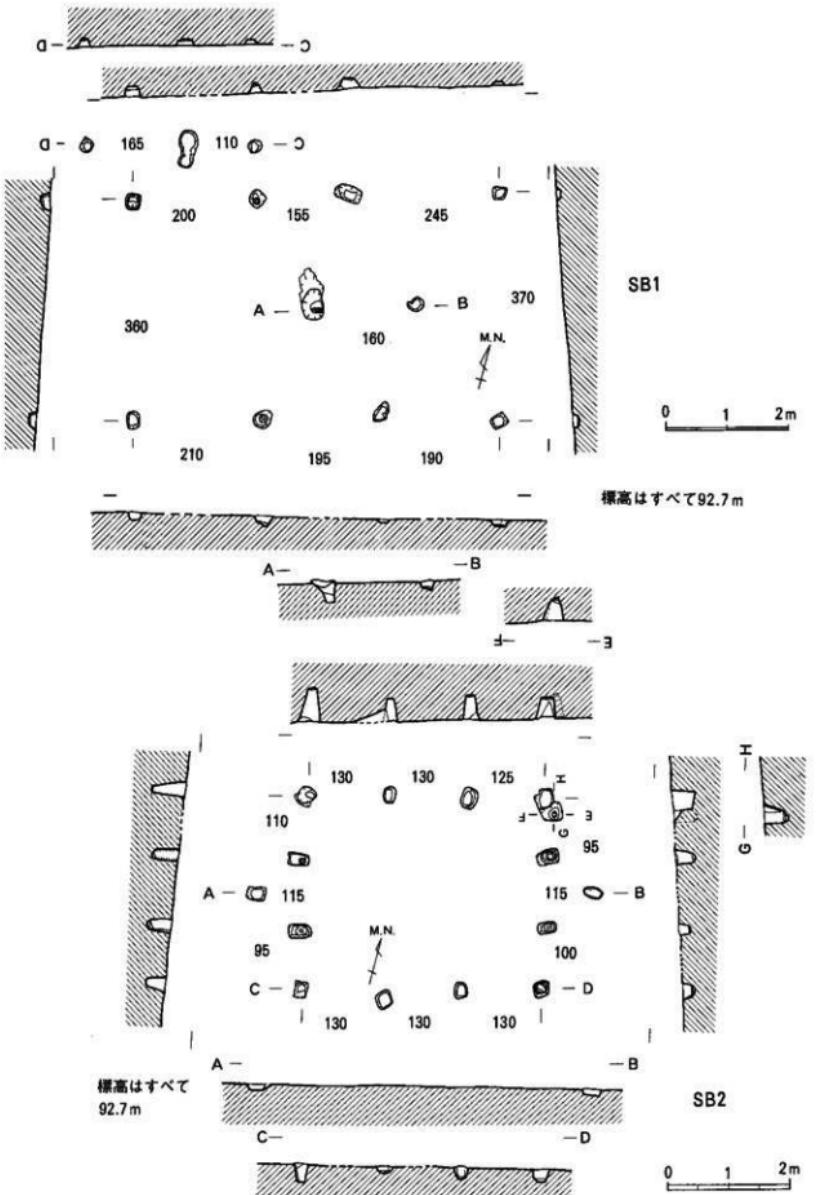
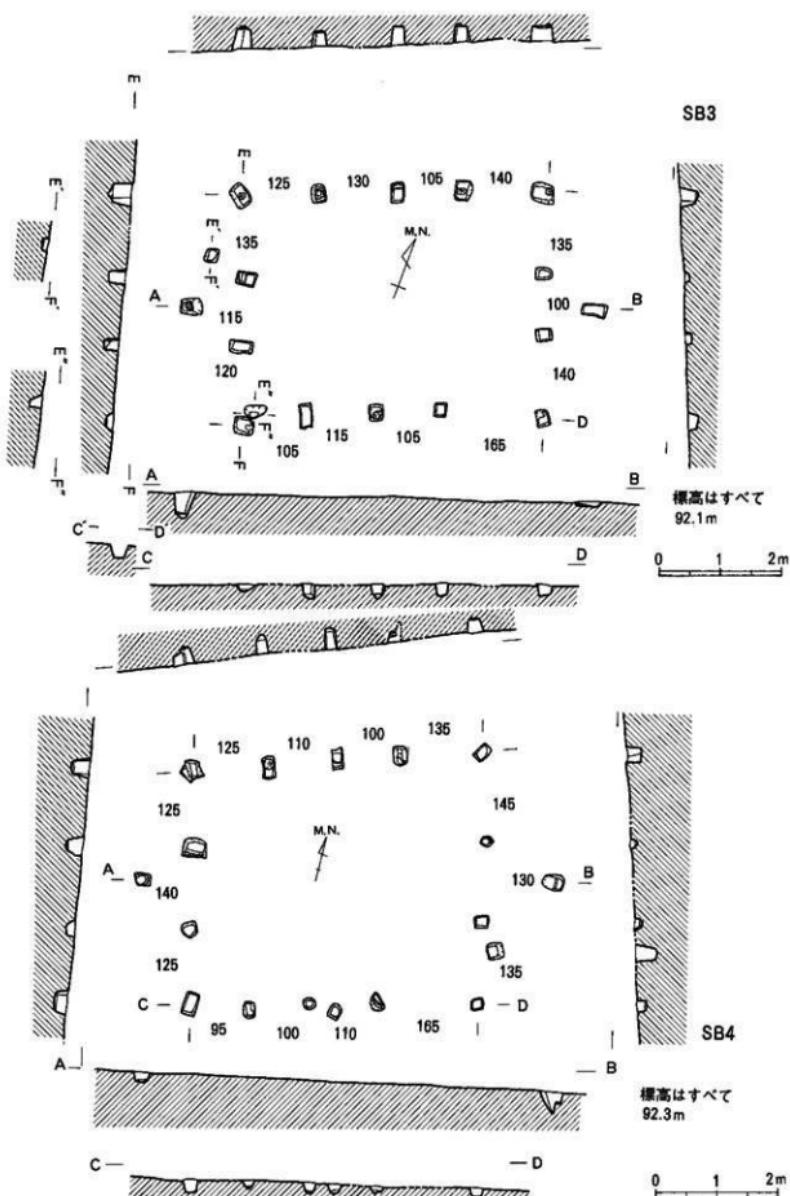


表5 椎屋形第1遺跡A地区 弥生時代遺構一覧表

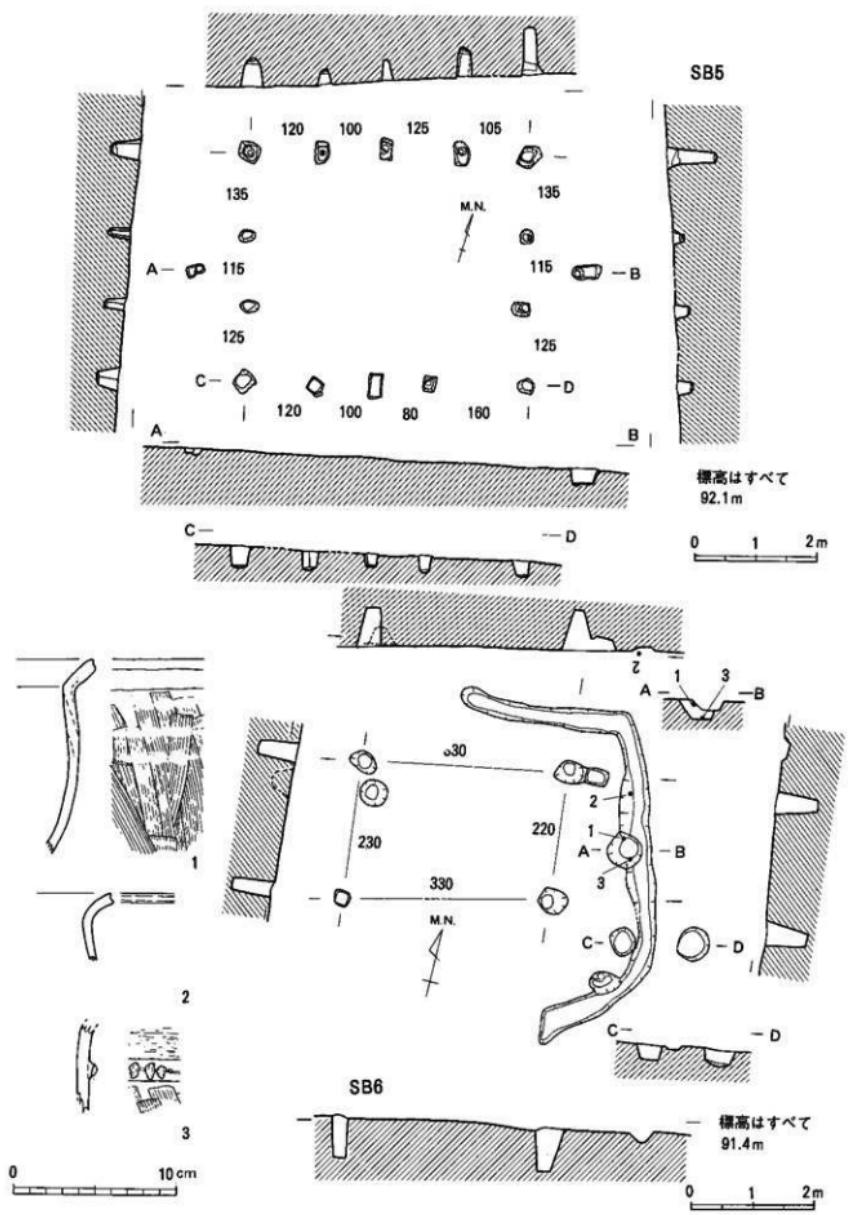
遺構番号	面積(m ²)	グリッド	主軸方向	規模	架 署(cm)	桁 行(cm)	棟持柱間距離(cm)	備 考	図番号
SB 1	21.8	C-8	N-76°-E	1間×3間	360~370	595~600	—	振り方は方形、一部に柱頭、ABはほぼ主軸上	15回
SB 2	12.2	C-8+9	N-76°-E	3間×3間	310~320	385~390	550	振り方は方形基調、一部に柱頭が見られる	15回
SB 3	18.4	D-9	N-70°-E	3間×4間	370~375	490~500	660	振り方は方形、一部に柱頭	16回
SB 4	18.8	C-D-10-11	N-75°-E	3間×4間	390~410	470	680	振り方は方形基調、一部に柱頭	16回
SB 5	17.1	C-D-11-12	N-74°-E	3間×4間	375	450~460	620~630	振り方は方形基調、一部に柱頭	17回
SB 6	7.4	D-E-10-11	N-78°-E	1間×1間	220~230	330	—	振り方の一部は方形、梁水溝(?)あり	17回
遺構番号	平面形 (深さ浅~深α)	主柱数 (深さ浅~深α)	規 模	主な出土遺物				備 考	図番号
			長軸×短軸(m) 宋面積(m ²)						
SA 1	不整長方形	2本 (70~80)	7.5×6.8	37.5	甕、壺、ミニチュア、土器底、石器、瓦器、装飾品?、樹脂石器	夷化切り壁5、ベッド状遺構1、両面切られた土坑状の区画1、溝による区画2、中央に長方形土坑と柱穴2、一部に貼床、柱の連結?			18回
SA 2	不明	7~8本 (25~90)	7+a×不明	(38.5)	甕、壺、石庵未製品、磨製石器	焼床面4、中央柱穴2、2~3回の柱の建替えあり			18回
SA 3	横円形	8本 (40~105)	10.0×8.1	64.0	甕、壺、石器、凹石、砾石、不明石器、磨製石器及び未製品、鐵器、夷化木の実	焼床面5、壁帶溝、薄く貼床、中央柱穴2、柱の建替え最多で9箇			20回
SA 4	不整長方形	2本 (35~40)	5.6×4.2	19.3(両仕切剖面平塗17.8)	甕、壺、凹石、砾石、鉄片	現存両仕切壁3、削平開両仕切壁3、ベッド状遺構2、一部に壁帶溝、中央に土坑、貼床			22回
SA 5	円形?	不明	5.9×2.8+a	(11.8+a)	甕、壺、春製石器、炭化シイの実	半掘(地区外)、中央に土坑、中央柱穴1+a、一部に突出壁1			22回
SA 6	隅丸長方形? 隅丸長方形?	不明	3.65×2.75	(推定8.7)	甕	SA 14と切り合い、焼土塊2、貼床			22回
SA 6~14	SA 14 隅丸長方形?	1本? (30)	3.6×2.7	8.8		SA 6と切り合い			22回
SA 7	隅丸長方形	2本 (25~30)	3.7×2.7	8.0	甕、壺、石器	南東壁際に小土坑、貼床			24回
SA 8	不整方形 (張出し土坑付)	2本 (35~50)	2.9×2.7	6.3	甕、壺、画面内系高窓脚、局部磨製石器	中央に土坑、貼床、長方形土坑を付け足す(1、1m ²)			24回
SA 9	不明 (不整方形か? トあり30~45)	不明 (2本の間にビット トあり30~45)	4.4+a×2.8+a	(7.8+a)	甕、壺、散石、夷化木の実	半掘(地区外)、焼土1(国圖記録も)、2軒の切り合いの可能性あり			24回
SA 10	長方形	1本 (86)	3.0×2.6	7.4	甕、丹塗り甕、石器、台石、凹石、鼎石、磨製石器	全面に炭化材覆う、貼床			25回
SA 11	不整長方形	2本 (70~80)	3.6×3.1	10.1	甕、壺、鉢、凹石	主柱穴は斜め、貼床			25回
SA 12	方形 (長方形土坑付)	2本 (40)	2.4×2.25	4.7	甕	中央に大ビット(土坑?)、南側に長方形土坑が付属する(1.9m ²)			25回
SA 13	方形	不明	3.1×3.1	8.1	甕、壺、散石、磨製石器	SA 17と接続、貼床、埴土中に焼床面あり			27回
SA 15~16	SA 15 方形	不明	3.6×3.5	11.4	SA 15 台石 どちらか 甕、壺、漆器 内系四輪文蓋 不明 鉢、鐵器	SA 16と切り合い、床中央に台石			26回
SA 16	SA 16 方形?	2本? (30~55)	3.3×2.2+a	(6.1+a)	SA 16 瓷、丹塗り甕	SA 15と切り合い、貼床			26回
SA 17	方形3通塗または長方形	4本+a (20~40)	8.1×3.8	(25.2)	甕、壺、炭化木ブラジイ (焼土3より)	焼土4、埋土はごく浅い、SA 13と一通のも?			27回
SA 18	長方形 (長方形土坑付)	不明	2.3×1.6	3.3	小破片のみ	東側に長方形土坑が付属する(1.4m ²)			28回
SA 19	長方形 (長方形土坑付)	不明	3.25×1.9	5.6	甕、壺	SA 18に上がる土の段段状構成、西側に焼床の焼土、柱の復縫様の2対×4列のくぼみ、東側に長方形土坑が付属する(3.7m ²)			28回



第15図 椎屋形第1遺跡A地区 SB1～2実測図



第16図 椎屋形第1遺跡A地区 SB 3～4 実測図



第17図 椎屋形第1遺跡A地区 S A 5～6 及び S B 6周辺出土土器実測図

な埋土が見られた。長方形の掘方の東端に寄せて柱を据え、周囲はアカホヤ混じりの黒色土で堅く締めたものと考えられる。柱の傾きは垂直、直径は12~13cmであった。完掘時に上層の重みによると思われる柱の円い圧痕が、この2柱を含め6カ所見られた。北東端には1カ所柱の建て替えが見られる。

S B 3は、長方形の掘方が顕著に見られ、柱の圧痕と思われる浅い円い窪みが7カ所確認できた。また、建て替えあるいは補助の支柱と思われるピットも見られる。棟持柱を有する。

S B 4は、同様に掘方の多くが長方形もしくは方形を呈している。また、柱の圧痕と見られる窪みも1~2カ所残る。柱の建て替えあるいは補助支柱と思われるピットも見られる。棟持柱を有する。

S B 5も棟持柱を有する建物跡で、柱の圧痕と思われる窪みが7カ所確認できた。

S B 6はこれらの掘立柱建物跡とは異なり、堅穴住居跡群の中に位置する。堅穴住居跡との切り合いはなく、平面プランはやや歪な長方形で、柱間は1間×1間である。東側にコの字形に囲むような溝が見られる。溝は、コンターラインから見るとやや中途半端ではあるが、排水を意図したものかあるいは区画を意図したものかもしれない。溝の中央、建物の主軸線上に近く、やや大きなピットが見られる。このピットや溝からは、第17図1~3の臺形土器片が出土している。このほかにも溝や柱の掘方から甕部片等が出土している。

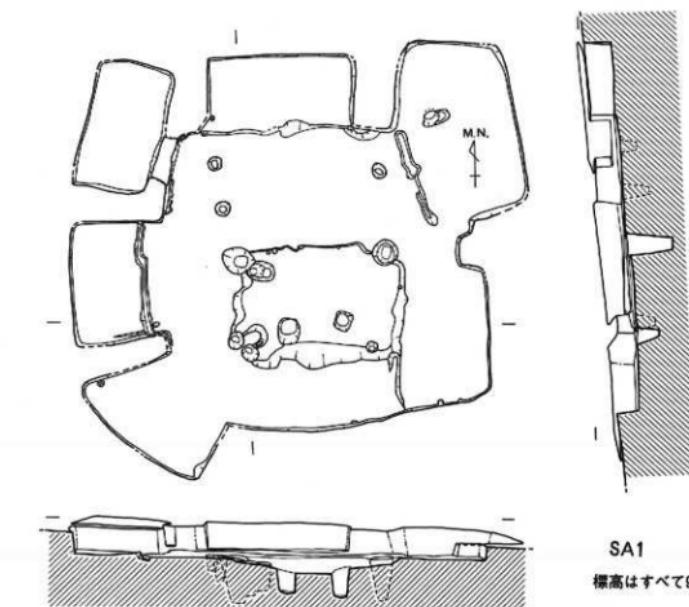
(2) 堅穴住居跡 (S A)

堅穴住居跡は、掘立柱建物跡を中心に床面積の大きいものや間仕切り壁を有するものが標高の高い方に分布し、10m²未満のものが標高の低い方に分布している。なかにはS A 19のように住居跡とは考えにくい堅穴もあるが、ここでは一応堅穴住居跡として報告したい。全部で19軒検出した。このうち、明らかな切り合いで2例、連続して作られたと思われるものが2例ある。また、床面積の大きな住居跡には柱の建て替えや間仕切り壁の一部削平等が見られる。表5を参照されたい。次に表に補足しておきたいことを簡単に述べる。

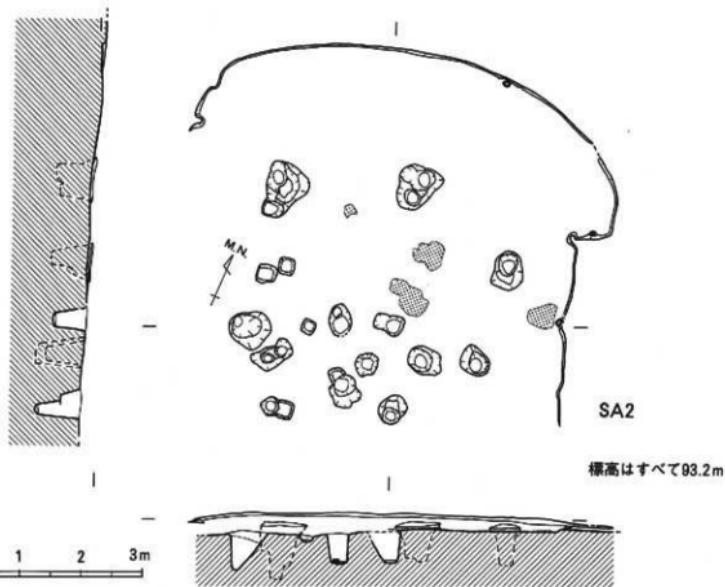
S A 1は間仕切り壁を有する住居跡である(第18図)。検出時既にトレッチャードで上部を筋状に攪乱されていた。ただ、この攪乱箇所以外は原位置を保ったまま、床面も破壊を免れていた。埋土はほぼ1層で、中央部と間仕切られた各区画との堆積状況に違いは見られない。中央の東西に並ぶ主柱に平行に南北両側に支柱穴が見られる。このうち西側の主支柱穴には、建て替えもしくは補助支柱と思われる複数のピットが見られる。また、中央や南よりの土坑には、S A 2・3等大型の住居跡に見られる2本の比較的大きな支柱穴がある。これら支柱穴の深さはおおむね40~50cmである。

このほかS A 1には、ベッド状遺構や溝で区画された間取りが見られるが、北西側の1区画は、間仕切り壁の先端がカギ状に曲がった状態で残され、狭くなった通路部分の床も1段盛り上がった状態で削り残されており、長方形の土坑を造り付けたような構造になっている。また、南西の一角は、中央の土坑から南に延びる段差と東壁の張り出しとでベッド状遺構のようになっている。

遺物は、主に中央部分に出土している。殆ど浮いた状態で、壁際ほど高く中央部へ低くなる。主な遺物では、第19図1が南西支柱穴の西側で、2が北西支柱穴の南側で、5が中央土坑内の2本支柱穴の北側で、3・4が東側主柱穴の北から北東の溝付近で、6・7が北のベッド状遺構の段差付近でそれぞれ集中して出土している。また、21は同ベッド状遺構の西端で、11は前述の北西端の土坑状の区画内の上部で出土している。石器のうち表8の1・2は、中央土坑内の南側で、石皿は床面直上、磨石はかなり



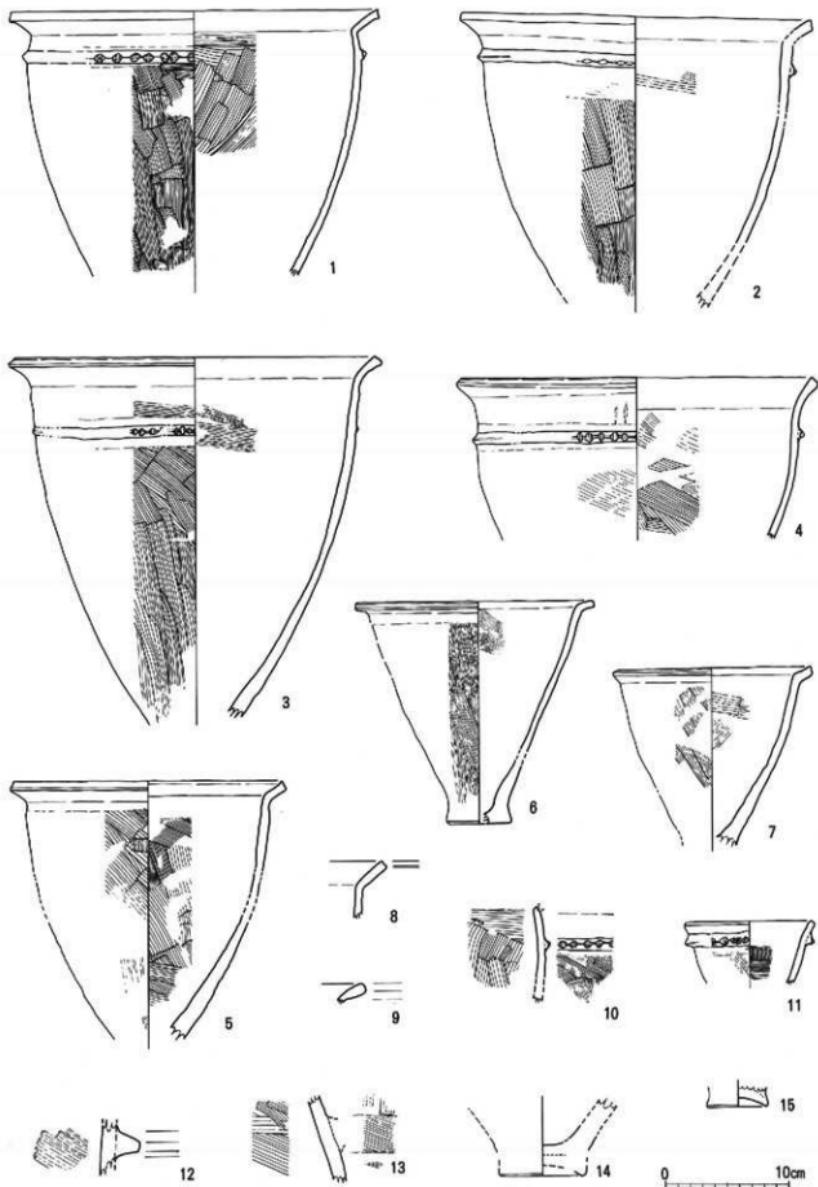
SA1
標高はすべて92.5m



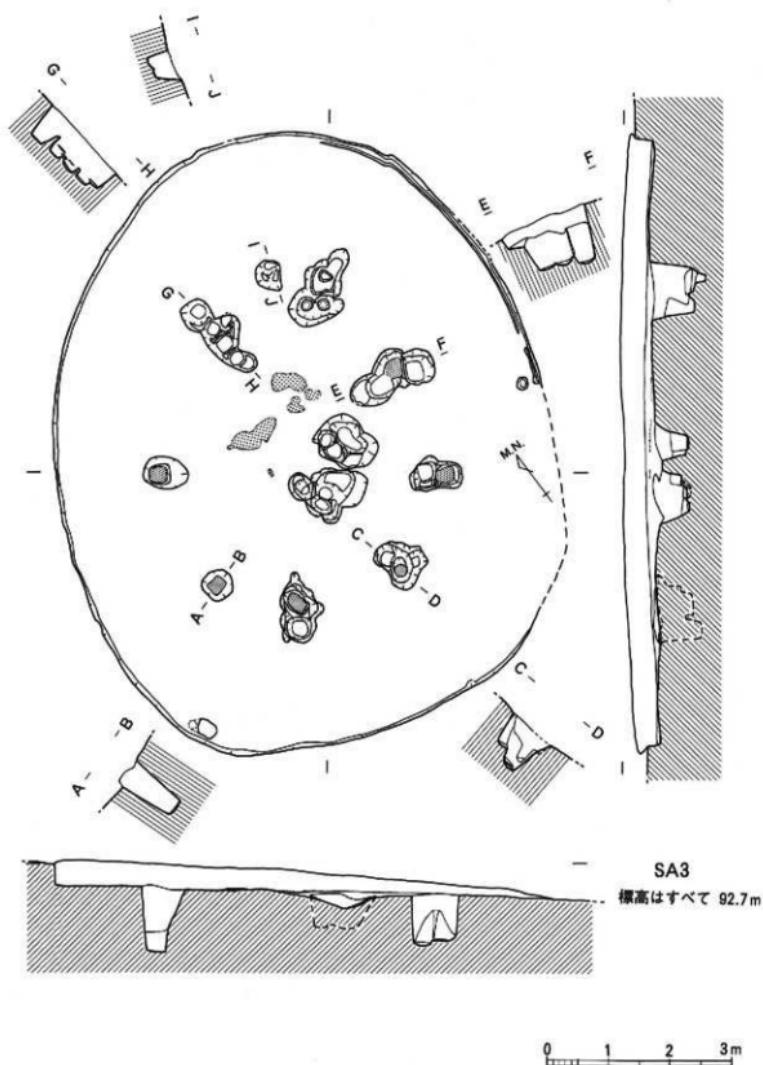
標高はすべて93.2m

第18図 椎屋形第1遺跡A地区 SA1～2実測図

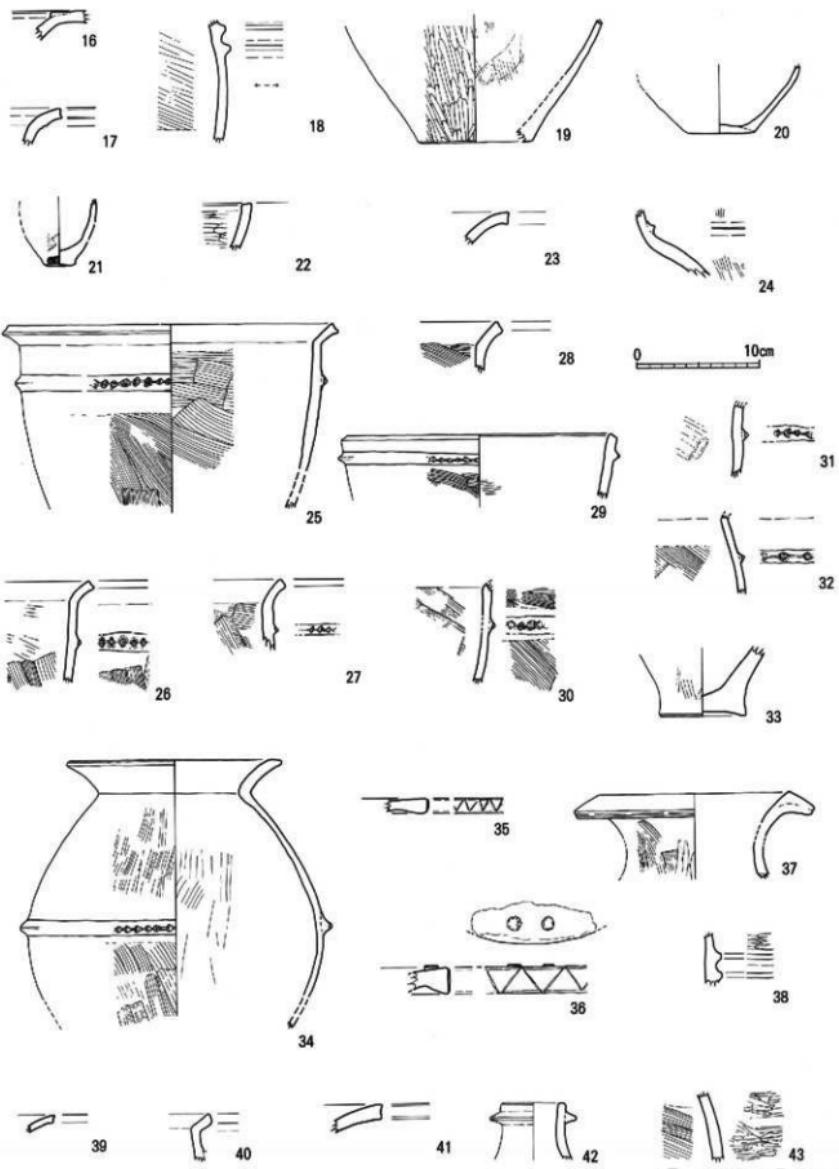
0 1 2 3m



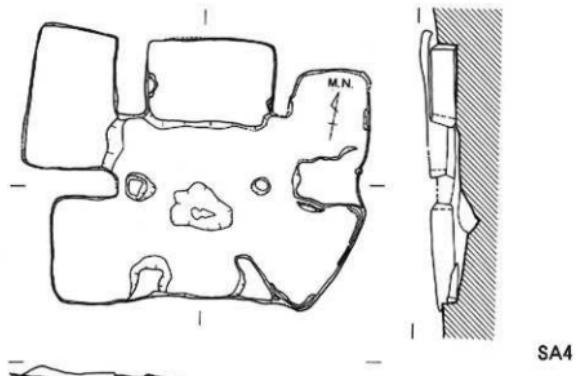
第19図 椎屋形第1遺跡A地区 S.A.1出土土器実測図



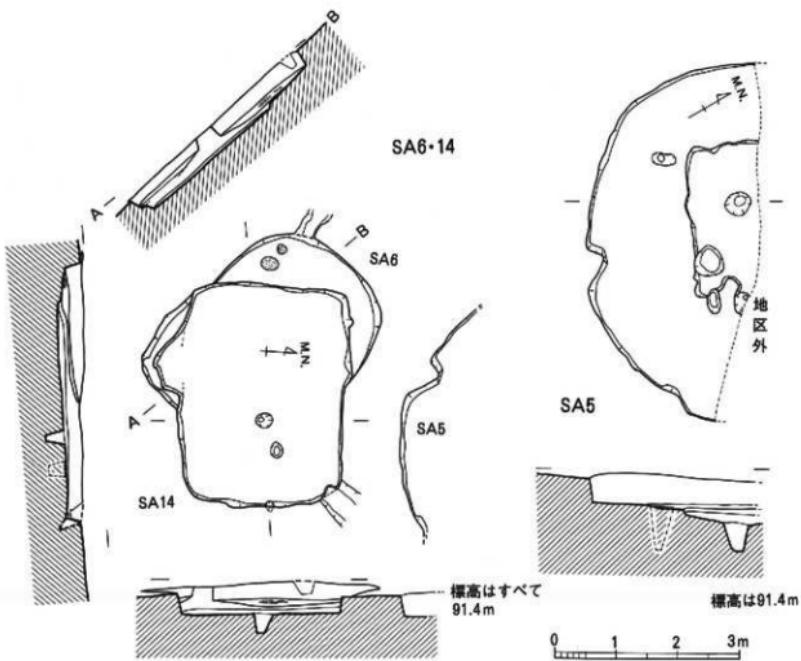
第20図 椎屋形第1遺跡A地区 S A 3 実測図



第21図 椎屋形第1遺跡A地区 S A 1~4出土土器実測図 1号 16~22、2号 23~24
3号 25~38、4号 39~43



標高はすべて
93.1m



第22図 椎屋形第1遺跡A地区 SA 4~6・14実測図

浮いた状態で出土、4・5の穿孔のある装飾品様の石製品は、北西端土坑状区画内とその東側段差を越えた箇所でかなり浮いた状態で出土した。

S A 2は、耕作により削平されたと考えられ、北～東側の壁の一部と主柱の掘方、床の一部のみ残存していた(第18図)。主柱穴は円形に並ぶ。掘方は殆ど2回、多くて3回の建て替えが見られる。最終的な掘方は、遺憾ながら記録漏れで不明である。中央の柱穴2本は深さ50cmである。掘方の中には、上端幅22～23cm、下で15～16cm幅のU字形鋸先状の工具痕の残るものがある。

遺物は、北側壁の中央東寄り床面と中央の焼床面のまわりで少量出土している。石器のうち10の石庖丁の未製品と思われるものは、この北側壁付近で出土している。

S A 3(第20図)は、同じく円形に主柱が並ぶ住居跡である。柔らかい埋土の柱痕跡がアミ掛け部分の掘方に残存していた。その周囲はアカホヤ混じりの土で固められていたが、完掘すると2～4回、多いのは9回もの建て替えと思われる連続し切り合うピットが検出された。中央のピットでも4回以上の建て替えが考えられる。掘方の底には掘立柱建物跡と同じく方形のものが見られる。

遺物は全体的に出土している。ただ、壁の残存状況のよくない南東部は埋土も薄く、遺物は少なかった。深耕による削平と遺構検出の際の指示の失敗によるものであろう。遺物には小片が多く、石器では砥石や磨製石鎌、チップなどが多く出土している。この砥石は主に北半部分で出土、磨製石鎌はほぼ全体的に出土、計測表の21の敲打痕と研磨痕の見られる工具様の石器は南西壁際で出土した。また、土器のうち第21図29は、北西壁際で浮いた状態で出土。この土器はS A 11の中央付近出土の破片と接合する。25は北半全体に散乱し、殆ど主柱穴の外側である。34は南西壁際で浮いた状態で出土。胴部片であるが、S A 8の中央土坑付近の口縁部～頸部片に接合した。

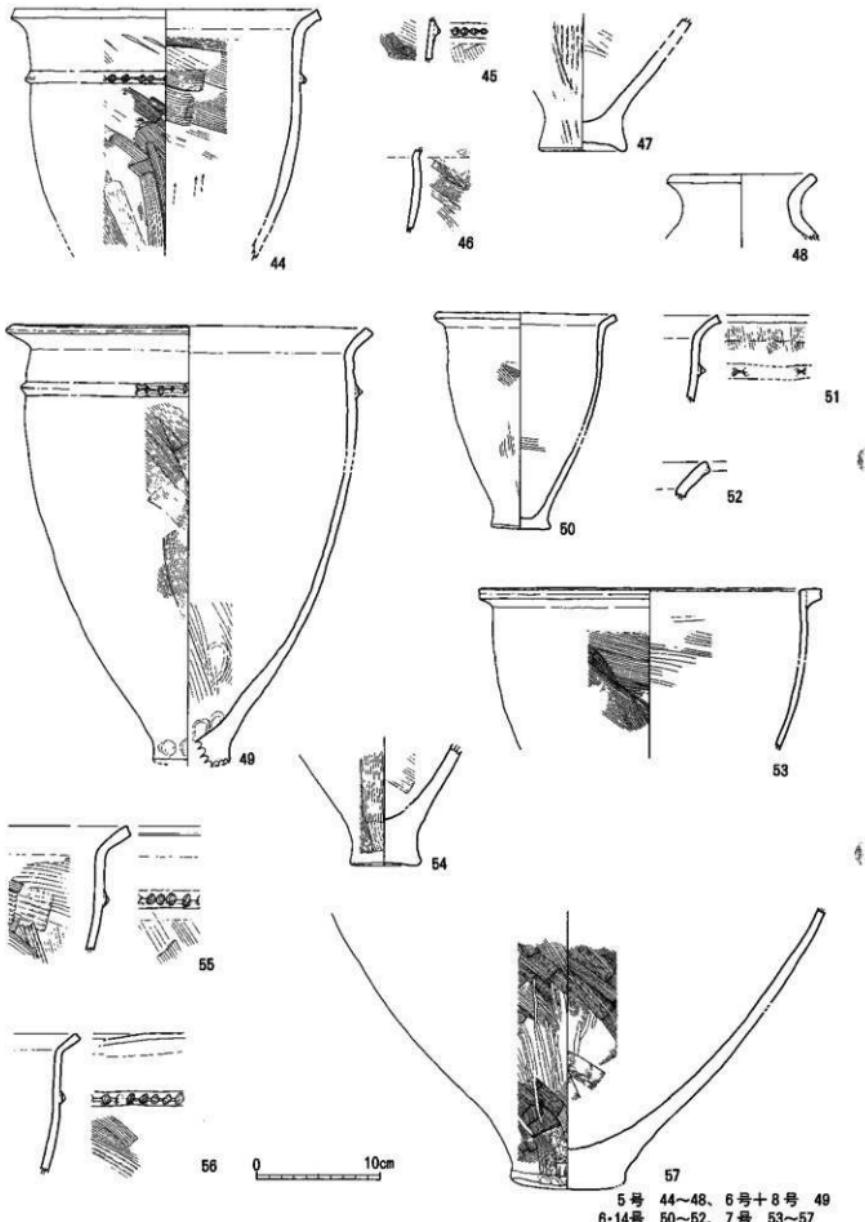
S A 4(第22図)は、当初間仕切り壁が3ヵ所と考えられていたが、アカホヤや黒色土等の混じった貼床を除去する際に、削平された間仕切り壁の下部が残存し、貼床することでは床の高さを合わせていることが確認された。遺物は少ない。中央土坑付近にやや集中、しかし、全体的に見られる。浮いた状態である。北のベッド状遺構からは鉄片が出土している。

S A 5(第22図)は半分以上地区外にかかるため全掘できなかった。中央土坑内にある中央柱穴と思われる掘方の深さは45cmである。遺物は殆ど浮いた状態で出土しているが、第23図44は中央の土坑と南西壁との中间付近から土坑にかけて出土、床の直上である。

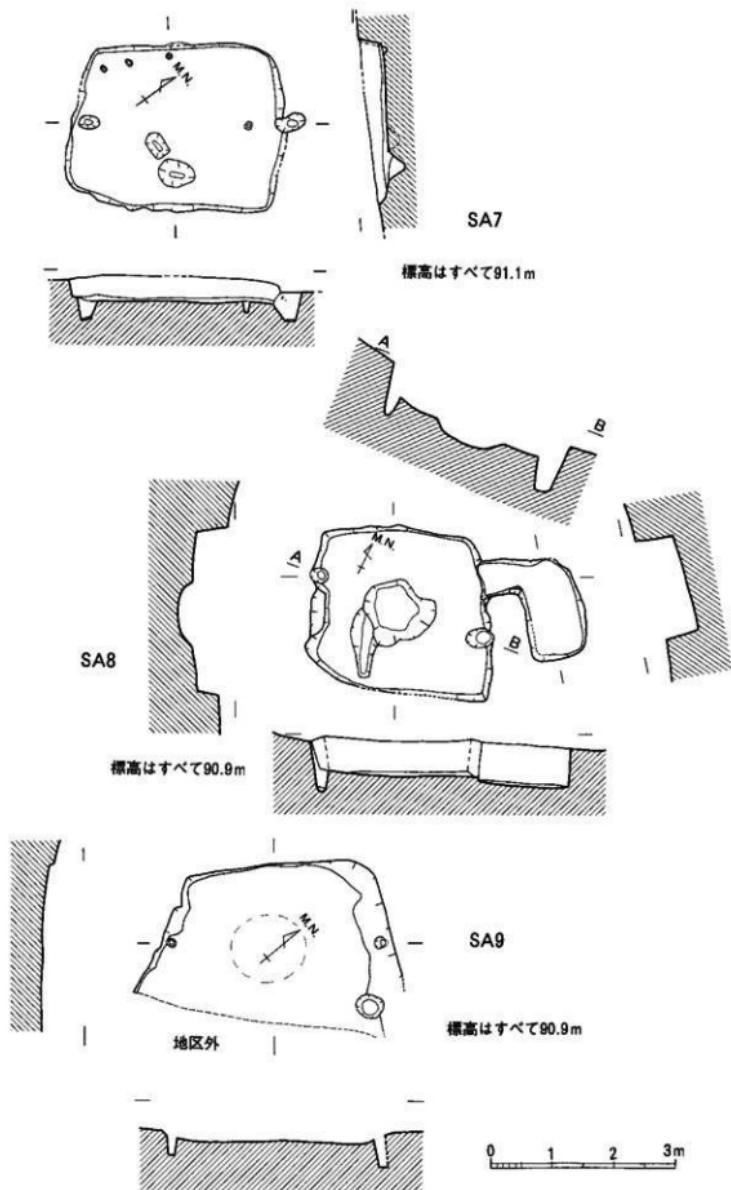
S A 6とS A 14は切り合って検出された(第22図)。しかし、土層断面の観察では切り合いの新旧関係はつかめていない。遺物はS A 6の床面に張り付いたもののみS A 6で取り上げ、その他はS A 6・14と併記して取り上げた。S A 14は小破片が全体から出土しているが、S A 6の推定範囲外の出土遺物も小片である。しかし、S A 6からは、第23図49の甕形土器が西～北西壁際に残存する床面直上で出土している。これは、S A 8の中央土坑付近出土の底部に接合した。また、50はS A 6の南側の床面の残存する箇所と崩壊部分との境目付近で出土。崩壊の状況からするとS A 6に伴う可能性が強い。

S A 7(第24図)の埋土は、中央が窪んだレンズ状堆積が見られ3層に分層できる。遺物は南北の角を除いて全体に出土している。土器のうち第23図55は、北東主柱穴の南側でやや浮いた状態で出土、57と石器の19石皿は、西壁際の床面直上で出土した。

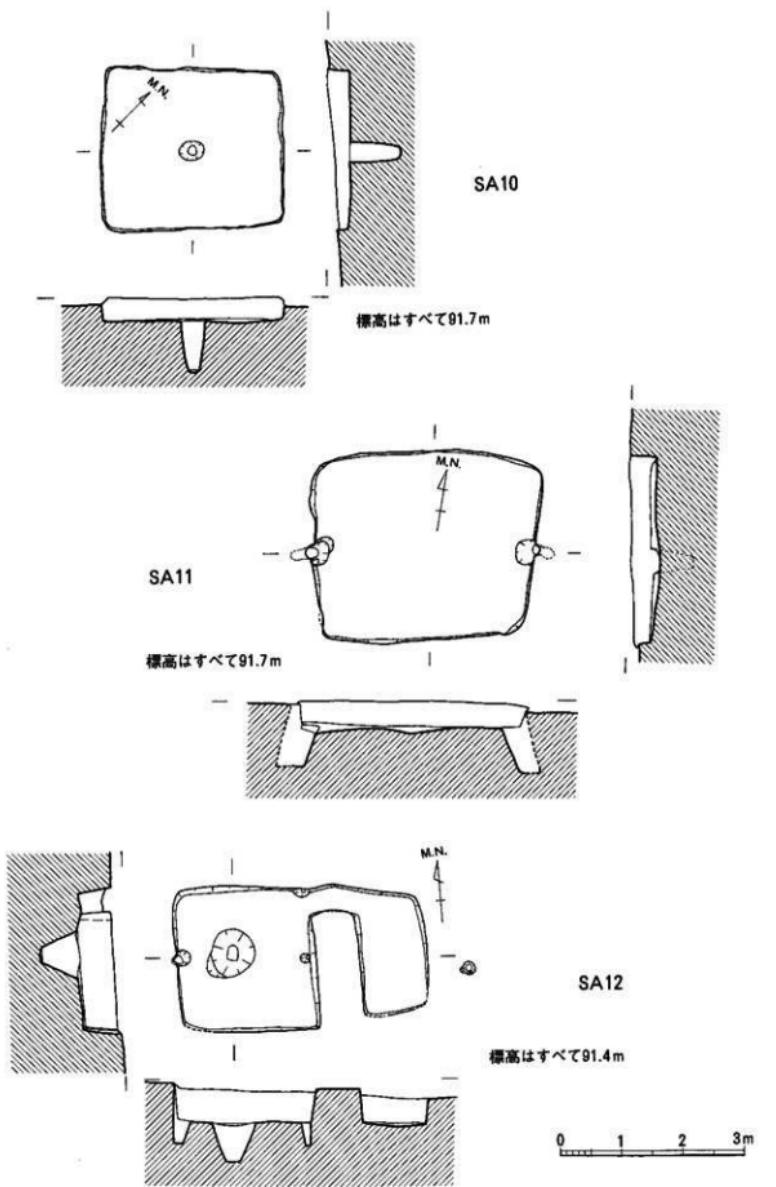
S A 8は方形の住居の壁の途中から短い通路付きの土坑を取り付けたような構造の竪穴である(第24



第23図 椎屋形第1遺跡A地区 SA 5、6・14、7出土土器実測図



第24図 椎屋形第1遺跡A地区 SA7～9実測図



第25図 椎屋形第1遺跡A地区 SA10~12実測図

図)。土坑は住居床面より約10cmほど低く、長軸165cm、短軸95cmの長方形プランである。遺物は中央土坑付近を中心に出土。土器のうち第26図62は東角付近で、63の瀬戸内系凹線文高坏脚部片は北壁際中央付近で出土している。また、前述の34(SA3)・49(SA6)に接合した土器片は、中央部の比較的床面に近い所から出土している。

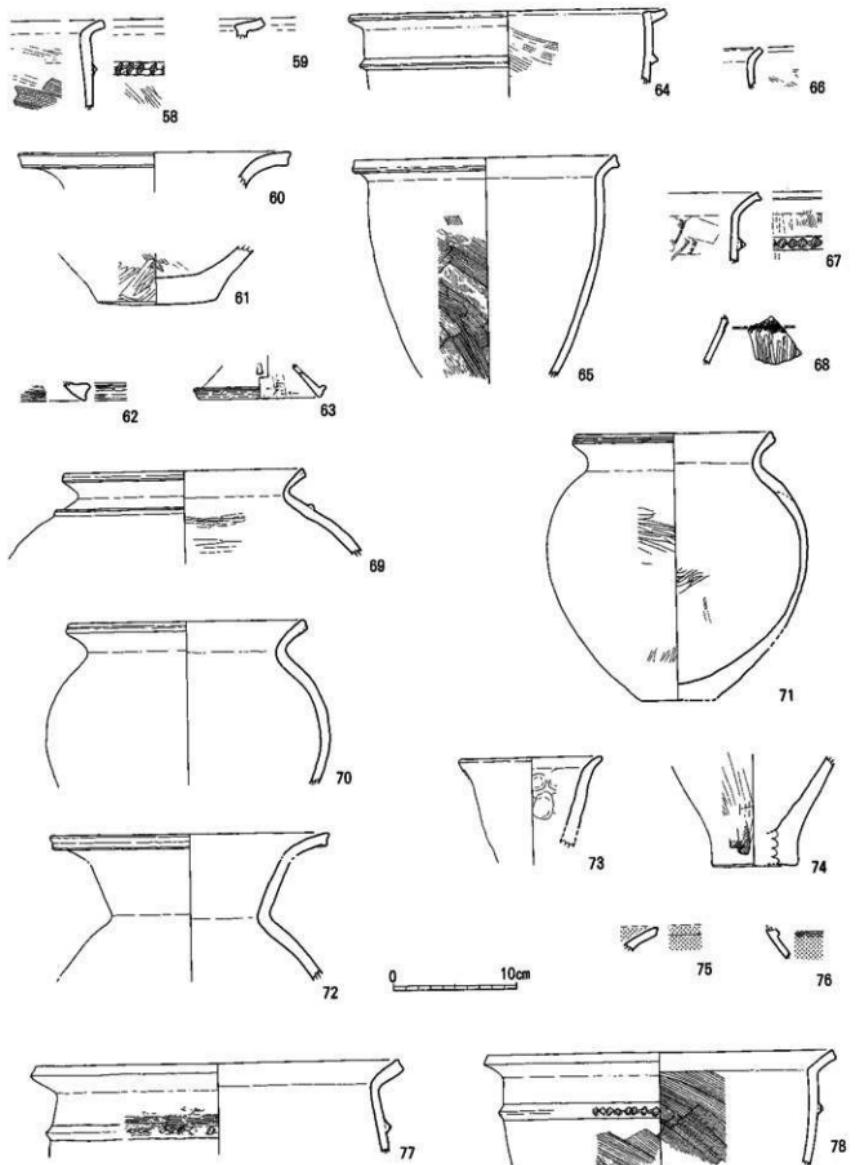
SA9は半分以上が地区外となって全掘できなかった(第24図)。床面中央部付近に焼土面を確認したが、現地で記録する際に記入漏れしてしまった。図中の破線部分がおよその範囲である。この焼土中からは炭化した木の実が出土している。遺物は中央の焼土付近から北東側に集中するが、西側でも出土していて、いずれも浮いた状態である。遺構・遺物の検出時に、図化した遺構プランの西側部分に略方形プランの一部とも取れる浅い落ち込みがあるのを確認したが、壁の崩れとも見えたため図化はしなかった。切り合いであった可能性も否定できない。出土土器のうち第26図64が北西側壁近くで出土、この同一個体がSA8でも出土している。65は焼土面の上部で、68・69は南西角で出土している。また、70・71は北東側に散乱していたもので、直接は接合せず推定口径も異なるが、少し凹線気味に窪む口縁部ややや膨らんだ肩部などの特徴がよく似ていて、同一個体の可能性が高い土器である。ただ、内面の色調は異なる。

SA10(第25図)は、遺物が全体的に見られ、これらは浮いた状態のものが多い。主柱穴周辺にやや集中している。そのうち土器では、第26図73が主柱穴の北西側に出土、75・76などの丹塗り土器片は南～南西側に出土している。丹塗りの土器はSA10だけで破片のみ9点出土している。石器のうち計測表の44～46は北東側に、47は主柱穴の西側に出土している。このうち45のみ浮いた状態で、ほかは床面直上に出土している。炭化材が主柱穴を中心に南西側と南東側に見られるが、これらは床面直上の遺物の上に覆いかぶさった状態で検出された。埋土中には細かな炭化物が多く含んでいる。

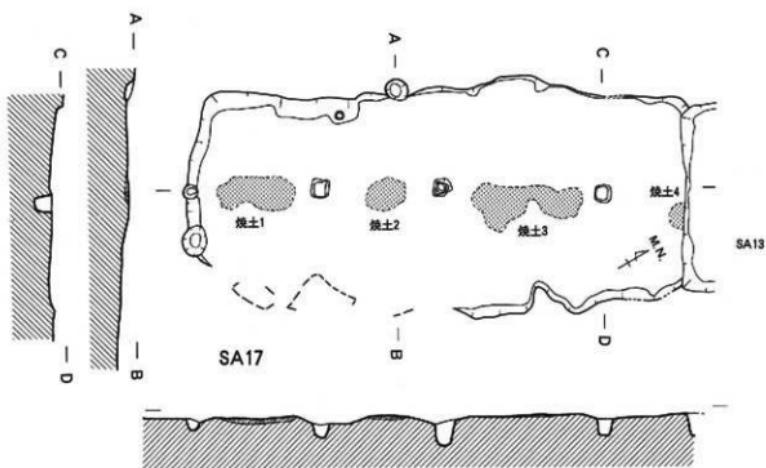
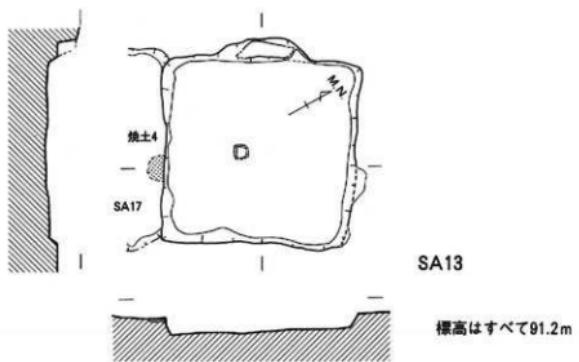
SA11(第25図)は貼床が4～8cmと比較的厚く作られている。遺物は主柱穴間の中央付近に出土した。殆ど浮いた状態で中央部分がやや低くなる。このうち第26図77・78の壺形土器は同じく中央付近で浮いた状態で出土している。79は、東側主柱穴の北西で出土。SA10の北西壁際出土の小片と接合する。85は中央付近出土である。

SA12(第25図)は、SA8に似て通路の付いた土坑を付属させている様な構造である。異なる点は、住居の角から通路を作ること、通路も長方形土坑の床面も住居の床面とほぼ同じ高さであること等で、長方形住居に大きな間仕切り壁が掘り残されている様にも見えるが、通路がやや屈折していることと土坑の長軸がやや短いことから付属させていると見たい。土坑は2.0×1.1mの規模である。ちなみに主柱穴の軸線上での土坑まで入れた長軸は4mを測る。土坑の南側でこの軸線上近く支柱かと思われる小ピットが見られる。中央ピットは77×69cmで深さ61cmを測る。遺物は少なく、小片が浮いた状態で出土している。

SA13とSA17は隣接している(第27図)。検出時には、長い長方形状に黒っぽい埋土が見られ、その南西側の中央部に焼土が飛び飛びに並んでいるのが確認された。この埋土を除去したところ、SA13のみ竪穴状に深さがあり、SA17としたところはごく浅く、中央部の焼土列の間に柱穴列が確認された。SA13の埋土は、床面のうえに暗褐色の固い層が堆積し、その上面に径40～80cmの範囲で4カ所の焼土が見られた。この上には暗褐色土混じりの黒色砂質土が覆い、その中央部上層のみ黒色シルトのきめ



第26図 椎屋形第1遺跡A地区 SA 8~11出土土器実測図



0 1 2 3m

第27図 椎屋形第1遺跡A地区 SA13、17実測図

細かな土が堆積していた。このS A13の埋土の上部にも焼土が1カ所あったが、S A17の焼土とは並んでいない。このことは、S A13の埋没過程のある時期その面を使用して火を用い、さらに上部まで埋没したとき再び火を用いたことがあったと言うことで、それはS A17に焼土列ができた時期とは時期差があったとも思える。S A17はS A13の規模の住居が横に次々に続けて営まれて行った様な形状に思える。

S A13の遺物量は少なく、小片が全体に散乱した状態で出土している。S A17の遺物は、北東側のS A13に近い方に片寄って分布している。これらは床面近くで出土しているが、なかでも第29図101は、焼土3付近からその北西側壁際付近にかけて集中して出土している。また、この焼土3からは多くの炭化した木の実が出土している。木の実は分析の結果が後に掲載してあるので参考されたい。

S A15・16は切り合って検出された（第28図）。土層断面からは、S A15とS A16の境にS A15の壁の上部の立ち上がりは確認できなかった。また、S A15の壁際の埋土とS A16の壁際の埋土に違いが見いだせず、新旧決しがたい。ただ、S A16に見られる貼床がS A15側の埋土の途中に確認できなかったことから、S A15の方がS A16を切っている可能性がある。遺物は、取り上げる際に切り合い関係がよく分からなかったため、S A15・16として取り上げたが、殆どはS A15の範囲内で出土している。土器の第29図95・96は、S A16のピット内から出土したものである。93の瀬戸内系凹線文土器片は一括取り上げの中にあった。94の鉢形土器は、S A15の西壁際、S A16との境付近を中心に出土した。また、石器の56台石としたものは、S A15の床面中央に据えられていたもので、わずかに磨面と黒色の付着物が見られる。

S A18・19は、S A18の一部をS A19が切った状態で検出された。それぞれ似た構造であり、住居というより長方形の土坑が短い通路で連結されたもの、もしくは間仕切り壁が掘り残された長方形竪穴建物といった構造である。大小の土坑の埋土に差異はなく、同時期のものである。S A12に似てそれぞれの床面の高さは同じである。S A19はS A18と角を接する状態で、S A18からS A19へ降りる階段状の固く踏み締められた様な土盛りが見られた。S A19には階段を降りた右側の壁際に焼土塊があり、壁面まで焼けた状態であった。また、階段の正面には6個の縦横に並ぶ小ピットとややずれた位置に2個の若干大きめの小ピットが見られた。調理施設的な建物を連想させる状況である。

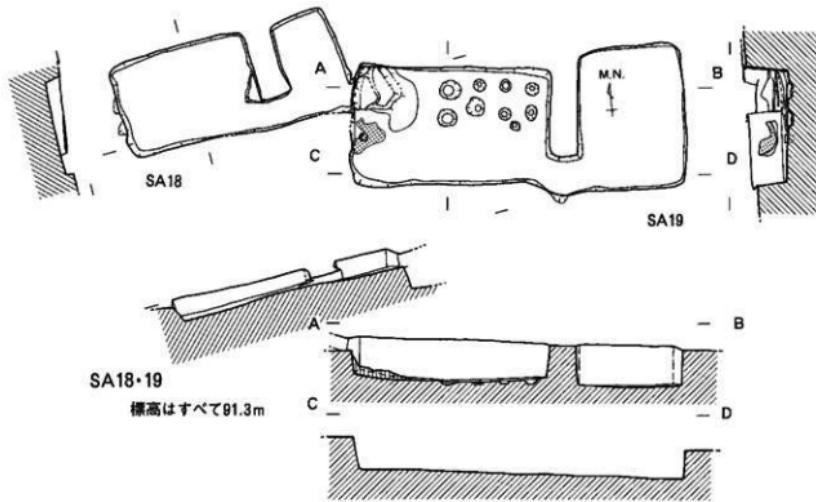
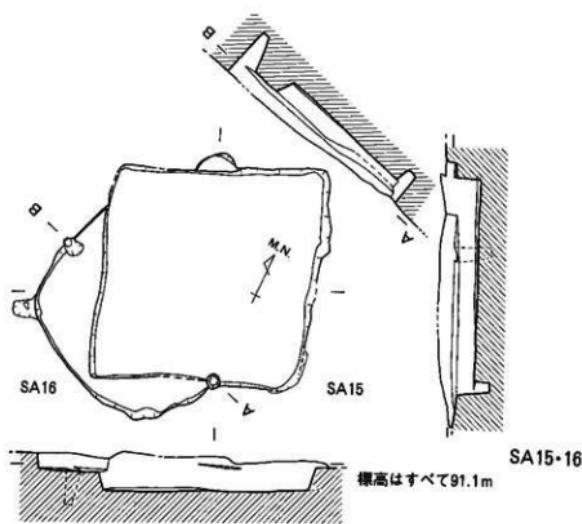
遺物は、S A18の場合小片が少量、小さい土坑の方にも数点出土した。S A19は、やはり小片が焼土付近にやや集中し、その東側のピットから南側にかけて出土した。焼土付近の土器は張り付いているが、ほかは浮いた状態である。小さい土坑の方からは小片が3点出土、そのうち西壁際で第31図104が出土した。

（3）周溝状遺構（S L、第31図）

A地区の南西の外れた位置にトレッチャード筋状に擾乱された状態で検出された。四角っぽい梢円形といった形状である。長軸はほぼ東西方向を向き、長径6.05m、短径はトレッチャードに切られて擾乱されているが、推定6.1m程と思われる。東側の周溝内にピットが1基検出されている。検出面がアカホヤ層で、上部を耕作により擾乱されていたので溝の深さは浅い。遺物は少なく、第30図110等の変形土器片が出土している。

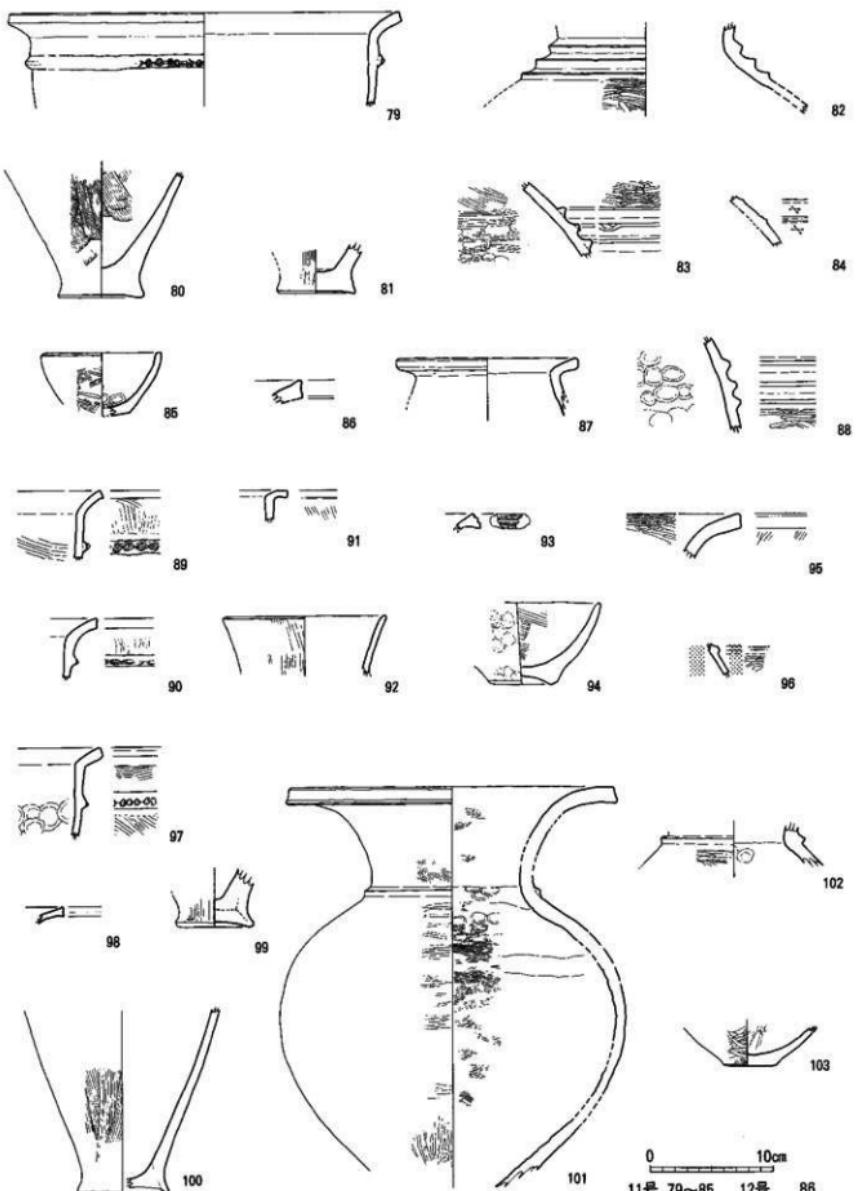
（4）土坑（S C）

A地区ではS A18等土坑としてもよい様な竪穴が検出されているが、さらに小規模の竪穴と墓壙と思

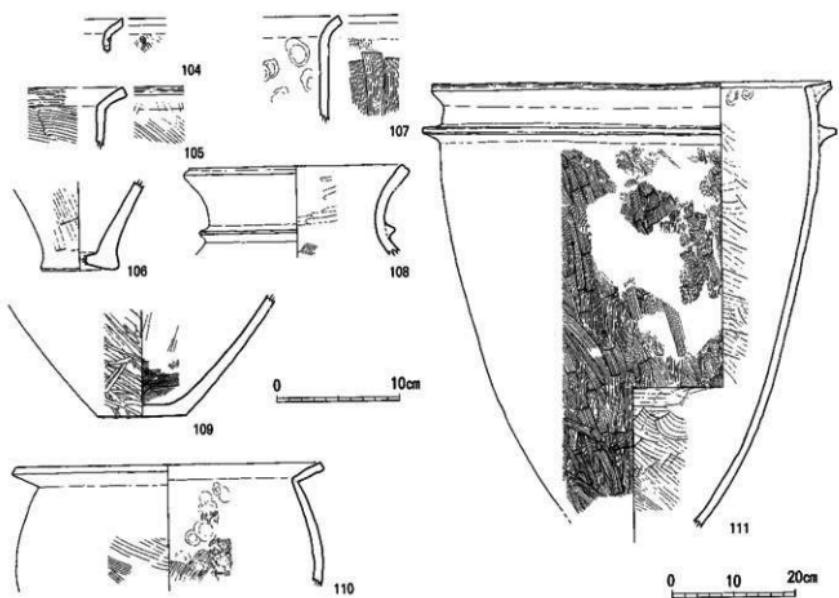


0 1 2 3m

第28図 椎屋形第1遺跡A地区 SA15・16、18・19実測図

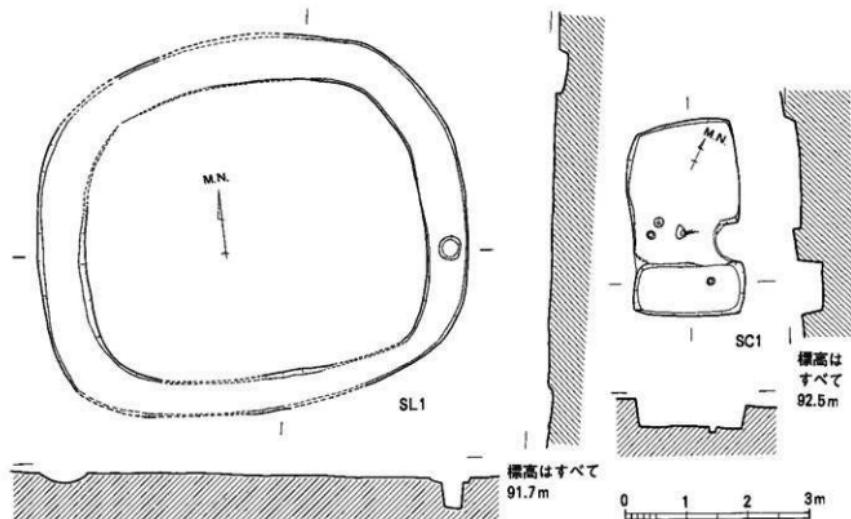


第29図 椎屋形第1遺跡A地区 SA 11~13、15~17出土土器実測図

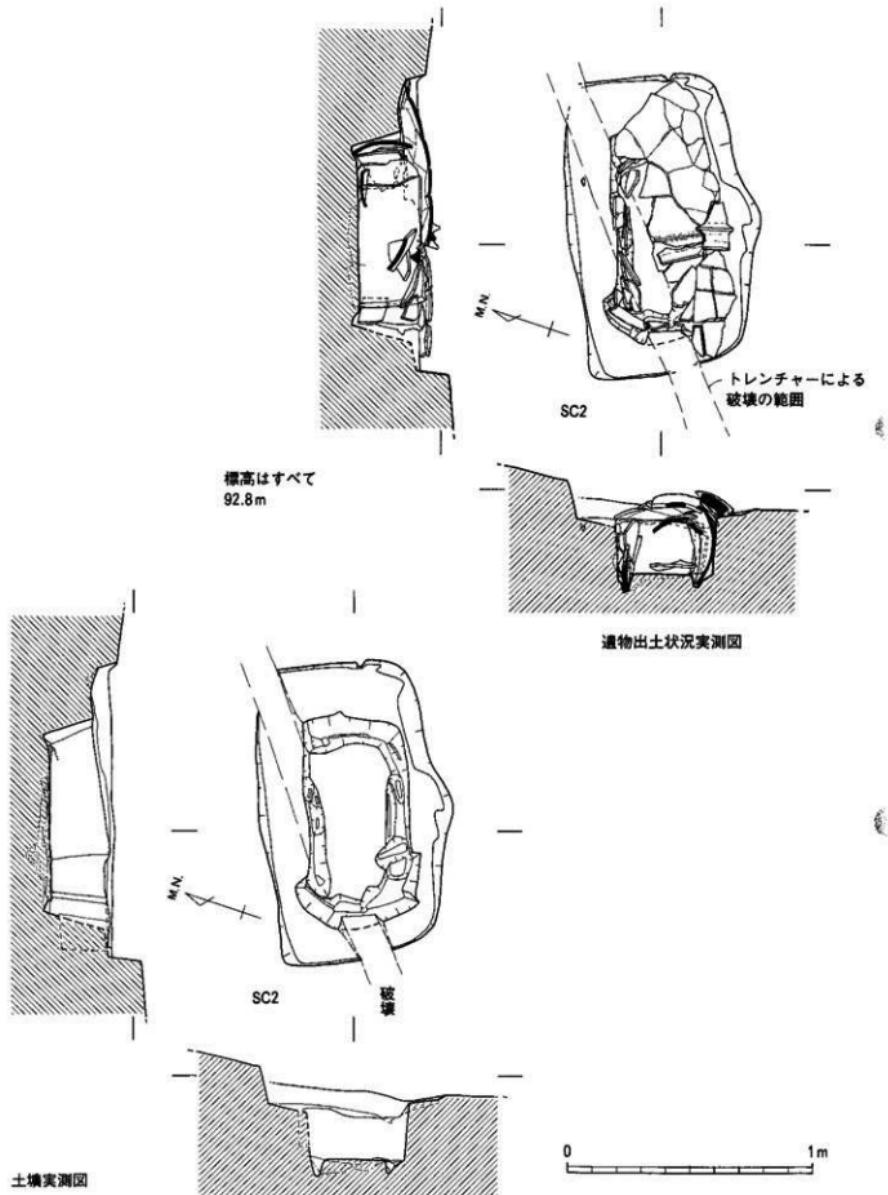


第30図 椎屋形第1遺跡A地区 SA19、SL1、SC2 出土土器実測図

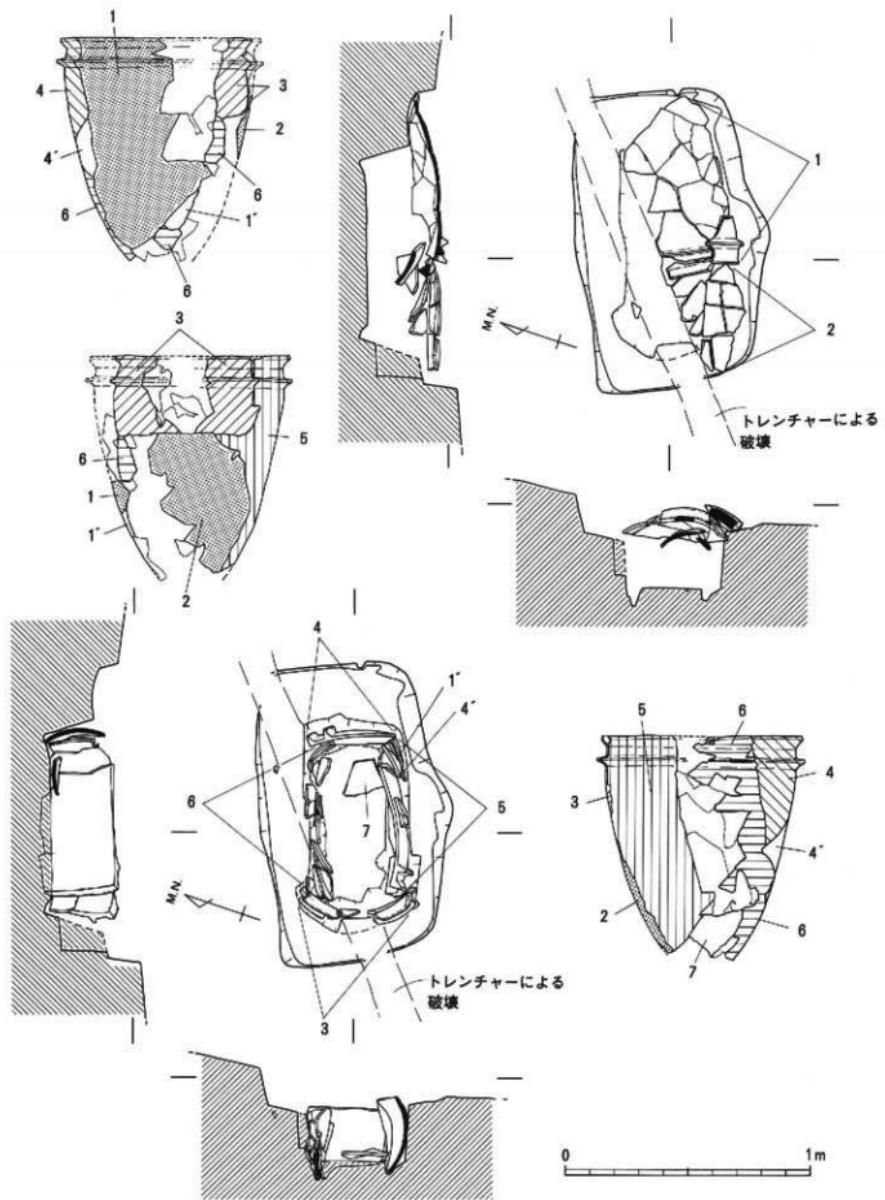
19号 104~109
SC2 110
SL1 111



第31図 椎屋形第1遺跡A地区 SL1、SC1実測図



第32図 椎屋形第1遺跡A地区 S C 2 実測図



第33図 椎屋形第1遺跡A地区 S C 2 土器片利用部位状況図

われるものを土坑として報告する。

S C 1 (第31図)は、S A 4 の東側で検出された。周溝状遺構や S C 2 と異なり、住居跡群に近接して営まれている。3.2m×1.8mの長方形を呈する。土層観察用のベルトを除去する際に埋土を見極められず、東側の壁の一部が内部へ突出する箇所の西側部分の形状が確認できなかった。当初の形状は、間仕切り壁のようにある程度内側へ飛び出した形で掘り残されていたものか。南側の壁際は、北側の床面より30cm程深くなった土坑となる。遺物は殆どない。

S C 2 (第32・33図)は、A 地区の西側の外れた位置に1基だけ検出された。ちょうどトレンチャー耕作の端の一筋が床面近くまで破壊しており、畑の表面に遺物の一部が出土していた。遺構は県内では例を見ないものであるが、二段掘り土壌に箱式石棺墓の石を第30図111の大甕の破片に替えて組み合わせたものであるといえよう。その組み合わせ部位は第33図を参照されたい。西側の小口のみ口縁部を上向きに据えている。これらの土器片の固定にはアカホヤの2~3cm前後のブロックを中心に黒色土等を充填している。規模は、土壙が上段で122cm×70cm、深さ10~15cm、下段は推定85cm×42cm、深さ約20cmである。箱式棺の蓋には2個の大きな破片を用いているが、合わせた長さが113cm、幅はトレンチャーで破壊されていて不明、土器棺部分の内法は78cm×30cm、高さ約30cmを測る。床面はそのまま自然層になる。この大甕は底部が見られず、接合復元するとトレンチャーの破壊箇所のみ破片が失われている。

(5) 出土土器

弥生土器については、県内の土器編年資料の充実をはかるためにも可能な限り図化に努めた。ここでは各遺構の土器を一括して、各器種毎に形式分類を行うこととする。

甕形土器

口縁部等の特徴により7類に分類した。

I類 台形状の突堤を貼り付けた逆し字状口縁のもの (53)。口縁部はほぼ水平で、端部にわずかな窪みが見られる。胴部に突堤は付かない。

II類 突堤を貼り付けた逆し字状口縁であるが、端部がやや立ち上がるもの (64)。端部にわずかな窪みが見られる。胴部には三角状突堤が付けられる。

III類 口縁部がくの字状になり、口縁直下に一条の刻目突堤が付くもの。端部は上方へわずかに立ち上がり、口唇が浅く窪む。次の3類に細分する。

a 口縁部の屈曲が強いもの (1, 2, 25, 40, 78, 97)

b 口縁部の屈曲がやや弱いもの (3, 26, 49, 51, 55, 56, 58, 67, 77, 79, 89)

c 口縁部の屈曲が弱く外反するもの (4, 27, 44, 90)

このIII類の胴部片と思われるもの (10, 30, 31, 32, 45, S B 6 の第17図3)

IV類 III類同様口縁部がくの字状になり端部が上方へわずかに立つが口縁直下に突堤は見られないもの (5, 50, 65, 107, S B 6 の第17図1)。口唇部にわずかな窪みを有するものもある。

このIV類の胴部片と思われるもの (46)

V類 小型の甕で、胴部が膨らみをもたないまま口縁から直線的に底部へ至るもの。次の2類に細分する。

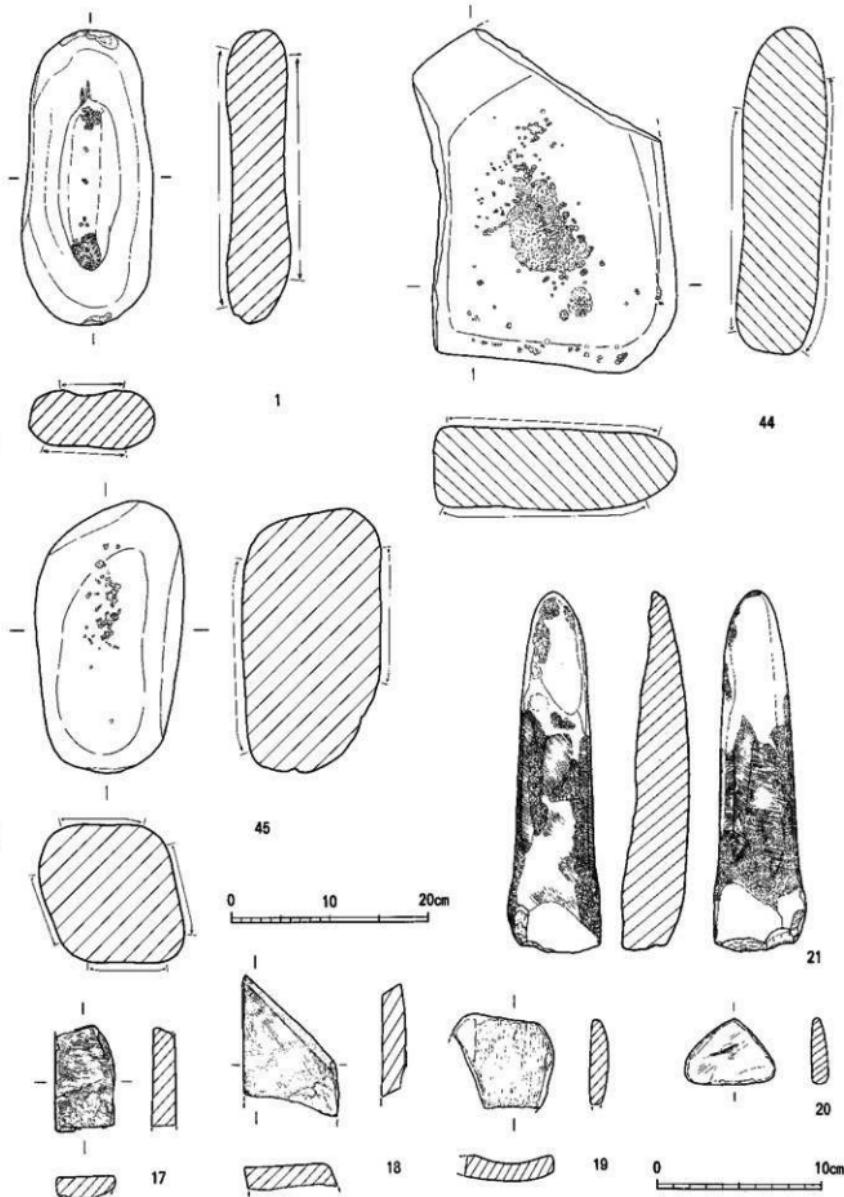
a 口縁部が屈曲し水平よりやや起きるもの (6, 7)

表6 椎屋形第1遺跡A地区 弥生土器観察表(1)

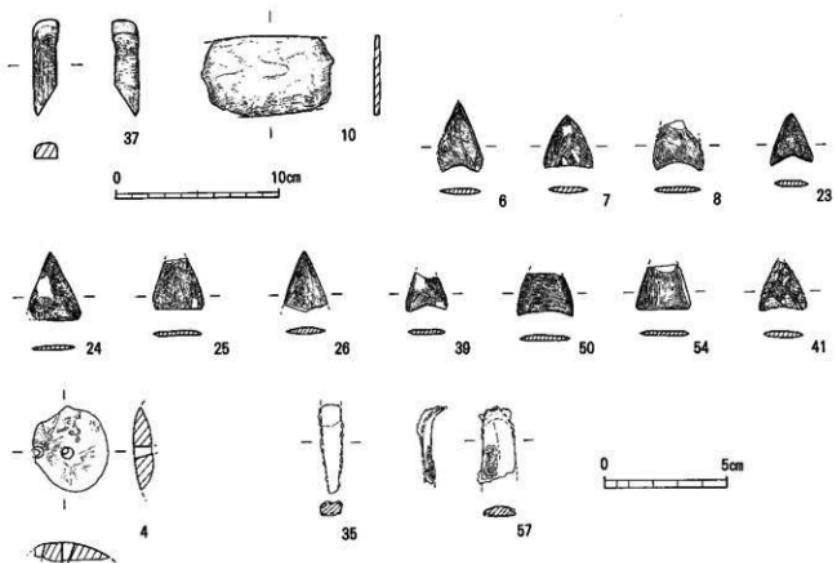
品番号	出土遺物	目録	器 形 制 限		色 調	地土中の形態・鉱物等の色	備 考	
			外 面 / 内 面 (上から順に)	外 面 / 内 面				
第17号1	530-8周辺	■	ヨコナデ、ハケメ/ナデ、ヨコナデ	灰白	浅黄	赤褐色、黒褐色、透明、白	内面に炭化物	
* 2	*	ヨコナデ/ヨコナデ	にぬ・黄緑	にぬ・黄緑	黄褐色、深褐色、透明	縦縫合部に赤、鋸歯に青い		
* 3	*	実物のとアコナデ、下部ハケメ/ヨコナデナメナ	にぬ・黄緑	にぬ・黄緑	黄褐色、深褐色、灰白色、灰	剖面にハケメ原体感、外面スズ		
第19號1	S A 1	■	ヨコナデ、ハケメ/ヨコナデ、ハケメ、ナデ	灰白・黄緑	灰白・黄緑	灰褐色、深褐色、灰白色、白、灰	剖面にハケメ原体感、外面スズ、確定口徑18.7	
2	*	ヨコナデ、ハケメ/ヨコナデ	灰	灰	灰褐色、深褐色、灰白色、白	剖面にハケメ原体感、外面スズ		
3	*	ヨコナデ、ハケメ/ヨコナデ、一部ハケメ	にぬ・黄緑	にぬ・黄緑	灰褐色、灰白色、白	外腹全体スズ、透光口徑14.5、外腹炭化調査		
4	*	ヨコナデ、ナメ/ヨコナデ/ヨコナデ/ナメ	浅黄	浅黄	灰褐色、灰白色、白	外腹全体スズ、内腹下部炭化物、口徑18.5		
5	*	ヨコナデ、ハケメ/ヨコナデ、ハケメ、ナデ	灰褐色、灰	灰褐色、灰	灰褐色、灰白色、白、黑	外腹上部スズ、外腹二次成因による黒化、確定口徑18.5		
6	*	ヨコナデ、ナメ/ヨコナデ、一部ハケメ	灰	灰	灰褐色、灰白色、白	外腹全体スズ、透光口徑18.5、确定口徑18.3		
T	*	ヨコナデ、一部ハケメ/ヨコナデ/ナメ、一部ハケメ	赤・青・褐	赤・青・褐	灰褐色、灰白色、白、黑	内腹炭化調査、口徑15.6		
8	*	ヨコナデ/ヨコナデ	灰	灰	灰褐色、灰白色、白、黑	外腹全体スズ		
9	*	ヨコナデ/ヨコナデ	灰	灰	灰褐色、灰白色、白、黑	外腹全体スズ		
10	*	ヨコナデ、ハケメ/ヨコナデ、ハケメ	浅黄	浅黄	灰褐色、灰白色、白、黑、金	剖面にハケメ原体感、外腹スズ、剖面に同一器の可能性あり		
11	*	ヨコナデ/ナメ/ヨコナデ、ハケメ	灰白	浅黄・明褐色	灰褐色、白、乳白	外腹全体スズ、下部腹炭化物、剖面にハケメ原体感、確定口徑18.0		
12	*	ヨコナデ/一部ハケメ原体	灰	灰	灰褐色、灰白色、白	内腹炭化調査		
13	*	ヨコナデ、ハケメ/ヨコナデ、一部ハケメ	灰褐色	にぬ・黄緑	灰褐色、白、灰	外腹スズ、安井斜路下ハケメ、内腹炭化		
14	*	ナメ/ナメ/ナメ/ナメ/ナメ	灰	灰	灰褐色、灰白色、白	明褐色、灰白色、透光調査1		
15	*	ヨコナデ、ナメ/不明	浅黄	浅黄	灰褐色、白、乳白、透明	内腹全体炭化物、底径4.8		
第21號16	*	灰	ヨコナデ/ヨコナデ	にぬ・灰	灰	灰褐色、白、乳白	内腹全体炭化物	
17	*	ヨコナデ/ヨコナデ	にぬ・灰	にぬ・灰	灰褐色、灰白色、白、黑	剖面にハケメ原体感、外腹スズ、剖面に同一器の可能性あり		
18	*	ヨコナデ、ミガキ?/ヨコナデ、ハケメ	浅黄	浅黄	灰褐色、灰白色、白	外腹全体炭化調査		
19	*	シガ、丁寧なヨコナデ/ナメ/ナメ/一部ハケメ原体	灰	灰	乳白、灰	内腹下部炭化調査、確定口徑18.0		
20	*	ナメ/ヨコナデ/ヨコナデ/ヨコナデ/ナメ/ナメ	灰	にぬ・黄緑	灰褐色、灰白色、白	外腹スズ、底径6.6		
21	*	ヨコナデ?、一部ナメ?、ナメ/ナメ	灰	灰	灰褐色、白、乳白、透明	外腹全体炭化調査、底径2.7		
22	*	飾	口唇ヨコナデ/ナメ/ヨコナデ/ハナナズヒミタギ	浅黄	灰	灰褐色、白、乳白、黑	外腹スズ	
23	S A 2	■	ヨコナデ/ヨコナデ	浅黄	浅黄	灰褐色、白、乳白、黑	外腹スズ	
24	*	ヨコナデ、一部ハケメ/ヨコナデ	灰	灰	灰褐色、白	剖面にハケメ原体感、外腹全体スズ、内腹炭化、確定口徑18.4		
25	S A 3	■	ヨコナデ、ハケメ/ナメ、ヨコナデ	灰	浅黄	灰褐色、白	剖面にハケメ原体感、外腹スズ	
26	*	ヨコナデ、ハケメ/ヨコナデ、一部ハケメ	にぬ・灰	にぬ・灰	灰褐色、白	剖面にハケメ原体感、外腹スズ		
27	*	ヨコナデ/ヨコナデ、ハケメ	灰	灰	灰褐色、白	内腹下部スズ		
28	*	ヨコナデ/ヨコナデ、ナメ	浅黄	浅黄	灰褐色、白、灰	外腹スズ、内腹炭化物		
29	S A 3+11	■	ヨコナデ、ハケメ/ヨコナデ、ハケメ	灰	灰	灰褐色、白、乳白、黑	内腹スズ、確定口徑14.4	
30	S A 3	■	ハケメ、発達したヨコナデ/ヨコナデ/ナメ/ナメ	浅黄	浅黄	灰褐色、白、乳白、黑	内腹スズ、剖面にナメ原体感	
31	*	ヨコナデ/ヨコナデ、ナメ/ナメ/ナメ/ナメ	灰	灰	灰褐色、白、乳白、黑	内腹全体スズ、剖面にナメ原体感		
32	*	ヨコナデ/ヨコナデ/ナメ/ナメ/ナメ/ナメ	浅黄	浅黄	灰褐色、白、乳白、黑	外腹炭化带スズ多、剖面にナメ原体感		
33	*	ハケメ、ヨコナデ/ヨコナデ	灰	灰	灰褐色、白、灰	外腹スズ、確定底径7.3		
34	*	ヨコナデ/ナメ/ナメ/ヨコナデ/ヨコナデ/ナメ/ナメ	灰	灰	灰褐色、白、乳白、黑	剖面にハケメ原体感、内腹副窓帯暗い、確定口徑17.4		
35	*	ヨコナデ/ヨコナデ	にぬ・灰	灰	灰褐色、白	外腹スズ		
36	*	ヨコナデ/ヨコナデ	灰	灰	灰褐色、白	外腹スズ		
37	*	ヨコナデ/ヨコナデ	灰	灰	灰褐色、白、乳白	口唇一部スズ、確定口徑15.5		
38	*	ミガキ、ヨコナデ/ナメ/ナメ	浅黄	浅黄	灰褐色、白、灰	外腹スズ		
39	S A 4	■	ヨコナデ/ヨコナデ	浅黄	浅黄	灰褐色、白、乳白	外腹全体スズ	
40	*	ヨコナデ/ヨコナデ	にぬ・灰	浅黄	灰褐色、白、乳白	外腹全体スズ		
41	*	ヨコナデ、一部ヨコハケメ原物/ヨコナデ	にぬ・灰	にぬ・灰	灰褐色、白、乳白、黑	外腹全体スズ		
42	*	ヨコナデ/ハケメ?/ヨコナデ/ナメ/ナメ	灰	灰	灰褐色、白、乳白、黑	外腹全体スズ		
43	*	ナメ、ミガキ/ナメ/ナメ/ナメ/ハケメ	浅黄	浅黄	灰褐色、白	底径6.5		
第22號44	S A 5	■	ヨコナデ/ナメ/ナメ/ナメ/ナメ/ナメ	灰	灰	灰褐色、白、乳白、黑	外腹全体スズ、剖面にナメ原体感、確定口徑14.4	
45	*	ヨコナデ、ハケメ/ハケメ	灰	灰	灰褐色、白、乳白、黑	外腹スズ		
46	*	ハケメ、ヨコナデ/ヨコナデ	浅黄	浅黄	灰褐色、白、乳白、黑	外腹スズ		
47	*	ハケメ、ヨコナデ/ナメ/ナメ、ヨコナデ	浅黄	浅黄	灰褐色、白、乳白、黑	外腹スズ		
48	*	ヨコナデ/ヨコナデ/ナメ/ハナナズヒミタギ/ヨコナデ/ナメ	浅黄	浅黄	灰褐色、白、乳白、黑	内腹全体炭化物多、底径7.1		
49	S A 6+8	■	ヨコナデ/ハケメ/ナメ/ナメ/ナメ/ナメ/ナメ	灰	灰	灰褐色、白、乳白、黑	内腹炭化带調査、外腹スズ、内腹炭化物、底径11.2	
50	S A 6+14	■	ヨコナデ/ハケメ/ナメ/ナメ/ナメ/ナメ/ナメ	灰	灰	灰褐色、白、乳白、黑	内腹全体炭化物、外腹スズ、内腹炭化物、底径11.2	
51	*	ヨコナデ、一部ヨコハケメ原物/ヨコナデ/ナメ/ナメ	灰白	灰白	灰褐色、白	外腹スズ、底径14.5、底高17.5、底径4.9		
52	*	ヨコナデ/ヨコナデ	にぬ・灰	灰	灰褐色、白、乳白、黑	外腹スズ		
53	S A 7	■	ヨコナデ、ハケメ/ヨコナデ、ナメ/ナメ	灰	灰	灰褐色、白、乳白、黑	外腹全体スズ、内腹全体炭化物、確定口徑17.5	
54	*	ハケメ、ナメ/ナメ/ナメ/ナメ/ナメ/ナメ	浅黄	浅黄	灰褐色、白、乳白、黑	底径6.8		

表7 椎屋形第1遺跡A地区 弥生土器観察表(2)

国 番 号	出土機器	種類	目 次 順 序		色	質	出土中の形態・植物等の色	備 考
			外 壁	内 壁				
第20025	SAT	瓶	ヨコナダ、ハケナ/ <u>ヨコナダ、ハケナ</u>	にかい/黄緑	黒褐・灰白・透明白	外壁スス、剥落にハケメ原体底		
56 *	*	ヨコナダ、ハケナ/ <u>ヨコナダ、ハケナ</u>	にかい/黄緑	基・灰・透明白	外壁全體スス、内面黒化顯著、剥落にハケメ原体底			
57 *	*	ハケナ、ミガキ/ <u>ハケナ、ミガキ</u> 、ナダ?	壁	壁	基・灰・乳白・黑・透明白	内面第一層黒化、底部D.1		
第20026	S A +10	瓶	ヨコナダ、ハケナ/ <u>ヨコナダ、ハケナ</u>	壁	赤褐色・灰・灰白・黑	外壁スス、剥落にハケメ原体底、外壁全體化顯著		
58 S A 8	*	ヨコナダ/ <u>ヨコナダ</u>	白	透明白				
59 *	壁	ヨコナダ/ <u>ヨコナダ</u>	壁	赤褐色・灰白	底部D.10.1			
60 *	壁	ヨコナダ/ <u>ヨコナダ</u>	壁	赤褐色・灰白	底部D.10.1			
61 *	ミガキ?、ハケナ?、丁寧なナダ?/ミガキ?	壁	黑	黑・灰・黑・白	内面黒化顯著、外側原体底、確定底D.8			
62 *	瓶	ヨコナダ、ハケナ/ <u>ヨコナダ、ハケナ</u> / <u>ヨコナダ</u>	壁	赤褐色・黑・乳白・透明	外壁スス?、底部D.10.5			
63 *	ヨケナ?、ミガキ/ <u>ヨコナダ</u> ?	底質・暗灰・灰白	底質	乳白・灰白	底部D.10.5、内面D.10.5			
64 S A 9	瓶	ヨコナダ/ <u>ヨコナダ、ハケナ</u>	底質	黄褐色・灰褐色	外壁スス、底部D.10.5			
65 *	ヨコナダ、ハケナ/ <u>ヨコナダ、ナナメナダ</u>	底質	赤褐色・乳白・透明	外壁スス、底部D.10.5				
66 *	ヨコナダ?、ハケナ/ <u>ヨコナダ?</u>	底質	黑・白・透明白	外壁全體スス、内面全體化顯著				
67 *	ヨコナダ/ <u>ヨコナダ</u> ?/ <u>ヨコナダ</u> ?/ <u>ヨコナダ</u>	底質	赤褐色	赤	外壁スス、剥落にハケメ原体底、外壁内面にスス			
68 *	不明	ヨコナダ?/ <u>ヨコナダ</u> ?/ <u>ヨコナダ</u> ?/ <u>ヨコナダ</u> ?/ <u>ヨコナダ</u> ?	黒褐	明黄色	底部に薄いシロニカミテ原体底の細かな剥離が見られる			
69 *	壁	ヨコナダ/ <u>ヨコナダ</u> 、ヨコハケナ?	底質	赤褐色・灰・乳白	外壁内面にシロニカミテ原体底の細かな剥離が見られる			
70 *	ヨコナダ、ナナメナダ/ <u>ヨコナダ</u> ?/ <u>ヨコナダ</u>	底質	灰褐色	灰褐色・黑・白・透明	内面全體化顯著、底部D.10.5			
71 *	ヨコナダ、 <u>ヨコナダ</u> ?/ <u>ヨコナダ</u> ?/ <u>ヨコナダ</u>	底質	黑褐色・灰白	基・黑褐色・白	内面全體化顯著、外壁D.10.5黒化、底部D.10.5、基部D.10.5、底部D.10.5			
72 *	ヨコナダ/ <u>ヨコナダ</u> ?/ <u>ヨコナダ</u> ?/ <u>ヨコナダ</u>	底質	赤褐色	赤褐色	外壁内面にシロニカミテ原体底、底部D.10.5			
73 S A 10	瓶	ヨコナダ、ナダ?/ <u>ヨコナダ</u> 、糊跡灰	壁	にかい/灰	赤・赤褐色・乳白・透明	外面全體化顯著、口部D.1.6		
74 *	ハケナ?、ハケナ、ヨコナダ/ <u>ヨコナダ</u> 、糊跡灰	明褐色・灰白	にかい/壁	赤褐色・灰・黑・白	内面全體化、側面の表面黒化顯著、底部D.7			
75 *	壁	ヨコナダ?/ <u>ヨコナダ</u> 、ヨコハケナ?	壁	白・透明白	内面内面黒化			
76 *	ヨコナダ/ <u>ヨコナダ</u>	壁	白	透明白	内面内面黒化			
77 S A 11	瓶	ヨコナダ、ハケナ/ <u>ヨコナダ</u> 、ナナメナダ?	底質	赤褐色	外壁全體スス、底部D.10.5			
78 *	ヨコナダ、ヨコナダ?、ハケナ/ <u>ヨコナダ</u> ナダ?	底質	赤褐色	赤褐色・黑・白・透明白	内面全體化、外壁スス、外壁一部黒化顯著、口部D.2.7			
第20029	S A 11+10	瓶	ヨコナダ/ <u>ヨコナダ</u> 、ナダ?	底質	赤褐色・黄褐色	外壁全體化顯著、剥落にハケメ原体底、確定D.1.7		
79 S A 11	ハケナ?、ヨコナダ/ <u>ヨコナダ</u> 、ヨコナダ	底質	赤褐色・黄褐色	にかい/赤褐色	外壁スス、外壁一部黒化顯著、内面全體化顯著、底部D.1			
80 *	ハケナ?、ヨコナダ/ <u>ヨコナダ</u>	底質	黑褐	黑・白・透明白	底部D.5			
81 *	ヨコナダ、ミガキ/ <u>ヨコナダ</u>	底質	黑褐	黑・白・透明白	内面全體化顯著			
82 *	ヨコナダ、ミガキ?、ナダ?/ <u>ヨコナダ</u>	底質	にかい/黑褐	黑・白・透明白	内面全體化顯著			
83 *	ヨコナダ?、ナダ?、糊跡灰?の内面にヨコナダ?、糊跡灰?	底質	赤褐色・黑	にかい/黄褐色	黑・白・透明白			
84 *	ミガキ?、糊跡灰?ヨコナダ?/?ヨコナダ?	底質	赤褐色	赤褐色	外壁全體スス、内面全體化顯著			
85 *	糊	ヨコナダ?、ナダ?、糊跡灰?、糊跡灰?	底質	赤褐色・黑褐	底部D.10.5、基部高さD.3、確定底部D.4			
86 S A 12	?	ヨコナダ?/ <u>ヨコナダ</u>	底質	にかい/赤褐色	黑褐色・灰白・乳白・透明	外壁スス的形態		
87 S A 13	?	ヨコナダ?/ <u>ヨコナダ</u>	底質	明褐色	黑・黑褐色	内面内面黒化顯著、確定D.14.4		
88 *	ヨコナダ、ミガキ?/ <u>ヨコナダ?</u> 、糊跡灰?	底質	明褐色	黑・白	外壁全體化顯著			
89 S A 15 - 16	?	ヨコナダ、ハケナ/ <u>ヨコナダ</u> 、ナダ、ハケナ	底質	赤褐色	赤褐色	外壁スス、糊跡にハケメ原体底		
90 *	ヨコナダ、一部ハケナ/ <u>ヨコナダ</u>	底質	壁	灰・黑・乳白・透明白	糊跡部内面スス、該日にハケメ原体底			
91 *	ヨコナダ、ハケナ?、糊跡灰?/ <u>ヨコナダ</u>	底質	にかい/黄褐色	黑・黑・白	外壁スス			
92 *	壁	ハケナ?、ヨコナダ/ <u>ヨコナダ</u>	底質	糊跡	黑・白・透明白	確定D.12.8		
93 *	ヨコナダ/ <u>ヨコナダ</u>	底質	糊跡	黑	外壁的形態			
94 *	体	ヨコナダ、糊跡灰?/ <u>ヨコナダ</u> 、ハケナ	底質	糊跡	赤褐色・黑・透明白	糊跡部内面スス、糊跡D.10.5		
95 S A 16	?	ヨコナダ、ハケナ/ <u>ヨコナダ</u> 、ナダ、ハケナ	底質	糊跡	赤褐色・黑・白・乳白・透明	糊跡部内面スス、糊跡高さD.3、確定底部D.4		
96 S A 17	?	ヨコナダ/ <u>ヨコナダ</u> ?、ヨコナダ?/ <u>ヨコナダ</u> 、糊跡灰?	底質	にかい/黒褐	黑褐色・赤褐色・黑・白・乳白・透明	外壁スス、糊跡部内面スス、糊跡D.10.5		
97 S A 17	東	ヨコナダ/ <u>ヨコナダ</u> ?、ヨコナダ?/ <u>ヨコナダ</u> 、糊跡灰?	底質	にかい/黒褐	黑褐色・灰白・黑・透明白	外壁スス基部黒化顯著		
98 *	?	ヨコナダ/ <u>ヨコナダ</u> ?/ <u>ヨコナダ</u>	底質	灰白	黑褐色・赤褐色	外壁スス		
99 *	ナダ?、ハケナ?、ヨコナダ、ナダ/ <u>ナダ</u>	底質	黑・白	黑・黑・透明白	外壁第一層黒化、底部D.5			
100 *	ハケナ?、糊跡灰、ヨコナダ/ <u>ヨコナダ</u> 、ナナメナダ?	底質	にかい/赤褐色	黑・白・黑・透明白	外壁スス、内面全體化黒化、外壁全體化黒化、確定底部D.4			
101 *	壁	ヨコナダ?、ナダ?/ <u>ヨコナダ</u> ?、糊跡灰?	底質	にかい/黒褐	黑・白・灰・黑・透明白	内面黒化顯著、糊跡部内面スス、確定D.1.6		
102 *	?	ヨコナダ?、ミガキ?/ <u>ヨコナダ</u> ?、ヨコナダ?、糊跡灰?	底質	にかい/各種	黑褐色・灰白・黑・乳白・透明白			
103 *	ミガキ?、ナダ?、糊跡灰?、ナダ?/ <u>ミガキ</u>	名・糊跡・糊跡	黑・黑	黑・茶・灰・黑・乳白・透明白	外壁スス、糊跡部内面スス、糊跡D.10.5			
第20030	S A 19	瓶	ナダ?、ハケナ?、糊跡灰?、ナダ?/ <u>ミガキ</u>	名・糊跡・糊跡	黑・黑	外壁スス、糊跡部内面スス、糊跡D.10.5		
104 *	ヨコナダ、ハケナ/ <u>ハケナ</u> 、ヨコナダ	にかい/黄褐色	灰褐色	基・灰	内面灰化黒化			
105 *	ハケナ?、ヨコナダ、ナダ/ <u>ナダ</u> ナダ?	底質	黑	黑	内面灰化黒化、確定底部D.3			
107 *	ヨコナダ/ <u>ハケナ</u> ?/ <u>ヨコナダ</u> ?、糊跡灰?え?、ナダ?	底質	黑	黑	内面全體化黒化顯著、外壁全體スス			
108 *	壁	ヨコナダ?/?ミガキ?、ナダ?/ <u>ナダ</u> ナダ?	底質	黑	内面全體化黒化顯著、外壁全體スス			
109 *	?	ヨコナダ?/?ミガキ?、ナダ?/ <u>ナダ</u> ナダ?	底質	黑	内面全體化黒化顯著、口部D.17.5			
110 S L 1	瓶	ナダ?、ハケナ?、糊跡灰?、糊跡灰?、ナダ?/ <u>ヨコナダ</u>	底質	赤褐色・黑・灰白・黑	外壁スス、糊跡部内面灰化顯著、底部D.24.5			
111 S C 3	?	ヨコナダ、ハケナ/ <u>ヨコナダ</u> 、糊跡灰?、糊跡灰?、ナダ?/ <u>ヨコナダ</u>	名にかわる者	黑・灰・茶・乳白・金	口部D.16.5、内面D.27.3			



第34図 椎屋形第1遺跡 A地区 住居跡出土石器実測図



第35図 椎屋形第1遺跡A地区 住居跡出土石器・鉄器実測図

b 屈曲せずわずかに外反するだけのもの (73)

VI類 口縁部がくの字状に大きく屈曲し、胴部径が口縁部径とほぼ同じくらいに張る (87、110)。

VII類 口縁部が直立し、直下に刻目突帯を持つ (11、29)。

大甕

I類 中窪みの台形状突帯を貼り付け、口縁直下にも台形状突帯を貼り付けたもの (111)。口縁部はやや起きる。

同類の突帯と思われるもの (12)。

壺底部

I類 横に張り出さずほぼ直立する。

a ほぼ平底に近いもの (74)

b 上げ底になるもの (14、33)

II類 横に張り出すもの。

a ほぼ平底になるもの (54、80、81、100)。54は若干厚手の底部である。

b 上げ底になるもの (15、47、99、106)

壺形土器

表8 椎屋形第1遺跡A地区 弥生時代石器計測表

番号	種別	出土箇所 取上番号	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	石材	備考
1	石 砧	S A 1 - 83	29.9	13.5	6.1	4150	砂 岩	
2	磨 石	△ - 147	7.2	5.5	2.9	167.2	△	
3	砥 石	△ - 105	9.1	6.6	2.4	227.0	緑色岩類	
4	玉	△ - 136	3.5	3.1	0.8	8.0	不 明	
5	△	△ - 13	3.7	3.0	0.8	4.4	△	残欠か?
6	磨製石鏡	△ - 119	2.8	1.8	0.2	1.2	緑色岩類	
7	△	△ - 1	2.2	2.0	0.3	1.2	△	
8	△	△ - 146	2.1	2.0	0.2	1.0	△	欠損
9	△	△ - 一括	1.9	1.2	0.2	0.6	△	未製品
10	石 斧 丁	S A 2 - 3	8.1	4.9	0.3	21.0	△	未製品
11	磨製石鏡	△ - 11	2.1	1.2	0.2	0.7	△	欠損
12	石 砧	S A 3 - 113	19.2	19.4	4.8	2610.0	砂 岩	
13	凹 石	△ - 65	23.0	7.5	4.8	728.5	△	
14	△	△ - 40	9.5	7.4	4.1	410.4	△	
15	砥 石	△ - 18	10.8	7.7	3.3	349.8	△	
16	△	△ - 139	7.9	5.4	1.2	83.7	緑色岩類	
17	△	△ - 74	6.5	3.7	1.5	59.1	△	
18	△	△ - 89	8.6	5.9	1.6	78.3	△	
19	△	△ - NW	5.9	6.2	1.4	52.7	砂 岩	
20	△	△ - NW	4.0	5.5	1.0	21.9	不 明	
21	不明石器	△ - 177	21.9	5.7	4.3	580.3	砂 岩	工具か? 斧打と研磨で成形
22	△	△ - 184	11.9	4.8	3.8	318.5	△	
23	磨製石鏡	△ - 155	2.1	1.8	0.3	0.9	緑色岩類	
24	△	△ - 一括	2.8	2.1	0.2	1.3	△	
25	△	△ - 82	2.1	2.1	0.2	1.2	△	欠損
26	△	△ - 1	2.5	1.8	0.2	1.0	△	△
27	△	△ - 31	2.7	1.3	0.3	1.1	△	△
28	△	△ - 93	1.9	1.5	0.2	0.8	△	未製品 研磨痕あり
29	△	△ - 189	2.1	1.8	0.3	1.7	△	△
30	△	△ - 120	3.2	2.0	0.4	2.4	△	△
31	△	△ - 120	2.8	1.5	0.4	1.0	△	△
32	△	△ - 108	2.3	1.7	0.3	0.9	△	△
33	剥 片	△ - 96	2.9	2.6	0.4	2.0	△	石鏡の石材か?
34	不明石器	△ - 43	2.6	0.9	0.4	1.0	△	研磨痕のある石器
35	鉄 鋼 片	△ - NE	3.7	1.0	1.1	3.5	-	茎部か?
36	凹 石	S A 4 - 16	14.7	11.0	2.6	621.0	砂 岩	
37	砥 石	△ - 4	5.9	1.6	1.1	13.8	緑色岩類	
38	不明鉄片	△ - 47	3.6	2.5	1.1	9.1	-	鈍化著しい
39	磨製石鏡	S A 5 - 50	1.6	1.7	0.2	0.6	緑色岩類	欠損
40	石 砧	S A 7 - 19	37.4	20.8	7.4	7100	砂 岩	△
41	周部磨製石鏡	S A 8 - 6	1.9	1.9	0.3	1.0	流紋岩	△
42	砥 石	S A 9 - 5	8.0	8.3	6.5	693.0	砂 岩	
43	△	△ - 35	17.5	8.3	5.8	1176.0	△	
44	石 砧	S A 10 - 4	36.1	31.4	10.8	12000	△	
45	△	△ - 11	27.6	15.1	14.1	9000	△	
46	△	△ - 6	22.7	16.7	6.9	2200.0	△	
47	台 石	△ - 57	34.0	39.5	14.0	19600	△	
48	凹 石	△ - 55	13.4	18.6	5.6	2078.0	△	
49	砥 石	△ - 23	15.6	6.9	4.3	701.8	△	
50	磨製石鏡	△ - 一括	2.1	2.5	0.2	1.3	緑色岩類	欠損
51	不明石器	△ - 58	4.1	2.8	0.5	5.5	△	研磨痕あり (磨製石鏡もしくは石底丁片)
52	凹 石	S A 11 - 1	10.0	10.4	6.9	980.7	砂 岩	
53	砥 石	S A 13 - 一括	7.2	5.5	3.3	183.7	△	
54	磨製石鏡	△ - 一括	1.8	2.2	0.1	1.1	緑色岩類	欠損
55	剥 片	△ - 一括	2.9	2.1	0.2	1.4	△	石鏡の石材か?
56	台 石	S A 15底中央	27.2	40.0	9.5	14000	砂 岩	若干の磨面あり、黒色付着物あり
57	鉄 鋼 片	S A 15-16-一括	3.0	1.4	0.6	2.2	-	錆か?

I類 鋤先状を呈すると思われるもの (16、35、36)。

II類 口縁部が大きく外反し垂れ下がるもの (37)。南九州系、鹿児島などに多く見られる。

これら I～II類の胴部～頸部と思われるもの (18、38、82、83、88)。

III類 長い口縁部が朝顔状に大きく開くもの。次の 2 類に細分する。

a 口縁部が水平で、頸部に一条の三角突帯を持つ (101)

b 口縁端部がわずかに立ち、口唇が軽く窪むもの (41、60、72、95)

IV類 屈曲し外傾する短い口縁部を持ち、胴部中央に一条の刻目突帯が見られるもの (34)。

器壁が薄く成形され、突帯やプロポーション等から中九州系の土器と思われる。

V類 強く外反する短い口縁部を持つ。2 類に細分する。

a 頸部に一条の三角突帯を持つ (108)

b 突帯を持たない (48)

VI類 屈曲し外傾する短い口縁部を持つ。口縁端部は上方へわずかに立ちあがり、口唇に窪みが見られる。2 類に細分する。

a 肩部に一条の突帯を有する (69)

b 突帯を持たない (71)

VII類 直線的に外傾する口縁部を持つ (92)。

VIII類 長頸壺の口縁で、口縁直下に一条の三角突帯がめぐるもの (42)。

IX類 三角形に肥厚した口唇部に三条の凹線文が施される (93)。

X類 小さなM字状突帯を有する北九州系の壺で、丹塗りの75、76、96と褐色を呈しミガキの見られる84がある。

鉢形土器

殆ど出土していない。大きくは 1 類のみ。

I類 小型の椀状のもの (22、85、94)。

高坏

高坏も殆ど出土していないが、2 類に分類できる。

I類 三角透かしと凹線文の脚部を持つ (63)。68は一条の沈線をまたいで縦方向の刺突が施される土器であるが、刺突の中にハケ目原体を刺突した様な横筋があり、宮崎市元村遺跡出土の瀬戸内系高坏の坏部に見られる刺突に近いものと思われ、あるいはこの類の坏部の可能性がある。

II類 ミガキの丁寧な器面調整を施された断面三角形の脚裾部を持つ (62)。

以上、4 器種について、最も多く出土した變形土器を 7 類に、主に土坑出土の大壺 1 類、壺底部 2 類、量的には少ないがバラエティーに富む壺形土器を 9 類に、量の少ない鉢形土器 1 類、殆ど出土しなかった高坏を 2 類に分類した。

3 B 地区の調査

1 繩文時代の遺構と遺物

第36図 椎屋形第1遺跡B地区 繩文時代早期遺構分布図

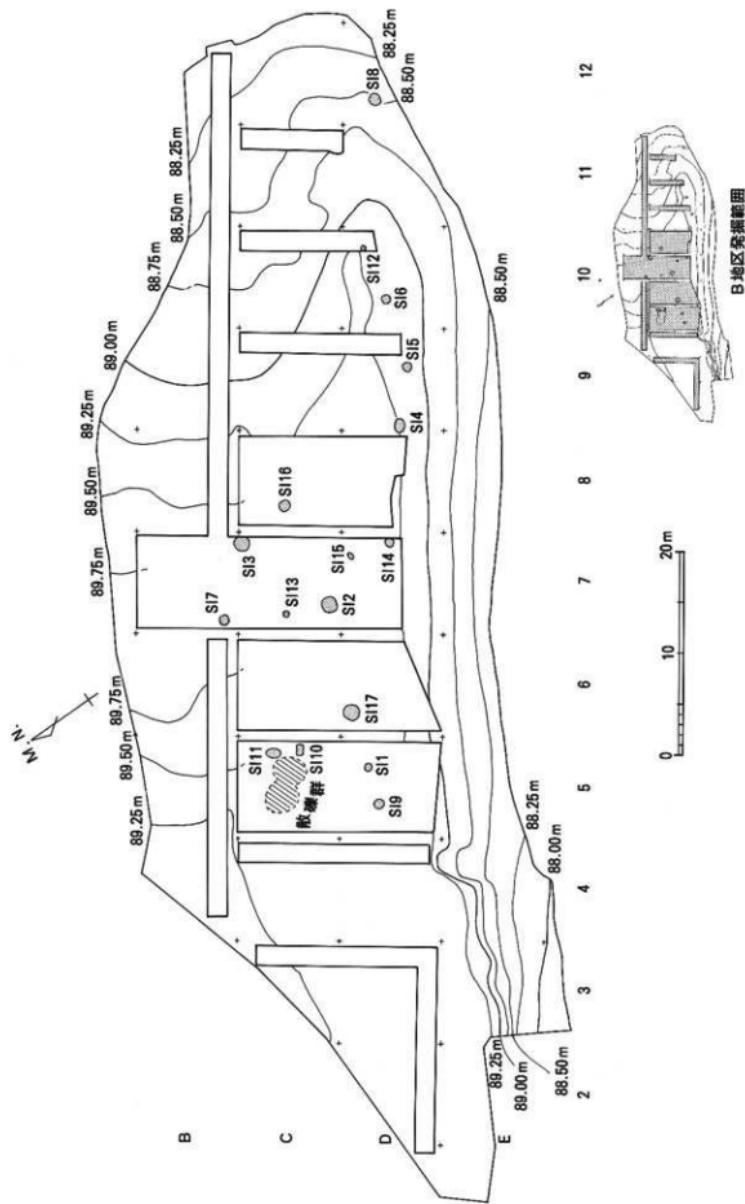


表9 堆積形第1邊縁日地区 集石遺構一覧表

遺構番号	集石遺構の範囲 (cm)	土 状 の 有無と状況	堆 石 の 状 況	記石の有無と状況	炭化物の有無と状況	黒變岩の有無	表 土 の 有無	備 考	
SI1	85×80	な し	ほぼ水平に集積	殆ど砂岩、数点砾灰岩、赤変し割れたものが多い。河原石の形状のままのものもある。10cm大が多い。	な し	堆下で検出	少 量	な し	トレンチャーで寸断
SI2	145×160	堆積形の裏張 深さ15cm	浅い裏張に集積	砂岩が多く砾灰岩その他の10点程度入、赤変し割れているも砾灰岩のままのものも多い。10~15cm大が多い。	な し	土坑壁土中	不 明	な し	トレンチャーで寸断
SI3	150×140	浅い裏張 深さ10cm前後	浅い裏張に集積	殆ど砂岩、数点砾灰岩、赤変しいずれも壊れた状態、10cm以下が多い	な し	土坑壁土中 (年代剖面)	な し	な し	トレンチャーで寸断、 Gak160±120y.B.P.
SI4	130×90	な し	水平に集積	殆ど砂岩、数点砾灰岩、殆ど赤変し小さく割れている、変色のない原形のもののが数点、5~15cm大	な し	堆下に少 量	少 量	な し	尾根上に位置する
SI5	おおよそ 90×90	な し	水平に集積	砂岩の壊れた塊が20個程度	な し	堆下に少 量	な し	な し	画面記録なし
SI6	90×85	な し	水平に集積	河原石の原形を残すものが多い、100個程度、5~15cm大	な し	な し	少 量	な し	尾根上に位置、入戸火碎流(シラス)直上
SI7	160×95+a	浅い裏張 深さ10cm前後	浅い裏張に集積	殆ど砂岩、数点砾灰岩、壊れたものが多い、原形を残すものもある。5~15cm大	な し	土坑壁土中 (年代剖面)	少 量	な し	トレンチャーで寸断、 Gak160±120y.B.P.
SI8	125×105	な し	水平に集積	砂岩、赤変し割れたものが多い、原形を保つもの少ない、15cm以上のものは3~8枚。殆ど3cm以下	な し	な し	あり	な し	尾根上に位置する
SI9	100×80	浅い裏張、 不規則 深さ60cm程	若干レンズ状に 集積	赤変しヒビ割れた原形の河原石や壊れた塊	な し	土坑壁土中で検出	不 明	な し	トレンチャーで寸断、 画面記録なし
SI10	100×70+a	堆積 深さ15cm程	レンズ状に集積	殆ど砂岩、1点砾灰岩、赤変し割れている。原形を保つものは数点、10~20cm大の大きめの塊が多い	な し	土坑壁土中で検出	不 明	な し	トレンチャーで寸断確認
SI11	表面に 砂岩が少々 平野洋原斜傾、深 さは計測不能、不 規則、径145×85cm	土坑内にぎっ りと集積	赤変した大さ以上の塊が100個以上	中央に人頭大的河原石、 周囲に2倍分合の塊 を花弁状に配置	土坑壁土中で検出	不 明	不 明	検出時分土坑の輪郭のみ、 画面記録なし	
SI12	小さい 30×30	な し	少量が1カ所に 集積	殆ど砂岩、その殆ど点、赤変し割れたものや原形を保つものが10個程度、3~8cm大	な し	堆下に少 量	あり	な し	尾根上に位置、シラス直上
SI13	55×40 程度	な し	水平に集積	赤変し割れた塊が40個程度	な し	な し	な し	な し	トレンチャーで寸断、 画面記録なし
SI14	65×75	な し	水平に集積	殆ど砂岩、壊れたものが多い、5~10cm大	中央に20cm大の 大きめの河原石 が3~4個	少 量あり	少 量の黑 色付着物	な し	尾根上に位置する、集石 坑内の塊が残存か
SI15	80×不明	な し	水平に集積	砂岩、赤変し割れている、35個程度、15cm大の大きめの塊が4個	な し	な し	あり	な し	トレンチャーで寸断、 画面記録なし
SI16	100×90	浅い裏張、不 規則、径60cm	水平に集積	赤変しヒビ割れてもろいものと原形を保つものが半々 程度40個程度	な し	土坑中に 多い	あり	な し	トレンチャーで寸断、 土坑内に塊は殆どない、 画面記録なし
SI17	110×130	な し	水平に集積	焼けた小礫が多い	な し	不 明	不 明	不 明	画面記録なし

B地区は、基本層序のII層黒色土が既に耕土化されており、表土の直下にアカホヤ層が見られた。そこで、表土剥離の際にバックホーによりアカホヤ火山灰層上面に達する多数のトレンチを開けて遺構の有無の確認を行った。その結果、何らの遺構・遺物も検出されず、また、表面採集でもアカホヤ火山灰層以降の遺物は採集されていなかったため、アカホヤ火山灰層までを一举に除去した。

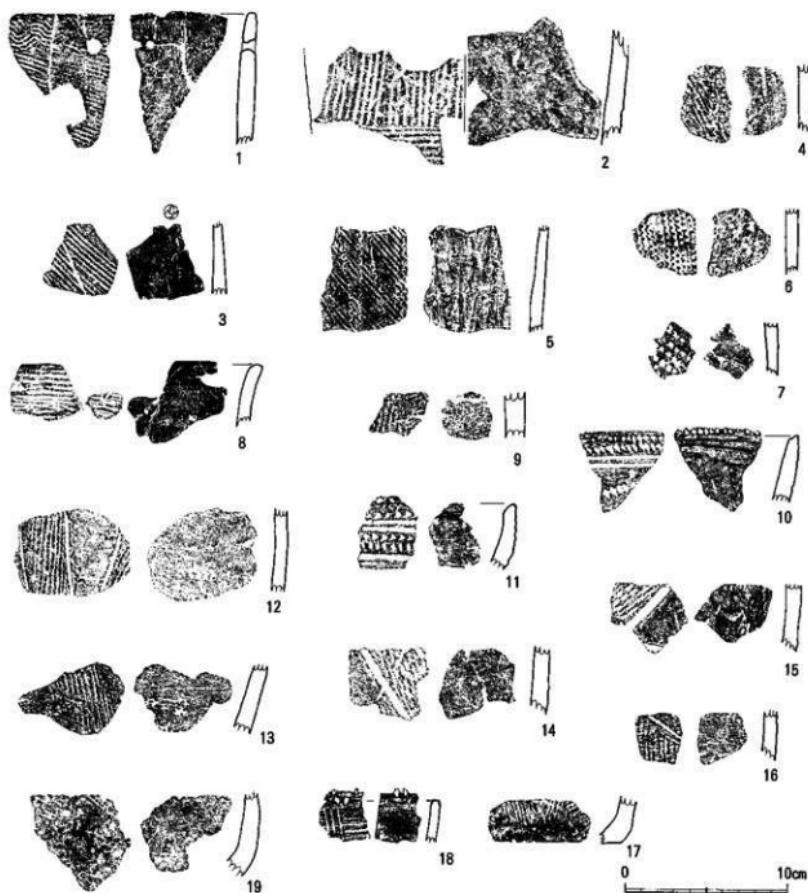
調査は、時間的な制約上、露出したIV層に一定間隔でトレンチを入れて遺構等を確認し、検出された箇所を中心にさらに掘り広げるという方法で実施した。出土した遺物は、時期的には早期に限られる。

(1) 早期

早期の遺構・遺物は、IV層下部から下にかけて確認された。このIV層の下層はA地区とは異なり数層自然層の堆積が見られず、褐色土の次に入戸火碎流(シラス)層が堆積している。遺構は、このシラス直上にも見られる。トレンチャーによる破壊は深くにまで及び、遺構は寸断された状況で検出された。

調査の結果、集石遺構（S I）が17基、焼石の散疊群が1カ所確認された（第36図）。集石遺構は限られた時間の中で可能な限り図化に努めたが、本報告では紙面の都合で掲載できなかった。また、現地での記録方法に混乱もあったためすべてを写真に記録できなかったが、集石遺構一覧表（表9）と図版とを参照していただければ幸いである。

なお、これら集石遺構のうちS I 3とS I 7から小炭化物を採集して参考のため炭素年代測定に出している。後述の自然科学分析調査の結果を参照されたい。遺構内からの遺物の出土はまれであるが、同集石遺構からはともに塞ノ神式土器が出土している（第37図10・12）。



第37図 椎屋形第1遺跡B地区 早期土器実測図

表10 椎屋形第1遺跡B地区 繩文時代早期土器観察表

図番号	遺 番	物 名	土 器 注 意 記 号	器 種	部 位	文様及び測量		成 分	色 調		地土の特徴	分 類	備 考
						外 面	内 面		外 面	内 面			
第37図	1			深鉢	口縁部 ～側部	口縁部は波状具縫条文、下位は斜め 具縫条文	ヨコナヂ	良好	淡黄 (10YR6/6)	にぶい黄 (5YR5/6)			I類 前平式
+	2	188		深鉢	側部	上位は横方向、下位は側方向の具縫条文	ナヂ	良好	暗 (5YR5/6)	明赤褐 (5YR5/6)	1～2mmの白色 砂粒を多く含む	I類	前平式
+	3	172		深鉢	側部	斜め方向の具縫条文	でいねいなナヂ	良好	淡黄褐 (10YR6/6)	淡黄褐 (10YR6/6)			II類 角筒？ 加束山式
+	4	176		深鉢	側部	斜めに具縫条文、その上から縦に具 縫條縫斜交文	ナヂス(炭化物?) 付着	良好	褐 (7.5YR7/6)	黒褐 (7.5YR8/1)			II類 角筒？ 加束山式
+	5	87		深鉢	側部	斜めに具縫条文、その上から縦に具 縫條縫斜交文	親にケズリ	良好	明黄褐 (10Y R7/6)、褐 (7.5YR7/6)	褐 (5YR7/6、6/6)			II類 角筒 加束山式
+	6	7		深鉢	側部	具縫條縫斜交文	ナヂ(風化)	良好	にぶい黄褐 (10YR6/6)	にぶい黄褐 (10YR7/6)	1mm程度の砂粒 を多く含む	II類	吉田式
+	7	184		深鉢	側部	斜めに具縫條縫斜交文、具縫文箇では でいねいなナヂ	ナヂ	良好	にぶい黄 (2.5YR6/3)	黒褐 (2.5YR6/3)			II類 下斜峰式
+	8	9		深鉢	口縁部	横方向に具縫条文	でいねいなナヂ	良好	淡黄 (2.5YR6/3)	淡黄 (2.5YR 6/3)			V類 条文土器
+	9	190		深鉢	側部	対突円点文(母子層)	ナヂ	良好	にぶい赤褐 (5YR5/4)	灰褐 (7.5YR 6/2)	2mm以下の淡黃 色粒が目立つ (やや多く含む)		対突円点文土器 (押切土器と同 様の基体断面か)
+	10	SI7		深鉢	口縁部	口縁部削み目、以下沈縫文と列点文の 組合せ	ナヂ	良好	にぶい褐 (7.5YR7/4)	にぶい褐 (7.5YR7/4)			III類 塞ノ神式
+	11	21		深鉢	口縁部	口縁部削み目、以下沈縫文と列点文の 組合せ	ナヂ	良好	褐 (7.5YR7/6)	にぶい褐 (5YR6/4)	1～2mmの白色 砂粒を多く含む	III類	塞ノ神式
+	12	SI3		深鉢	側部	裏縫内に捺糸文	粗いナヂ	良好	にぶい褐 (7.5YR7/4)	にぶい褐 (7.5YR7/4)			III類 塞ノ神式
+	13	134		深鉢	側部	捺糸文	粗いナヂ	良好	にぶい褐 (5YR6/4)	にぶい褐 (5YR6/4)、黒褐 (5YR8/1)			III類 塞ノ神式
+	14	81		深鉢	側部	裏縫内に捺糸文	でいねいなナヂ	良好	褐 (7.5YR7/6)	にぶい黄褐 (10YR7/4)	1～2mmの白色 砂粒を多く含む	III類	塞ノ神式
+	15	104		深鉢	側部	裏縫内に捺糸文	ナヂ	良好	明黄褐 (10YR6/6)	褐 (5YR6/6)	1mm程度の白色 砂粒を多く含む	III類	塞ノ神式
+	16	6		深鉢	側部	裏縫内に捺糸文	粗いナヂ	良好	明黄褐 (10YR7/6)	にぶい黄褐 (10YR7/4)			III類 塞ノ神式
+	17	64		深鉢	底部	捺糸文	粗いナヂ	良好	にぶい褐 (5YR6/4)	にぶい褐 (5YR7/4)			III類 塞ノ神式
+	18	179		鉢	口縁部	口縁部削み目、横・横方向の条痕 文	口縁部削み目、下位はナヂ	良好	褐 (7.5YR7/6)	にぶい黄褐 (10YR7/4)			III類 塞ノ神式
+	19	54		深鉢	底部付近	無文	ナヂ	良好	褐 (7.5YR7/6)	褐 (5YR7/6)			III類

遺物は、調査区全体のトレンチに見られた。その殆どはチップや小土器片である。分布状況は、特に集中した箇所ではなく、また、特に造構周辺に多く見られることもなく、全体に散布しているという状況であった。遺物は量的にはそろ多くない。

土器はその主なものを図化し第37図に掲載した。前平式土器や塞ノ神式土器等が見られる。個々の土器については、表10の早期土器観察表を参照していただきたい。また、石器は打製石器等が出土しているが、時間の都合で割愛した。図版を参照されたい。

4 自然科学分析調査の結果

古環境研究所

I 椎屋形第1遺跡A地区のテフラ検出分析

1 はじめに

宮崎市周辺には、霧島火山や姶良カルデラなどに起源をもつテフラ(tephra)が多く堆積している。テフラとは火山噴出物のうち溶岩流と火山ガスを除いたものの総称で、「火山碎屑(さいせつ)物」の同義語である。テフラという語の方が簡単で世界的にも広く用いられていることから、最近では「テフラ」がよく使われている。なお同じ様な意味をもつ用語に広義の「火山灰」という用語があるが、火山学では径2mm以下の粒子を指すため適当ではない。

さてテフラの中には、放射性年代測定法や標準的な地形面さらに考古遺物との層位学的な資料などから、その噴出年代が明らかになっているものがある。これらのテフラは「示標(しひょう)テフラ」と呼ばれ地質学や地形学、さらに考古学などの編年学的研究に盛んに利用されている。椎屋形第1遺跡の発掘調査においても火山灰土中の数層準にテフラが認められた。このことからテフラを利用した編年学的な研究が可能と考えられた。ここでは、野外地質調査により火山灰土の層序を明らかにするとともに、テフラ検出分析を行って野外地質調査で確認できない示標テフラの検出を試みる。

2 層序

野外地質調査を行った時点での火山灰土の層序を図1に示す。これらの土層の下位に、下位より褐色火山灰土(VII層)、黒褐色火山灰土(VI層)、黒褐色火山灰土(V層)が存在する。V層の上位にある暗褐色火山灰土(IV層、層厚22cm)からは爪形文あるいは隆帶文土器が出土している。さらにこの上位に褐色火山灰土(層厚21cm)、黄色や橙色軽石が混じる暗褐色火山灰土(層厚8cm)、黒褐色火山灰土(層厚15cm)、成層した黄橙色火山灰層(層厚22cm)、暗褐色火山灰土(層厚11cm)、黒色火山灰土(層厚22cm以上)と連続している。

これらの土層のうち黄橙色火山灰層は、下部の降下軽石層(層厚5cm)と上部の細粒でガラス質の降下火山灰層(層厚17cm)に区分される。軽石層に含まれる軽石の最大径は4mm、石質岩片の最大径は3mmである。軽石は繊維束状によく発泡している。このテフラは層相から約6,300年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah、町田・新井、1978)に同定される。

3 テフラ検出分析

(1) 分析試料と方法

黄色や橙色軽石が混じる暗褐色火山灰土より下位の土層について、テフラ粒子の特徴を記載するとともに野外地質調査で確認できないテフラの検出を目的としてテフラ検出分析を行った。分析の対象とした試料は、10点である。なおVII層、VI層、V層については発掘調査担当者より採取、送付された試料を対象とした。

分析の手順は、次の通りである。

1) 試料10gを秤量。

- 2) 超音波洗浄装置により、泥分を除去。
- 3) 80℃で恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下で、テフラ粒子の特徴を観察。

(2) 分析結果

分析結果を表1に示す。黄色軽石や橙色軽石が認められた試料番号4には、最大径1.9mmの軽石が含まれている。軽石の発泡はあまりよくない。またV層およびVI層には最大径4mm程度の橙色や黄色の軽石が認められた。軽石の発泡はあまりよくない。スコリア（色が黒っぽい軽石）は試料番号1、3、4、5、VII層で認められたがいずれの量も少ない。

4 考察

椎屋形第1遺跡A地区においてテフラ検出分析を行った結果、3層準にテフラが認められた。最下位のテフラは、爪形文土器および隆帶文土器の出土層準の下位の火山灰土（V層およびVI層）中に散在する橙色および黄色軽石である。軽石の発泡はあまりよくない。これらの軽石は、岩相から $15,750 \pm 270$ y.B.P.より新しく約1.0万年前より古い時代に霧島火山韓国岳から噴出した霧島-小林軽石（Kr-K, 町田ほか, 1984）に由来する可能性が考えられる。なおKr-Kは約1.0-1.1万年前に桜島火山付近から噴出した桜島-薩摩テフラ（Sz-S, 町田ほか, 1984）の下位にあることが知られている（井村・小林, 1991）。

また、爪形文および隆帶文土器の出土層準の上位にある黄色および橙色軽石は、約9,000年前に霧島火山新燃岳から噴出したと考えられる霧島-瀬田尾軽石（Kr-STP:井ノ上, 1988, 井村・小林, 1991）に由来する可能性が考えられる。なお、Kr-STP直下の腐植層からは、 $9,130 \pm 830$ y.B.P. (GaK-15329) の¹⁴C年代が得られている。さらに最上位のテフラは、前述のように層相から約6,300年前に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）に同定される。

以上のことから、爪形文土器および隆帶文土器の出土層準は、 $15,750 \pm 270$ y.B.P.より新しく約1.0万年前より古いKr-Kの上位、さらに約9,000年前のKr-STPの下位にあると考えられる。今後¹⁴C年代測定法などによるKr-Kの噴出年代を明らかにするとともに、Kr-STPについて野外地質調査を行いその分布を明らかにし、岩石記載的な特徴を把握して示標テフラとしての特徴を記載する必要がある。

5 まとめ

宮崎市椎屋形第1遺跡A地区において野外地質調査とテフラ検出分析を合わせて行った結果、下位より $15,750 \pm 270$ y.B.P.より新しく約1.0万年前より古い霧島-小林軽石に由来すると思われる軽石の濃集層準、約9,000年前の霧島-瀬田尾軽石に由来すると思われる軽石の濃集層準、約6,300年前の鬼界アカホヤ火山灰が検出された。これらのテフラとの層位関係より爪形文土器および隆帶文土器の出土層準は、霧島-小林軽石と霧島-瀬田尾軽石の間の層準にあることが推定された。

一方今回の分析では、南九州地方において縄文時代草創期の重要な示標テフラとされている桜島-薩摩テフラ（Sz-S）は検出されなかった。本地域はSz-Sの分布の北限に近いと考えられるためその検出は難しいと考えられるものの、さらに詳細な野外地質調査と火山ガラスの形態分析など室内分析を行うことにより検出が可能かもしれない。

文 献

- 町田 洋・新井房夫（1978）南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰。第四紀研究、17, p.143-163.
- 町田 洋・新井房夫・小田静夫・達藤邦彦・杉原重夫（1984）テフラと日本考古学－考古学研究と関係するテフラのカタログ。古文化財編集委員会編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」, p.865-928.
- 井村 隆介・古賀政行（1992）霧島火山および入戸火砕流の¹⁴C年代。火山、第2集、37, p.99-102.
- 井村 隆介・小林哲夫（1991）霧島火山新燃岳の最近300年間の噴火活動。火山、第2集、36, p.135-148.
- 井ノ上幸造（1988）霧島火山群高千穂複合火山の噴火活動史。岩石鉱物鉱床学会誌、83, p.26-41.

表1 椎屋形第1遺跡A地区のテフラ検出分析結果

試 料	軽 石			スコリア		
	量	色 調	最大径	量	色 調	最大径
1	+	白	1.1	+	灰	2.0
3	-	-	-	+	灰	1.9
4	++	黄, 橙	1.9	+	灰	1.8
5	+	白	1.2	+	灰	1.4
7	+	白	0.9	-	-	-
9	+	白	1.2	-	-	-
11	+	白	1.1	-	-	-
V層	++	黄, 橙	3.9	-	-	-
VI層	++	黄, 橙	3.8	-	-	-
VI層	+	灰白	1.3	+	暗灰	1.9

++++ : 特に多い、+++: 多い、++ : 中程度、+ : 少ない、- : 認められない、
最大径の単位は、mm。

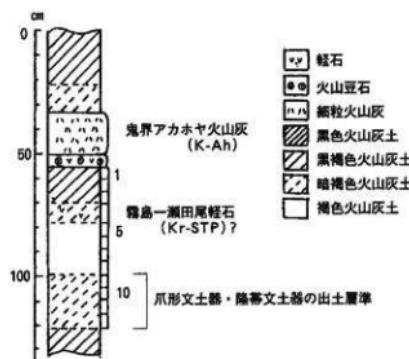


図1 宮崎市椎屋形第1遺跡A地区のテフラ層序

数字は、テフラ検出分析番号

II 椎屋形第1遺跡A地区出土の種実

試料は、椎屋形第1遺跡A地区SA17の焼土付近から出土した種実である。同定の結果と記載を以下に示す。主要なものを写真に示した(図版1)。

試 料	分類群	学名	和 名	部 位	個
SA17の焼土 No.1付近出土	<i>Castanopsis cuspidata</i> (Thunberg)	Schottky	ツブラジイ	炭化 子葉	35

ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* (Thunberg) Schottky 子葉

堅果から果皮、種皮のとれた子葉にあたる部分で著しく炭化したものである。長さ8mmぐらいで丸みをおび、先端が尖る。コナラ属とシイ属の堅果の内部の子葉は、類似するが本試料は著しく小型であることと丸みをおびることから、ツブラジイと同定した。数えられる試料は35個であるが、他に破片が多数ある。

ツブラジイは関東地方以南の本州・四国・屋久島までの九州および濟州島に分布する暖温帯を構成する主要常緑広葉樹の一つで内陸部に多い。ツブラジイは渋抜きなしで食用となる堅果類である。

III 放射性炭素年代測定結果

椎屋形第1遺跡B地区SI3およびSI7の下部の掘込みから出土した試料について年代測定を行った。その結果を次表に示す。なお、年代値は1950年よりの年数(B.P.)である。

年代値の算出には¹⁴Cの半減期としてLIBBYの半減期5570年を使用している。また、付記した誤差は β 線の計数値の標準偏差 σ にもとづいて算出した年数で、標準偏差(ONE SIGMA)に相当する年代である。また、試料の β 線計数率と自然計数率の差が 2σ 以下のときは、 3σ に相当する年代を下限の年代値(B.P.)として表示してある。また、試料の β 線計数率と現在の標準炭素(MODERN STANDARD CARBON)についての計数率との差が 2σ 以下のときは、Modernと表示し、 $\sigma^{14}\text{C}\%$ を付記してある。

椎屋形第1遺跡B地区集石遺構出土試料の放射性炭素年代測定結果

試料No	出土地点	種類	年 代 値	コードNo
No. 1	SI 3	炭化物	7930±120 (5980 B.C.)	GaK-16266
No. 2	SI 7	炭化物	8160±120 (6210 B.C.)	GaK-16267

第3節 まとめ

椎屋形第1遺跡では、縄文時代草創期・早期及び弥生時代の遺構・遺物が確認された。そこで、その成果について若干のまとめを行いたい。

まず、縄文時代については十分な調査を行えなかつたが、特に草創期の遺物は出土例も少ないため簡単に触れておきたい。県内では既に述べたとおり宮崎市堂地西遺跡でIV・V類の隆帯文・爪形文土器が纏まつて出土したことがある。しかし、同遺跡ではV類が少なくIV類隆帯文土器が多いのに比べ椎屋形第1遺跡ではV類の爪形文土器が主体を占めている。現在の編年観から言えば、堂地西遺跡と椎屋形第1遺跡とは主体となる時期に時期差がある。

椎屋形第1遺跡の爪形文土器には、V a類とした器壁に薄く粘土帯を貼り付けて爪形文を施したと考えられるような土器が見られた。IV類は12の様に隆帯をわずかに離して貼り付けたものも見られるが、多くは隆帯が接して貼り付けられている。この中で特に18は個々の隆帯が分かれ辛いほど粘土帯が接している。これがさらに簡略化されるとV a類の様に粘土帯の貼り付けとなると考え今回レイアウトした。ただ、IV類の爪先圧痕文（爪形文）とV類の爪形文（爪先圧痕文）とには文様としての意識の仕方に開きがあると思われ（IV類は指先による摘まみの結果としての爪先圧痕、V類は爪先の刺突による爪先圧痕）、直ちにつながるものとは考えていない。また、V類の爪形文の施文方法としては、一見半截竹管状あるいはヘラ状の工具を使用したと思われるものも見られる。しかし、その断面を観察すると、器壁側が滑らかな曲線を描き先端は鋭く尖る（平面的には先端は弧状を描く）、そしてその外側は若干の乱れを生じさらに外側はわずかに窪むなど指先の爪のあたりの圧痕と考えられるものが見られる。ただ、確かに一部に判断のつかないものもある。一概にヘラ状工具の使用を否定することもできない。本遺跡の草創期土器には外面に厚くススが付着するものが見られた。また、磨石や台石、石斧など定住生活を思わせる遺物や打製石器の多さなど縄文時代を特徴付ける遺物の出土があった一方で細石刃など旧石器的な遺物を伴わない事等が特徴として指摘できる。

次に、弥生時代について簡単に述べたい。出土土器の時期については、現在一般に石川悦雄氏による編年案が用いられている。先に出土土器の各器種毎の形態分類を行ったが、壺形土器I・II類の様に、あるいは壺形土器I類の様に、一部に逆し字状口縁や鉢先口縁という古い様相を示す少量の遺物はあるものの、くの字口縁化した壺や大壺の口縁部の形態等、また、壺・高杯という特定の瀬戸内系土器の共伴等、総体的には石川氏編年のIV a期（中期～後期初頭）あたりに位置付けられるであろう。これと同様の状況が、宮崎市南部の堂地東遺跡や県中央部の新富町新田原遺跡等で見られるが、壺V類が主体を占める新田原遺跡よりはIII類が主体を占める堂地東遺跡の様相により近い。

今回の調査では、圃場整備の範囲内でしかも調査区外に遺構が広がるという状況はあったが、ほぼ台地の端部付近までは調査を行えたと考えられる。そこで遺構の分布状況を見たとき、中央には掘立柱建物跡群と磨製石器等の工房的な大型竪穴住居（SA2は主柱穴の配置の類似からSA3のように大型の竪穴住居になる可能性がある）が、そしてそれらの両側にやや離れて間仕切り区画を有する住居等が、南西～東側の標高の低い方には小型の竪穴住居あるいは厨房的な施設等が、また、西側の離れた位置には土壙や周溝状遺構が配置されるという計画的な土地の利用状況がうかがえよう。

それぞれの遺構においては、大型住居や掘立柱建物跡の主柱の掘方に見られる立て替えや間仕切り壁の削平に見られる住居の拡張あるいはS A 18・19の様に連続的な使用状況が見られる一方、S A 6・14、S A 15・16の様に切り合いもあるなどある程度の住居の変遷も考えられ、これらが土器に見られる新旧の様相とどう関係するのかの課題が残る。また、離れた位置にあった「箱式土器棺墓（適当な名称がないためこう仮称する）」は、県内での弥生時代の埋葬遺構例があまり多くない中で貴重な例となった。この土器棺は内法が80cm足らずの長さであり、棺としては小児用と考えられる。この大甕を復元すると小児の屈葬なら何とか埋葬できる大きさにもかかわらず破片を利用して（この破片も適当に割れたものを使用したというよりある程度計画的に割ったものを用いたと思われる程うまく利用されている）箱式石棺状に組み合わせてあったが、この当時の墓制を知るうえで興味深い遺構であり、今後の類例が待たれるところである。

本報告では編年資料として重要な縄文草創期土器及び弥生土器の資料化に努めた。時間的に考察に及ぶことができなかつた上に石器等はかなり割愛してしまった。筆者の力不足で十分な記録がなし得なかつたことは、諸般の事情があったとは言え遺憾なことである。

なお調査期間中、いろいろとご協力戴き無理を聞いて戴いた地元の皆さん、整理期間中に草創期土器等について種々ご教示ご助言を戴いた小林謙一、宮坂孝宏、児玉健一郎、前追亮一の各氏はじめとする研究者の方々には謝意を表するとともに筆者の能力不足故にその期待に添えられなかつたことをお詫び申し上げます。また、県文化課の岩永哲夫・飯田博之・石川悦雄・谷口武範の各氏には多大のご協力ご助言を戴いたことを感謝申し上げます。

参考文献

南九州における縄文時代草創期の諸問題 資料集 宮崎考古学会・南九州の縄文時代草創期を考える会 1993

今回、この資料集に掲載した図の加筆等を行つたのでご了承願いたい。全面的な訂正ではない。また、この資料集にはない県内の遺跡のうち隆帶文土器が下記の浦田遺跡と天神河内第1遺跡で各1点、爪形文土器が浦田遺跡で1点出土している。

浦田遺跡 『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集』 宮崎県教育委員会 1985

天神河内第1遺跡 『大淀川右岸農業水利事業国営天神ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 宮崎県教育委員会 1991

堂地西遺跡 『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集』 宮崎県教育委員会 1985

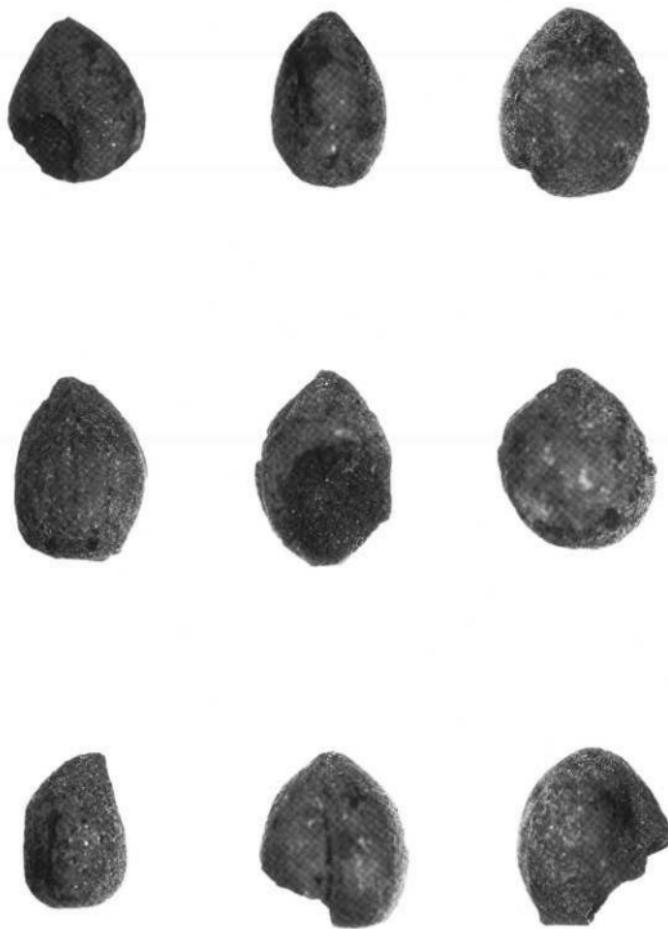
堂地東遺跡 『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集』 宮崎県教育委員会 1985

新田原遺跡 『宮崎県児湯郡新富町文化財調査報告書第4集』 新富町教育委員会 1986

宮崎平野における弥生土器編年試案－素描（Mk. II） 石川悦雄 『宮崎考古第9号』 宮崎考古学会 1984

七又木地区遺跡 『新富町文化財調査報告書第13集』 新富町教育委員会 1992

白鳥平B遺跡 『熊本県文化財調査報告書第142集』 熊本県教育委員会 1994



ツブライ炭化子葉 ————— 5 mm

椎屋形第1遺跡A地区 S A 17出土種実



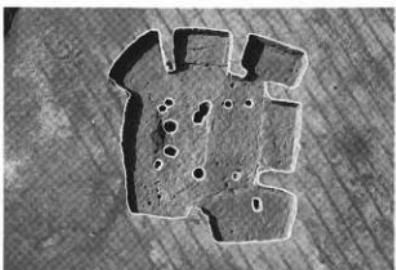
A地区及び西侧工事区全景



A地区全景



草創期遺物出土状況



SA 1



SA 2・3、SB 2・3ほか



SA 3

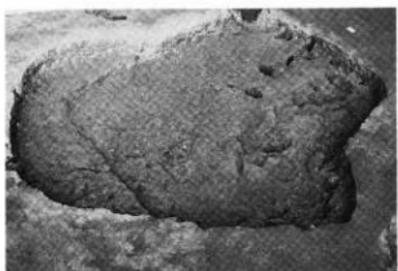


SA 4



SA 5

椎屋形第1遺跡A地区



S A 6・14



S A 7



S A 8



S A 9



S A 10



S A 11

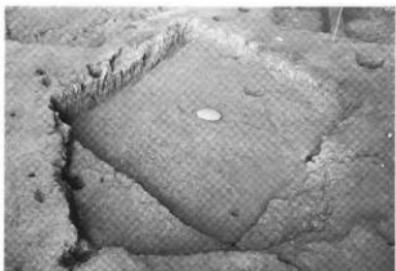


S A 12



S A 13

椎屋形第1遺跡 A地区



S A 15 + 16



S A 18



S A 19



S A 19 小ピット列



S A 19 焼土及び段状土盛り



S C 2 蓋部分（南から）



S C 2 (北から)



S C 2 完振状況（北から）

椎屋形第1遺跡 A地区



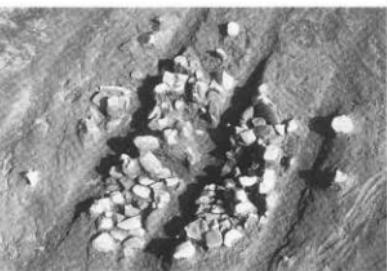
A地区 SL 1



B地区 全景



B地区 S I 1



S I 2



S I 3



S I 4



S I 5



S I 6

椎屋形第1遺跡 A地区及びB地区



S I 7



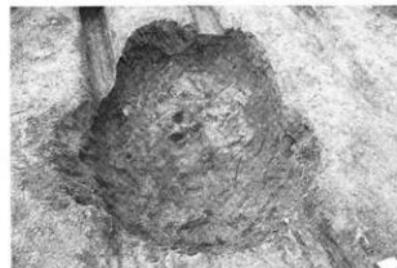
S I 8



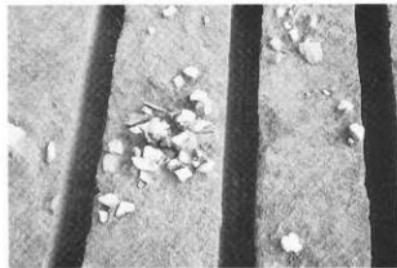
S I 9



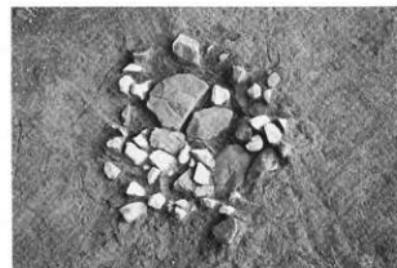
S I 10



S I 11 土坑部分



S I 13

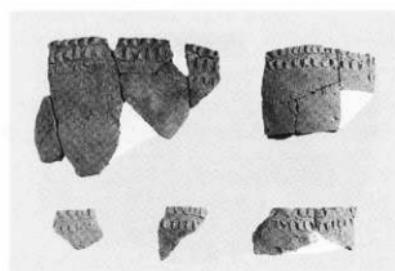


S I 14

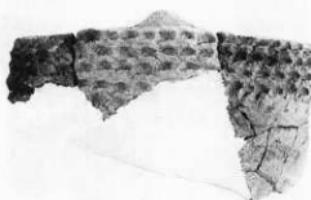


砾群及び S I 10・11 (右端側)

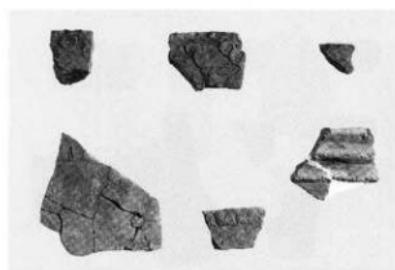
椎屋形第1遺跡 B地区



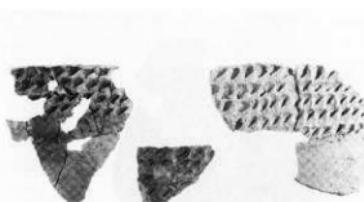
1~2 同一個体



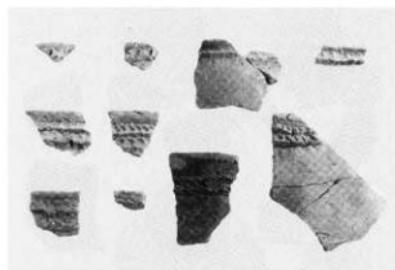
23



3~5 同一個体



24~26



6~15

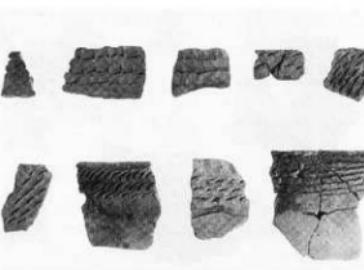


27



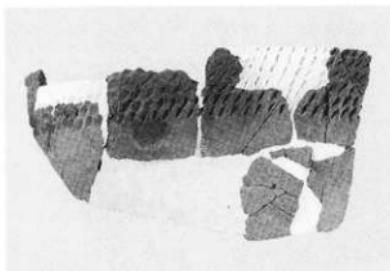
16~22

椎屋形第1遺跡A地区 繩文時代草創期土器（1）



28~36

※左から右、上から下の順



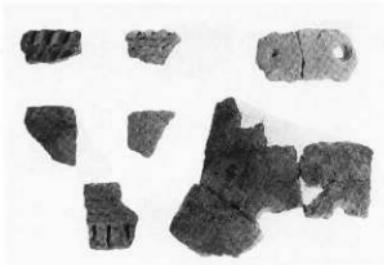
37



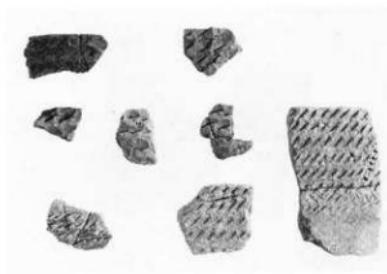
48



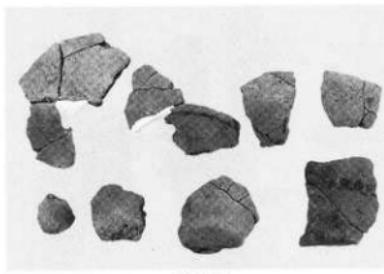
38



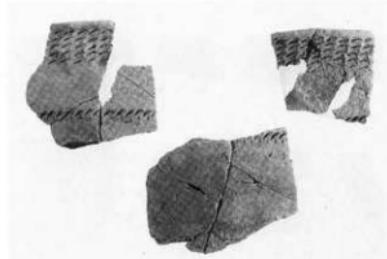
49~55



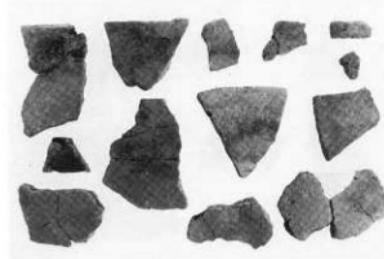
39~46



56~63

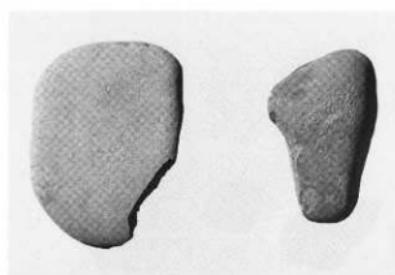


47 同一個体

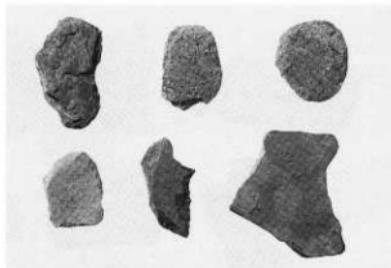


主な胴部片

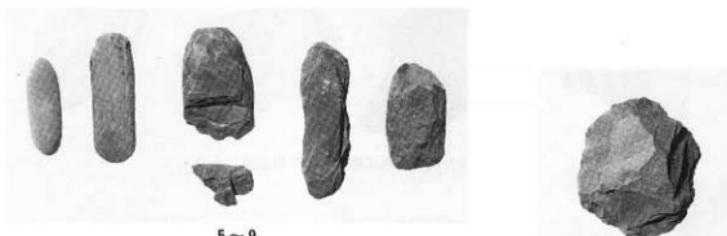
椎屋形第1遺跡A地区 繩文時代草創期土器(2)



1~2



10~14・27

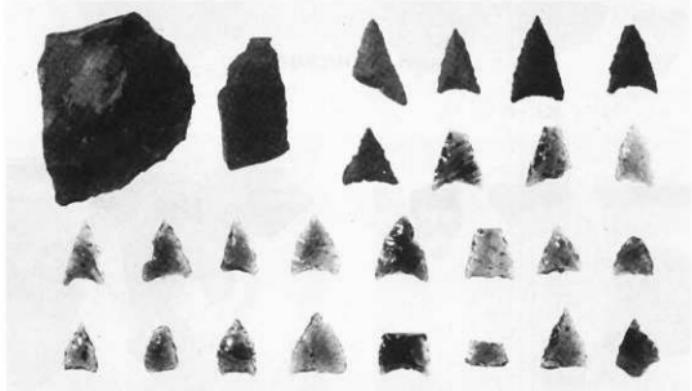


5~9



3~4

24

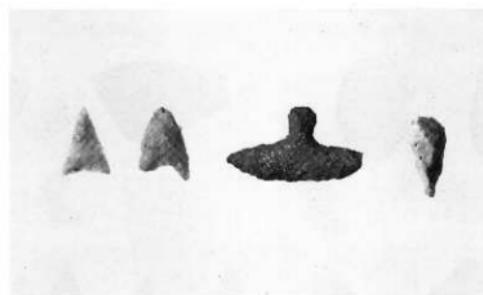


15~16・28~51

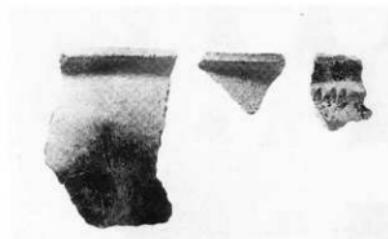
椎屋形第1遺跡A地区 繩文時代草創期石器



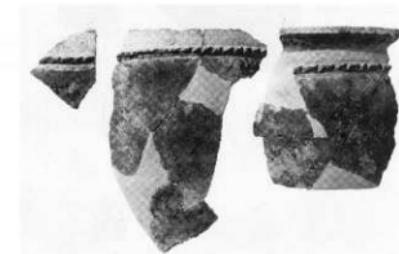
A地区及び西側工事区縄文時代早期土器 1~16



A地区 縄文時代早期石器



S B 6周辺 1~3



SA 1 10・同一個体・1

椎屋形第1遺跡A地区 縄文時代早期土器・石器及び弥生土器(1)



2



6



7



3



11・29



17・42



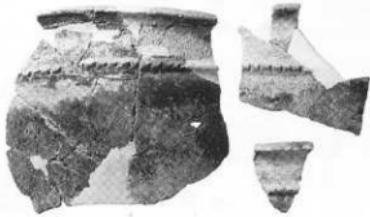
16・35・36



21



4



25・上26・下27



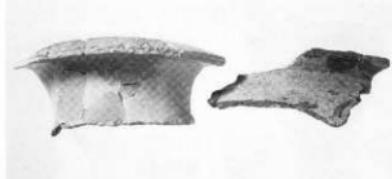
5



34

椎屋形第1遺跡 A地区 弥生土器(2)

12



37・69



53



51・55・56



58・64



44



62・63・93

68



82・83・88



75・76・96・84



49

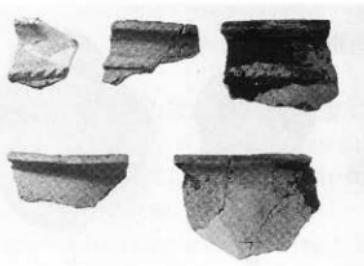


50



65

椎屋形第1遺跡 A地区 弥生土器(3)



上89・90・97 下105・107



上91・92・104 下108・110



71



101



111



1



2・3



12



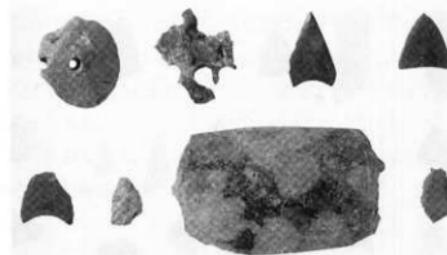
13・14・15



21・22

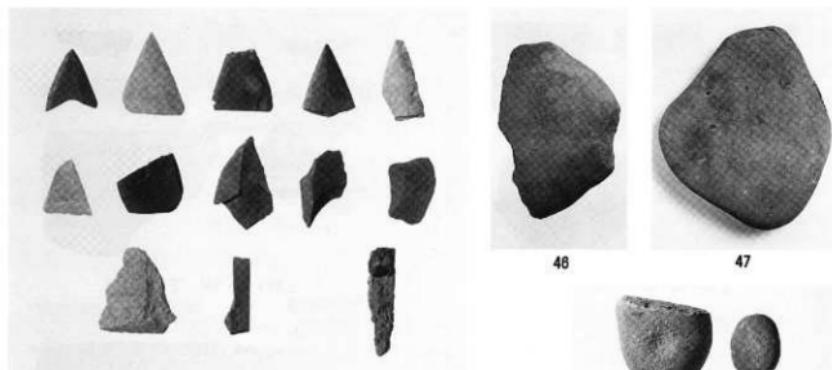


42・43



上4～7 下8～11

椎屋形第1遺跡 A地区 弥生土器(4)及び石器(1) (石器は計測表の番号)



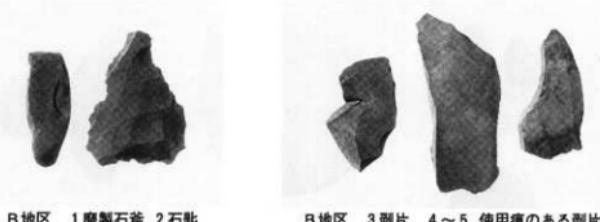
上23~27 中28~32 下33~35



48・49

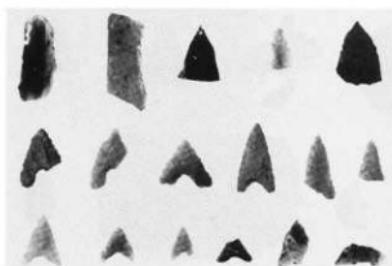
上50~51・54 下55・57

56



B地区 1 磨製石斧 2 石匙

B地区 3 剥片 4 ~ 5 使用痕のある剥片



B地区 6~22 (6~9 スクレイパー 10~22 石鏃)



B地区 出土土器 1~19

椎屋形第1遺跡A地区 弥生時代石器(2)及びB地区 繩文時代早期出土遺物

第Ⅲ章 椎屋形第2遺跡の調査

第1節 調査区の設定と調査の概要

椎屋形第2遺跡は宮崎市大字細江字椎屋形にある。遺跡は標高100m程度である。調査は、グリッド法を用いて行った。磁北を基準とし、東西に算用数字、南北をアルファベットを用いてグリッドを設定した。グリッドの間隔は10mである。

遺跡の調査前は畠地であったので、調査地内のほとんどがアカホヤ層まで削平されていた。当初予想された遺構は、集石遺構であった。試掘調査時に確認されていたためである。表土層を剥いだときにすでに散石遺構が見られた。集石遺構は散石遺構の下に確認されたので、集石遺構をメインとする調査を行った。集石遺構の数が多く調査は困難を極めた。集石遺構が終了間際になり、その下から炉穴が見つかり、終了予定日の延長と、経費の増額を中部農林振興局にお願いし、炉穴の調査を行うこととした。

炉穴は当初、土坑と思い調査を行ったが、幅が狭く深いことが不自然であった。そのうちに、炉部を検出し、ブリッジも遺存していることが判明したため、「連穴土坑」として扱った。

しかし、その後検討を重ねた結果、関東地方でよく使われる「炉穴」の名称を用いるのが妥当との見解に至った。

県内でこれだけ大規模な炉穴の調査は始めてであり、集石遺構の下から炉穴が検出されることを確認できた意義は大きい。

調査の結果、集石遺構69基、散石、炉穴23基、土坑21基、縄文時代早期の土器・石器多数が出土した。

第2節 調査の記録

1 層序（第39図）

椎屋形第2遺跡の基本土層は第39図のとおりである。

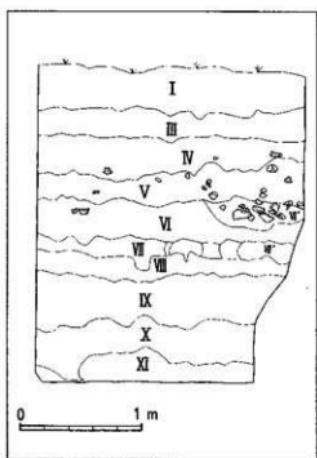
椎屋形第2遺跡では、火山灰の分析を行い、時期決定の一助とした。分析の結果は第3節に掲載したのでご一読いただきたい。

遺物包含層は第V層である。暗褐色硬質土の中に遺物が多く含まれていた。集石の掘り込み面もこの層である。この層の上に光沢のある粒子を含む火山灰を含む層がある。その火山灰は霧島一蒲牟田スコリアの可能性が考えられる。蒲牟田スコリアは層序としてはアカホヤ層下後が確認されている。椎屋形第1遺跡で可能性が考えられた霧島一瀬田尾輕石は確認されなかった。第V層に約15,000年前に降下したと考えられる小林輕石を多く含む層が確認された。この層は旧石器時代の層になるが、この層からの遺物の出土は見られなかった。しかし、炉穴のブリッジはこの部分を意図的に使用しているようである。この層は非常に硬く、それを利用したものと考えられる。

遺跡の北側では、土層の堆積が悪く、早期の生活がシラスの上で営まれていた。南側に下がるにつれて土層の堆積は急激に厚くなっている、そこに炉穴が構築されたものである。

第38図 椎屋形第2遺跡周辺地形図





第39図 椎屋形第2遺跡 基本土層図

I層：暗褐色軟質土 耕作土である。軟らかく粘性が少ない。直径2~3mmのアカホヤ粒をまばらに含む。

II層：漆黒色軟質土 やや粘性を帯びて軟らかく、黒味の強い層である。遺存状況は悪く遺跡内では部分的にしか残っていない。

III層：黄褐色硬質土 ブライマリーなアカホヤ層である。

IV層：黒褐色硬質土 ローム層である。この層の下半部に白い粒子と光沢のある粒子を多く含む火山灰が混じる。

V層：暗褐色硬質土 遺物包含層である。IV層よりも明るい色をしており、VI層をブロック状に含む。

VI層：褐色硬質土 ローム層である。粘性が高く硬い。小さなバミスをまばらに含む。場所によりVII層をブロック状に含むところがある。

VI'層：黒褐色軟質土 集石掘込の埋土である。炭化粒や白いバミスをまばらに含む。粘性は弱くVI層に比べると黒味が強く軟らかい。

VII層：明黄褐色硬質土 小林軽石を多く含みやや粘性を帯びている。基層はローム層である。

VII'層：明黄褐色硬質土 基本的にはVII層と同じローム層であるが、小林軽石をほとんど含まない。

V層：明褐色硬質土 粘性が強く明るい色のローム層である。小林軽石をまばらに含む。細かな炭化粒をまばらに含む。

IX層：明黄褐色軟質土 粘性が強く軟らかいローム層である。バミス、スコリアを含まない。土の粒子は非常に細かく、柔らかな手触りである。

X層：明褐色硬質土 IX層に較べてやや色が暗く、硬い。下部に直径1~2mm程度のバミスを含む。土の粒子もIX層に較べて粗くなり、ややざらつく。

XI層：明淡黄褐色軟質土（シラス） やや土壤化したシラス層である。5mm程度のバミスをまばらに含む。土の粒子はX層よりも大きくザラザラしている。粘性は少ない。

2 繩文時代早期の遺構と遺物

1 土坑（第41～第44図）

土坑は、調査区の中央部分に集中して分布する。C-11・D-11グリッド付近は尾根に近い部分なので土の堆積状況が悪く、開墾により削平も受けているので、遺構の残りは良好ではない。

椎屋形第2遺跡の土坑には、いくつかのタイプが存在する。

1型：円形の土坑。2号・42号・20号

2型：楕円形の土坑。1号・3号・11号・12号・15号・22号

2a：長径の短いもの

2b：長径の長いもの

3型：隅丸方形土坑。10号・26号

3a：大型のもの

3b：小型のもの

4型：足場と炉部を持ち、その境界にはブリッジを持つもの。または、持っていたと思われるもの「炉穴」という。

5型：不定型な土坑。16号・18号

炉穴は、今までスプーン状土坑・連穴土坑と呼ばれていたものである。これまで、関東で多く見つかっている炉穴と類似する事が指摘されていたが、同一のものかどうかが疑問視されていた。今回調査して、時期的には若干の差はあるものの、形態的に同一のものと考えて良いと思われる。

本来ならば、独立して炉穴の頂を設けるべきであったが、整理の都合上土器の注記が調査時に付けた番号で付されていたために今後の混乱を避けるため、あえて調査時に付した土坑としての番号で報告するものである。

第41図の土坑実測図はD-11グリッドに分布する土坑群である。D-11は調査区内でも土層の堆積の薄い部分に当たり、遺構の残存状況は良好とは言えない。

1号土坑

長径が149cm、短径が130cmのだ円形を呈する。東側にテラス状部分を有する。断面形はすり鉢状を呈し、もっとも深い部位分の検出面からの深さは47cmである。

2号土坑

長径が160cm、短径が132cmの円形を呈する。深さは約30cmである。1号土坑に切られている。

10号土坑

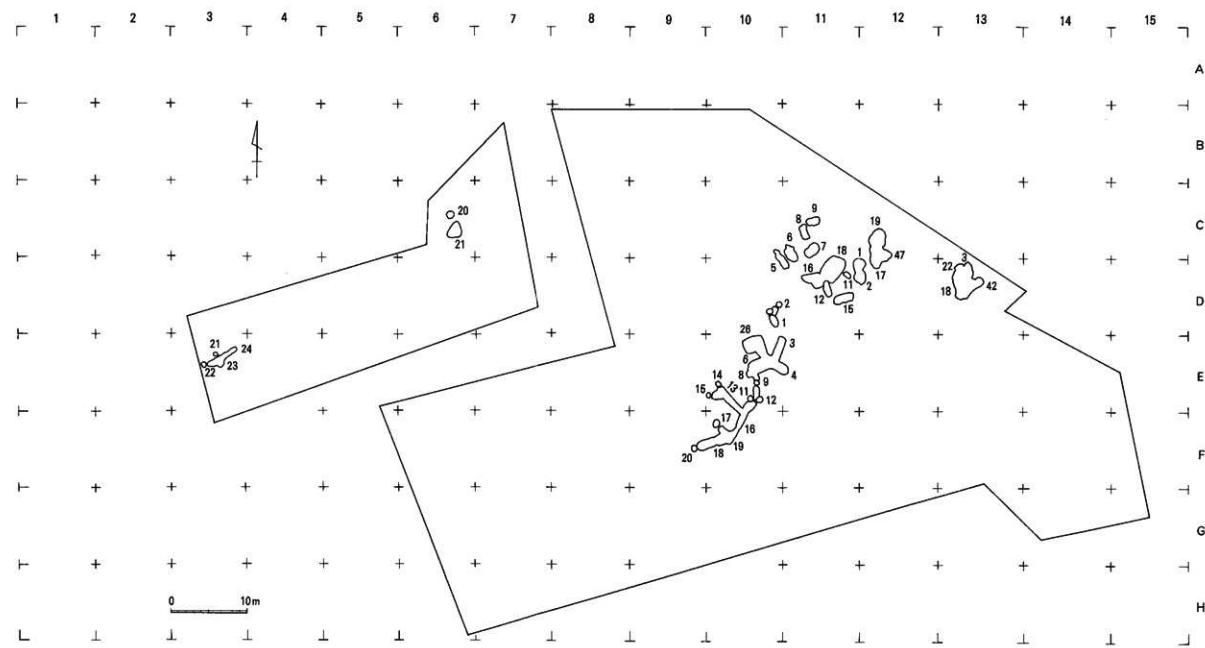
大型の方形の土坑である。長径は308cm、短径は213cm、深さは約20cmである。土坑内に柱穴は確認されなかったので土坑とした。土坑の周囲にも柱穴は確認されなかった。底面は平坦で踏みしめられてはいなかった。

11号土坑

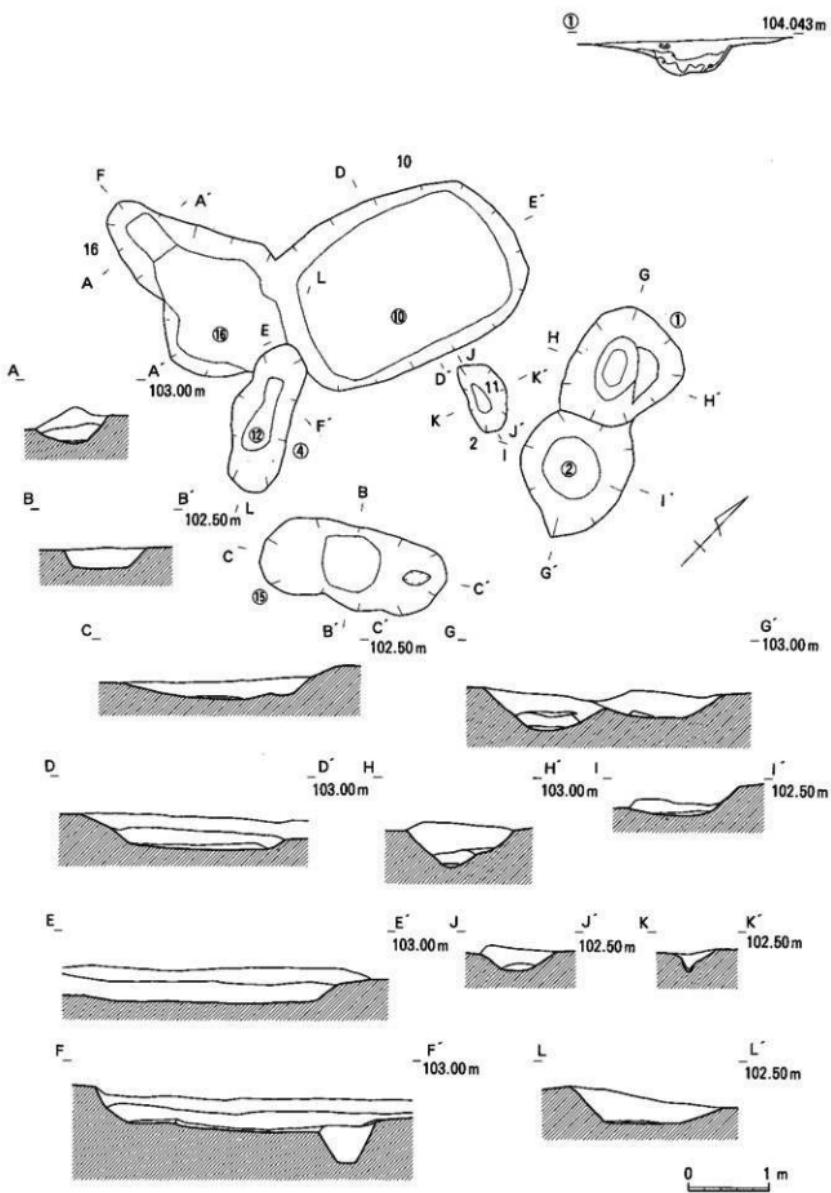
楕円形を呈する土坑である。長径は92cm、短径は50cmである。深さは約20cmで底面は細長く狭い。

12号土坑

長径は188cm、短径は70cm、深さは約45cmの楕円形を呈する。



第40図 椎屋形第2遺跡 土坑・炉穴分布図



第41図 椎屋形第2遺跡 土坑実測図(1)

15号土坑

長径は230cm、短径は100cm、深さは約36cmの楕円形を呈する。東側にテラス状部分を有する。

16号土坑

不定型な土坑で長径が260cm、短径が短いところで78cm、長いところで176cm、深さが約38cmである。この土坑は形態から崩壊した炉穴の可能性も考えられたが、この場所は遺跡が営まれた当時から土の堆積が悪く、褐色土層が薄かったと考えられるため、炉穴を構築するために十分な深さの確保は難しかったと思われる。のことから、16号土坑は炉穴の可能性は極めて薄いと考えられる。16号土坑は、12号土坑に切られているが、10号土坑との切りあいの前後関係は把握できなかった。

第42図はD-13グリッドに分布する土抗群である。

3号土坑

長径は173cm、短径は97cm、深さは約40cm～約66cmの楕円形を呈する。

18号土坑

長径が334cm、短径が234cm、深さは約30cmの不定形で大型の土坑である。中央に長径73cm、短径66cmの落ち込みを持つ。18号土坑は、3号・22号・42号土坑に切られている。

22号土坑

長径は122cm、短径は74cm、深さは約20cmの楕円形を呈する。18号土坑を切っているが、3号土坑に切られている。

42号土坑

長径が110cm、短径が92cm、深さは約20cmの楕円形を呈する。

5号土坑

長径は334cm、短径は102cm、深さは約63cmの長楕円形を呈する。長径の方向は北北西である。中央部にすり鉢状の深い部分を有する。

6号土坑

長径は266cm、短径は144cm、深さは約38cmの長楕円形を呈する。長径の方向は北北西である。南側に向かってなだらかに立ち上がる。5号土坑と6号土坑はC-10グリッド・C-11グリッドにかけて並んで分布する。

7号土坑

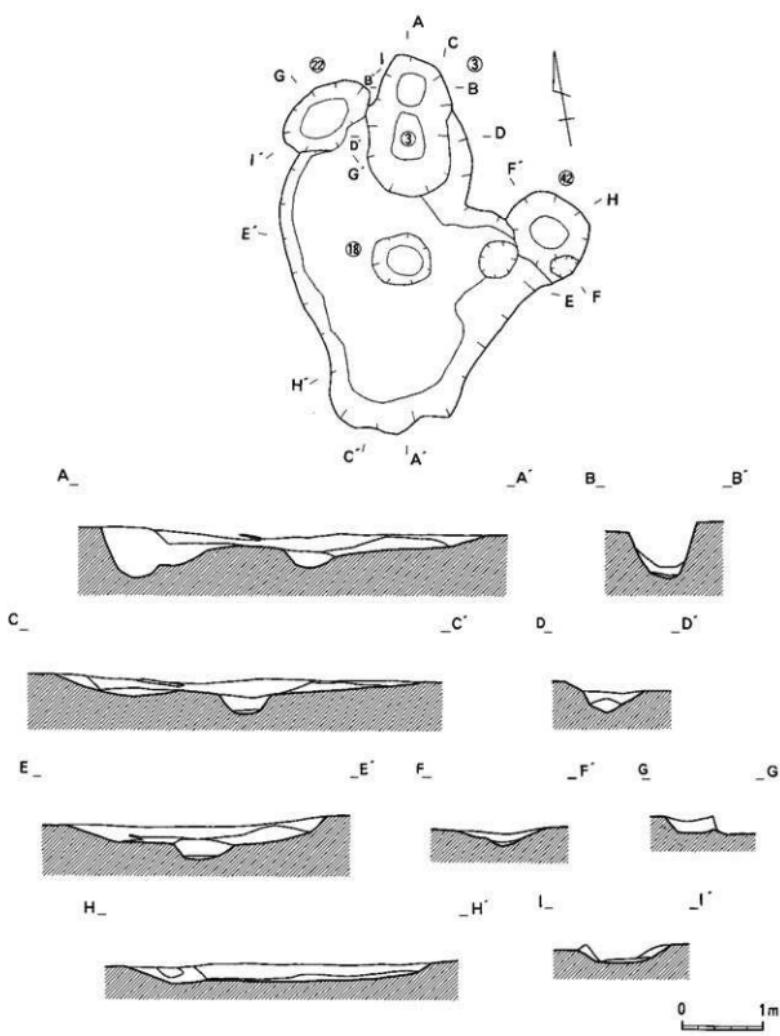
6号土坑の東約1mのところに位置する。長径は246cm、短径は138cm、深さは約32cmの隅丸方形を呈する。底面は平坦である。底面にも周囲にも柱穴は確認されなかった。長径の方向は東北東である。

8号土坑

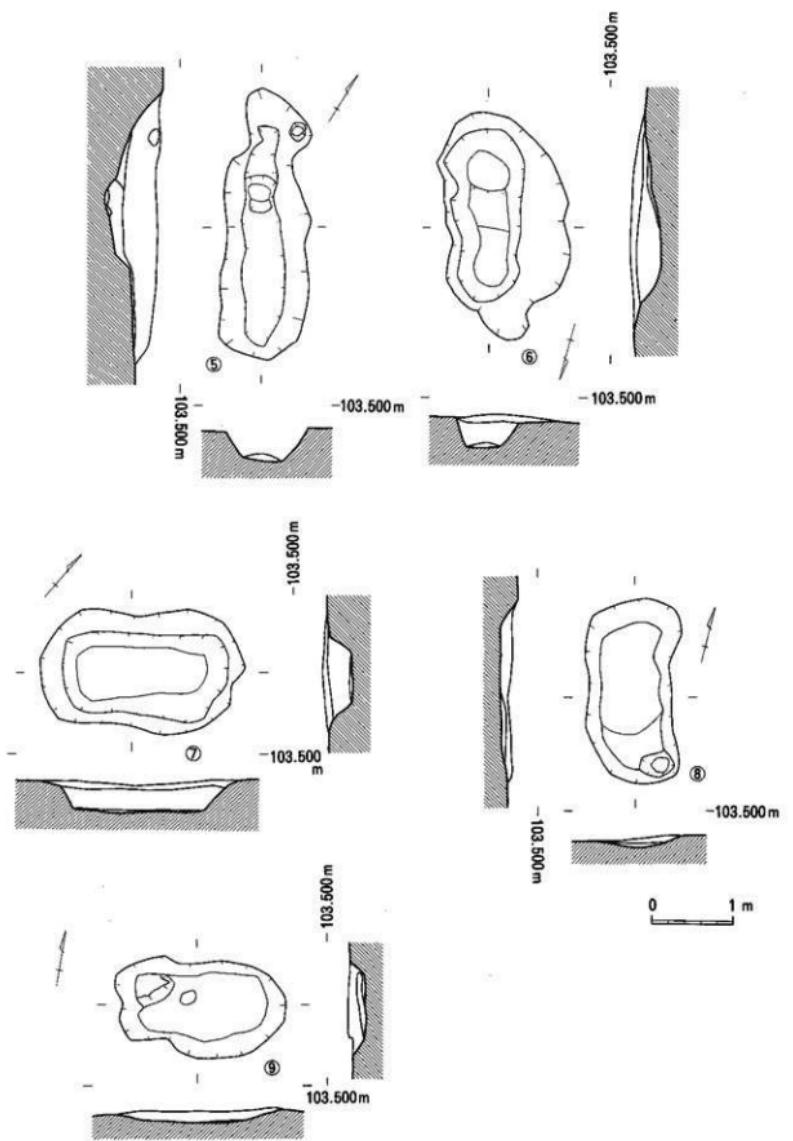
7号土坑の約1m北側に位置する。長径は226cm、短径は102cm、深さは約20cmの隅丸方形を呈する。長径の方向は、北北西である。南側端に長軸42cm、短軸32cmの落ち込みが見られる。

9号土坑

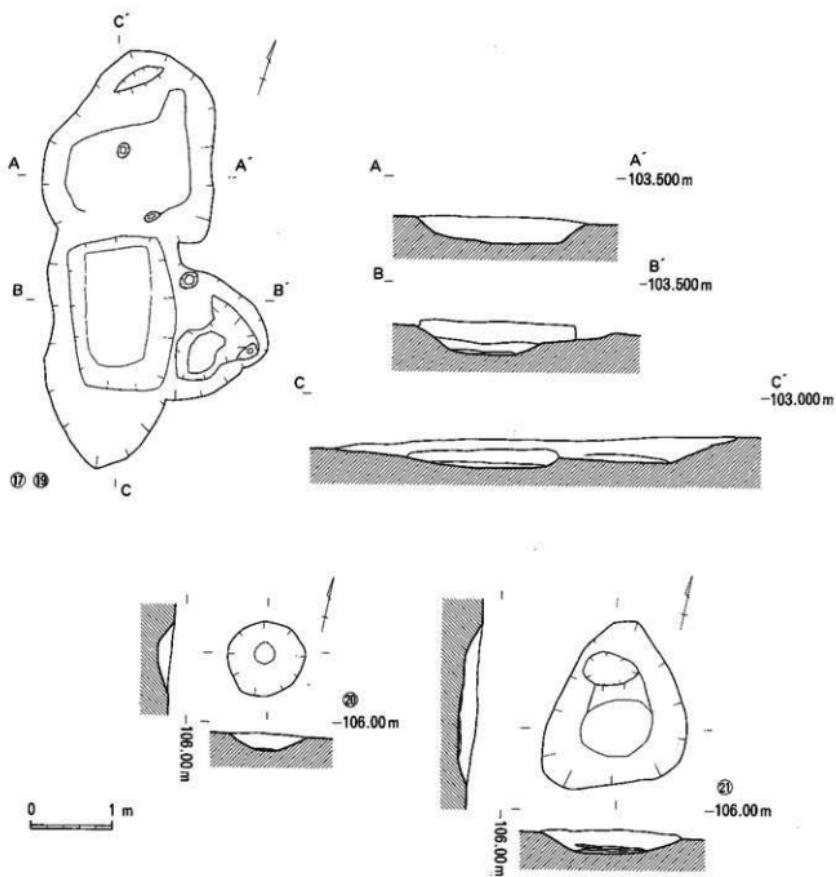
8号土坑のすぐ隣に位置する。長径方向は西で8号土坑と直交する。長径は200cm、短径は118cm、深さは約20cmの隅丸方形を呈する。西側端に落ち込みを持つ。7～9号土坑はC-11グリッドに位置し、5号・6号土坑と近い。7号土坑の約2m南側に16号土坑が分布する。



第42図 椎屋形第2遺跡 土坑実測図(2)



第43図 椎屋形第2遺跡 土坑実測図(3)



第44図 椎屋形第2遺跡 土坑実測図(4)

17号土坑

C-12グリッドに位置する。長径は189cm、短径は129cm、深さは約15cmである。大型の隅丸方形を呈する。すぐ脇に47号土坑がある。

19号土坑

17号土坑のすぐ北側にあり、17号土坑に切られている。長径が209cmで長径方向が東北東を向いている。17号土坑の長軸方向は北北西なので2基の土坑の長軸は直交する。2基の土坑の中に3個の柱穴が見られるが、土坑に伴うものではないと考えられる。土坑よりも新しい時期のものと考えられる。

20号土坑

C-6グリッドに位置する。長径・短径共に95cmの円形の土坑である。深さは約20cmである。すぐ隣に21号土坑がある。

21号土坑

長径は200cm、短径は174cm、深さは約38cmの梢円形を呈する。長径方向は北北西で北側にテラス状部分を有する。

2 炉穴（第45図～第46図）

第45図は「炉穴」の実測図である。この炉穴は、後述する集石遺構に完全にパックされた状態で残されていた。当初炉穴の存在は予想されなかつたが、常々集石遺構の下には何か遺構が有るのではないかとの指摘があった。図らずもこの調査によってその指摘は正しかったことが証明された。遺構の確認は偶然からであった。集石遺構の掘り込みを確認中、異常に深い掘り込みを発見し、さらにそれが横方向に伸びはじめたことが炉穴発見の糸口となった。このため、遺構検出のために遺構の上部がカットされることなしに遺構が検出されることとなつた。遺構は23号土坑から検出された。当初ブリッジや焼土は確認されておらず、深い通路状の遺構かと思われたが、同時に検出した13号・14号土坑にブリッジが残つたこと、炉部から煙道部分に焼土が確認されたことから炉穴であることが確認された。このとき、鹿児島県文化課の新東見一氏ほか多くの方のご教示をいただいた。

炉穴は、大きく3つのブロックに分かれて検出された。1カ所はヤツデ状に炉穴が集中しているE-10・F-10グリッドである。その隣のD-10グリッドにブリッジを持つものが2基切り合つて検出された。調査区の西端のE-3グリッドでは4基切り合つて検出された。炉穴は合計24基確認された。単独で存在するものではなく、すべて切り合つていた。埋土はどの遺構も硬く締まっており、地山のほうが軟らかいという特徴を持っている。ブリッジは崩落したものも多いが、遺存したものもあった。この場合、小林軽石を含む層をブリッジとしていたことが確認された。小林軽石を含む層は外の層よりも硬く、掘り込み面から適当な深さを持っていたためにブリッジとされたと考えられる。

3号炉穴（23号土坑）

幅100cm、深さ約140cmを測る。ブリッジは残つておらず、足場の先端から煙道の端まで320cmを測る。炉部の煙道の真下部分に焼土が見られた。

4号炉穴（24号土坑）

幅120cm、長さ200cm、深さ100cmを測る。23号土坑の足場の延長上に焼土が確認された。

5号炉穴（25号土坑）

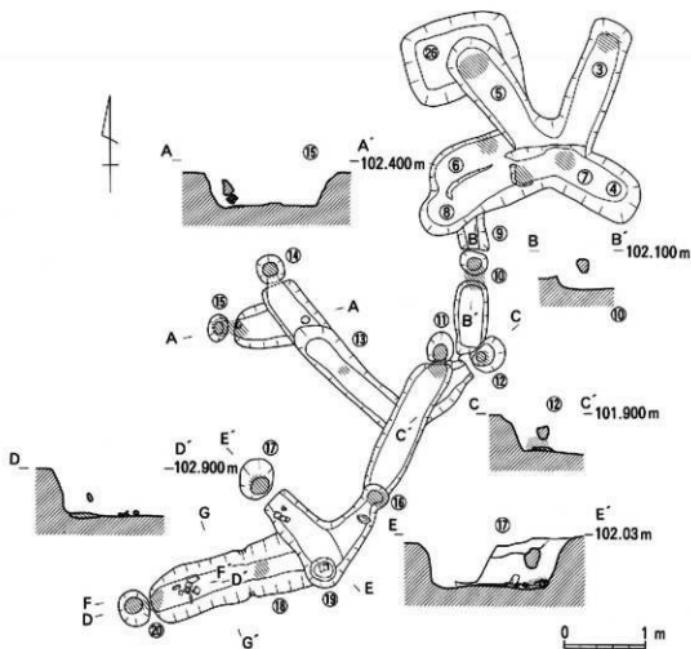
幅120cm、長さ310cm、深さ118cmを測る。26号土坑を切つており、その部分に焼土が見られる。

26号土坑

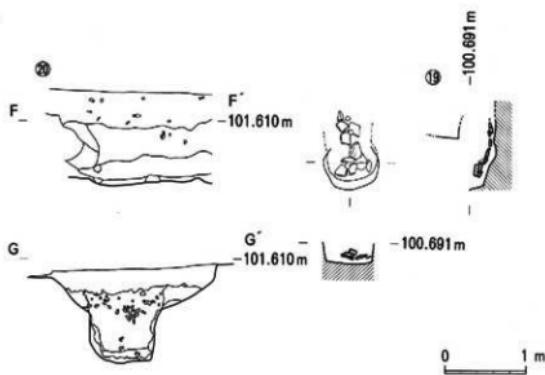
大型の方形の土坑で長径が280cm、短径が200cm、深さ80cmを測る。土坑内に柱穴は確認されなかつた。土坑の周囲の柱穴は時間的余裕が無かつたため未確認である。

6号炉穴（27号土坑）

幅75cm、長さ210cmを測る。25号土坑の足場付近に焼土が見られる。



…焼土



第45図 椎星形第2遺跡 炉穴実測図（1）

7号炉穴（28号土坑）

24号土坑と27号土坑の間に焼土を伴うわずかなほみとして確認された。くぼみは炉部で、足場や煙道は跡形もなく外の炉穴に切られてしまっている。

8号土坑（29号土坑）

幅110cmの足場だけを28号土坑の西に確認した。焼土等は遺存していなかった。

9号炉穴（30号土坑）

30号土坑の足場と31号土坑の煙道部は切り合っている。30号土坑の足場は幅70cm、深さ49cmを測る。

10号炉穴（31号土坑）

ブリッジがよく残っており、ブリッジの下から煙道の下にかけて焼土が遺存していた。31号土坑の足場は幅83cm、長さ180cm、煙道部は短径60cm、幅68cmを測る。

11号炉穴（32号土坑）

ブリッジ部分は崩落していたがブリッジの痕跡が見られた。また、焚き口（足場の炉部側の末端）から煙道の真下まで焼土が残っていた。煙道の上部まで焼けた痕跡が見られる。足場の幅90cm、煙道の長径75cm、幅67cmを測る。足場は37号土坑の煙道端まで続くように見えるが、ここまで長さは330cmを測るので37号の煙道との間にもう1基検出できなかった炉穴が隠れている可能性も否定できない。

12号炉穴（33号土坑）

ブリッジが遺存しており、31号土坑の足場を切っている。煙道部分の短径は87cm、幅は70cm、足場は32号土坑に切られている。

13号炉穴（34号土坑）

35号土坑の足場の途中に焼土が確認されるだけである。足場や炉部の痕跡は見られない。

14号炉穴（35号土坑）

足場の幅93cm、長さ120cm、深さ96cm、煙道部分の長径70cm、幅65cmを測る。ブリッジは遺存していないが痕跡が確認された。足場に直径40cm、深さ22cmの柱穴が1個確認された。35号土坑からほぼ垂直に枝分かれしているのは36号土坑である。

15号炉穴（36号土坑）

足場の長さ110cm、深さ84cm、煙道部分の短径52cm、幅70cmを測る。ブリッジは良く残っており、焚き口に底を抜いた土器が口縁部を下にして斜めに置かれていた。底部は焚き口が側に向いて傾斜していた。焚き口から煙道部分にかけて焼土が良く残っていた。炉穴から遺物が出土することは珍しいことではないが、完形に近い土器が焚き口に据えられて出土したのはこれが始めてである。用途は不明である。土器に関する記述は遺物の項で行いたい。

16号炉穴（37号土坑）

32号土坑の足場端に煙道を持ち、焼土とわずかなブリッジ痕が確認された。足場には長径55cm、短径18cmの柱穴状の遺構が確認された。足場の幅80cm、長さ130cm、炉部の長径65cm、短径46cmを測る。

17号炉穴（38号土坑）

足場の幅96cm、長さ230cm、深さ118cm、煙道の長径99cm、短径80cmを測る。ブリッジが良好な状

態で遺存していた。焚き口から煙道にかけて大小あわせて10個程度の石が配置されていた。焚き口側には高さ27cm、幅16cmの角の丸い方形の砂岩が立ててあった。この石は肉眼では赤変が認められなかつた。この石の周りに赤変して拳大に割れた砂岩が5~6個置かれていた。煙道内にも直径20cm程度の石を中心に4個の赤変して割れた砂岩が配置されていた。この炉穴も煙道の壁が高さ20cm程度赤変していた。煙道部は焚き口部よりも5cm程度掘りくぼめられている。

19号炉穴（40号土坑）

時間の関係で煙道部分しか検出できなかつた。煙道部分の長径65cm、短径56cmを測る。煙道部分に8個、焚き口部分に7個の扁平な石が配置されていた。石はいずれも床面からやや浮いた状態で確認された。この炉穴の足場は南側に向かって伸びていたのでこの他にも時間の都合で検出できなかつた炉穴7が存在する可能性が考えられる。

18号炉穴（39号土坑）

40号土坑から41号土坑に通じる通路上に焼土とブリッジの痕跡が認められたものである。幅124cmを測る。ブリッジ痕よりも焼土が41号土坑側にあることから、まず39号土坑が作られ廃棄されて40号土坑の方へ拡張され、最後に41号土坑が作られたと考えられる。

20号炉穴（41号土坑）

足場の幅は122cm、長さ240cm、深さ125cm、煙道の長径89cm、短径74cmを測る。足場に9個の石が配してあり、中に炭化物混じりの焼土が確認された。配石付近の壁にはブリッジの痕跡は見られなかつた。石はどれも良く焼けて赤変している。焚き口から煙道にかけて焼土が多く確認された。ブリッジの遺存状況は良好であった。

1号炉穴（13号土坑）

3号炉穴の北に2基切り合って分布する。足場の幅88cm、煙道の長径80cm、短径76cmを測る。ブリッジが遺存する。炉部の壁面が焼けている。

2号炉穴（14号土坑）

1号土坑に切られている。ブリッジは崩落しており痕跡が残されている。足場の幅76cm、煙道の長径88cm、短径83cmを測る。煙道内に焼土が残されていた。

21号炉穴（43号土坑）

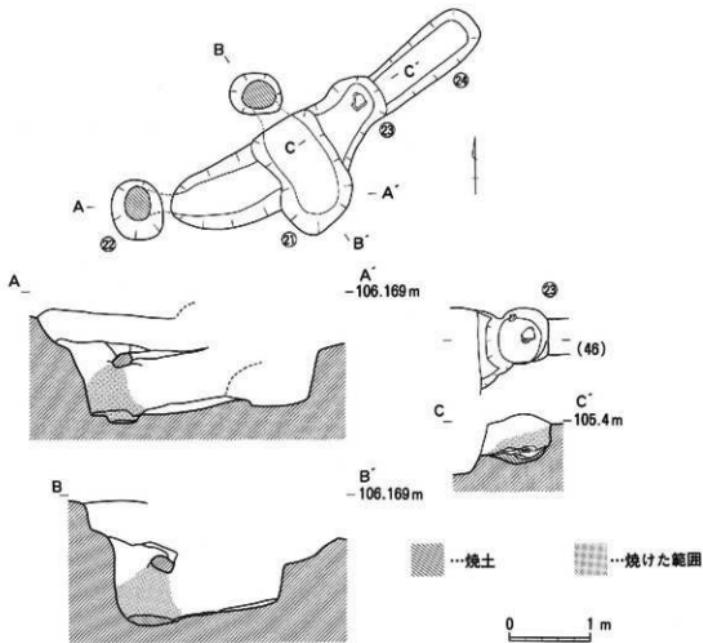
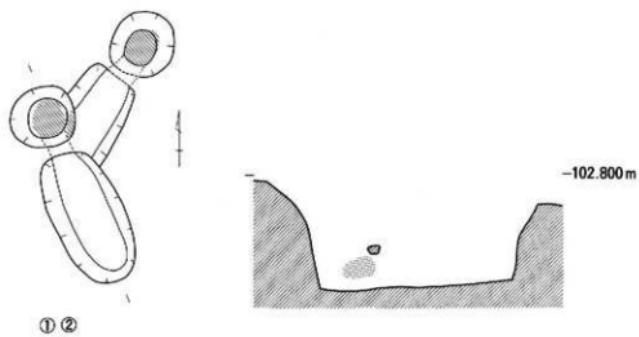
E-3グリッドに分布する炉穴群の中の1基である。その中でも最も西側に位置している。足場の幅86cm、長さ136cm、煙道部の長径74cm、短径62cmである。煙道内に焼土が確認された。煙道は直径40cm、深さ10cmにわたって掘り窪められている。煙道の壁面まで焼けている。

22号炉穴（44号土坑）

足場の幅80cm、長さ124cm、煙道の長径62cm、短径53cmを測る。43号土坑とほぼ直交する。ブリッジは良好に遺存しており、ブリッジの下面も焼けている。煙道の壁面は広い範囲で焼けている。炉部は直径73cm、深さ10cmにわたって掘られている。この中に焼土が入っている。

23号炉穴（45号土坑）

44号土坑と46号土坑の間に炉部と足場の一部だけが残された遺構である。検出時扁平な石が確認されたが、この石は肉眼観察の結果火を受けた可能性が考えられる。しかし、断面観察を行ったところこの



第46図 椎屋形第2遺跡 炉穴実測図(2)